
世界征服を企む漢達

九条 水菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界征服を企む漢達

【Nコード】

N9450T

【作者名】

九条 水菜

【あらすじ】

兄弟喧嘩が原因で聖域を飛び出したカノンは、神奈川県川崎市高津区溝口にたどり着く。…行く当てがないカノンはひょんなことから知り合いになった怪人に紹介され、なんやかんやで世界征服を企む悪の組織『フロシャイム川崎支部』に居候することになってしまったのだった。天体戦士サンレッド…この話は、神奈川県川崎市で繰り広げられる善と悪の壮絶なる戦いの物語である…たぶん…。ハーデス聖戦後、黄金聖闘士復活前提で話を進めていきます。

設定（前書き）

この回は設定のみです。

のちに付け加えるかもしれません。

設定

・天体戦士サンレッド

世界征服を企む悪の秘密結社である怪人組織フロシヤイムと、彼らの野望を阻もうとする正義の味方サンレッドとの対峙構造を主軸として、ときに行われる戦い、馴れ合い、心温まる友情などを描く、特撮変身ヒーロー物のギャグ漫画。

舞台は神奈川県川崎市。…主に溝口周辺が舞台。

現在もヤングガンガンで連載中。

・聖闘士星矢

この世に邪悪がはびこるとき、必ずや現れるという希望の闘士…聖闘士。その拳は空を裂き、蹴りは大地を割るという。彼らは神話の時代より女神アテナに仕え、武器を嫌うアテナのために素手で敵と戦い、天空に輝く88の星座を守護としてそれを模した聖衣と呼ばれる防具を纏う。6年もの厳しい修行を経てアテナの聖闘士となった少年星矢が、同じ境遇の仲間の聖闘士たちとともにこの世に蔓延する邪悪と戦う。

…この作品内では、戦いが終わり、三界神…アテナ・ポセイドン・ハーデスの話し合いの結果、黄金聖闘士+ が復活したという前提で話を進めていきます。

現在、チャンピオンにて、外伝が連載中。

設定（後書き）

もし、誤字脱字、誤りがあったら、ご指摘してくださるとうれしいです。

FIGHT 1 溝口に現れた鬼

FIGHT 1 溝口に出現した鬼

「つたく…あの愚兄が…」

ブツブツ文句を言いながら歩く男がいた。

服装こそは…まあ…ジーンズにシャツというラフな格好だが…

明らかに日本人…というか欧米人でも珍しいのでは？と思うような長い青い髪…

しかもかなりのイケメンの男だった。

…彼の名前はカノン。

職業は自宅警備員…ようは無職の28歳独身。

日本人ではなくギリシヤ人だ。

…なぜ、そんな男が日本に…しかも神奈川県川崎市高津区溝口に
いるのだろうか？

もちろんこれには、わけがあった。

（時をさかのぼること一時間前）

「こらカノン！！！」

ギリシヤの聖域内にある十二宮の一つ…双児宮…

そこから怒鳴り声が沸き起こった。

「貴様はいつになったら掃除・洗濯・料理をするのだ！！
すべて私にまかせっぱなしではないか！！！」

カノンの同居人であり双子の兄のサガが、まだ自室でグツスリの力
ノンの頭に拳骨を落とした。

「ついつてえ!!!何しやがんだよ…朝っぱらから…」

「もう十時だ!!この愚弟が!!」

「あああ…じゃあ起きるよ。起きればいいんだろ？」

もぞもぞと起き上がるカノン。

「まったく…いいか？お前はもう28歳だ。

さっさと私から自活しろ。さっさと職につけ。

そうでなかつたら一緒に住んでいる以上、家事をこなせ。

いつまで居候する気だ？」

まるで母親のように口を酸っぱくするサガ。

カノンはめんどくさそうに口を開いた。

「でもよお…仕事がねえのはサガのせいだろ？」

俺がアンタの後任の双子座ジエミのセントの聖闘士だったのに、復活したアンタは
教皇職補佐兼双子座の聖闘士になったんだからな。

…つたく…そろそろ聖闘士は辞めて、教皇職補佐一本に絞れよ。」

「それはダメだ。」

「なんでだよ!!」

「とにかくダメなものはダメなのだ。

だからとつと就活に行け。…この愚弟が!!」

去りかけたサガ…だったが…

「そうだ…ひとつ言い忘れていたな…」

やけに明るい笑顔をうかべて振り返るサガ…

「近頃…私が雑兵を恐喝して金を奪う事件が多発しているとかないとか…」

ギクウー！…とするカノン…冷汗が滝のように流れる…

「へ…へえ…そーなんだ…さあ…俺は出かけないと…」

「待てカノン。…お前はこの兄に隠していることがあるのではないか？」

ニコニコと笑うサガ…

「…答えないのなら…仕方ないな…」

両手を頭上でクロスさせるサガ。

「そ…そのポーズは…！！ま…待てサガ！じっくり話し合おう！！」

カノンが必死に止めようとした。

そのポーズは双子座最強の技…銀河をも砕く『ギャラクシアン・エクスプロージョン』…

生身で受けたら…チリになって消える可能性大…

「問答無用だ！！ギャラクシアン・エクス…」

「やめてくれ！！！！」

……

……

「…あれ？」

何も起こらない…見るとサガが撃つ寸前の格好で硬直している。

「くっ…こんな時に…邪魔をするな黒!!」

「…説教でそんな技使うお前がおかしいと私は思うがな…」

髪の色が変色しまくっているサガの口から発せられる言葉…

そう…サガは二重人格…

先ほどまでカノンを殺そうとしていたほうが白サガ…

つまり外面だけは神のように優しいがカノンには全然優しくないサガだ。

…もう一つの人格は黒サガ…

こちらは白サガの逆…のような存在で、外面は完全に悪…なのだが、なぜかカノンにだけは甘い…

謎の存在だ。……まあ…どっちも厄介なものには変わらないが…

「説教ではない!愛の鞭だ!!」

「それが説教だ!…まったく…人はカノンくらい悪なのが丁度いいのだ。」

「何を言う!!そもそもお前がカノンを肯定するから、

カノンがああ育ってしまったのではないか!!」

「お前の教育方法も悪いだろ!!」

「だいたい、お前は私に寄生する分際で…発言をわきまえろ!!」

「そうは言うが、私のおかげで今のお前がいるのではないか?

私に感謝してほしいくらいだ!!」

「それはこっちのセリフだ!!」

そもそもだなあ…」

「……」

終わる気配のない白と黒の喧嘩…

…カノンは決意を完全に固めた…
…家出をしよう…と…

（回想終了）

という感じで光の速さで海を渡り…まあ…簡単に言つと日本にカノンは密入国した。

日本にはサガの上司であり、カノンの元上司…城戸沙織が総帥を務めるグラード財団がある。

一文無しのカノンはそこで金を貸してもらおうと思つたのだが…

…よくよく考えると足が付く可能性大だ。

そんなことをしたら、確実に喧嘩の終わったサガがカノンの居所をすぐにつきとめてしまうだろう…。

（どうしようか…）

とりあえず、その辺を歩いていたら、溝口にたどり着いたというわけだ。

…まさか今更帰れない…

その時だった…途方に暮れるカノンの前に現れた謎の影…。

…はたして…それは敵か味方か！？

FIGHT 1 溝口に現れた鬼（後書き）

えっと…『鬼』というのは、LCにでてくるカノンの前世が『カノンの島の鬼』と呼ばれていたところから取りました。

こんな感じで不定期でやっていきます。
よろしく願います。

FIGHT 2 魔界の狂えるキバ

FIGHT 2 魔界の狂えるキバ

「ん…あれは…？」

カノンがぶらぶら歩いていると、通りの真ん中にポツン…と立っている影…

…青いオオカミのようなぬいぐるみ…いや…かすかに小宇宙コスモを感じるから生物が立っている…

数分くらい「何するのかなあ〜」っと思ってみていたカノンだったが、

ほとんどオオカミは動かない…

動くといっても、二・三歩歩いてキョロキョロとあたりを見わたすくらいだった。

「なんだお前…」

カノンがオオカミの前に立って見下ろすと、オオカミはカノンを見上げた。

「……………」

「……………おまえ…迷子か？」

「……………」

何も答えないオオカミ…はあ…とカノンはため息をついた。

「…ったく…仕方ない。…どうせ迷子なんだろう？…家はどこだ？…文字くらい書けるだろ？…連れて行ってやるよ。」

そう言って紙とペンを出した。

「オマエ…チユキ！」

オオカミはカノンを指さして言った。

「チユキ！？…す…好きのことか？」
「……………」

無表情のままのオオカミ…だったが、コクリとつなずいたところを見るに…

『好き』と言っただけ。

なんか照れてしまうカノンだった。

「ま…まあ、そこに住んでる場所と名前かけや。」
「……………」

ただたどしい字で何かを書き始めるオオカミ…。

「どれどれ…『ふるしやいむ』？なんだそりゃ？

マンシヨンの名前か？」

「オマエ…コロチユ！」

今度は『殺す』と言われた。

「こ…殺すだと？…お前ではこのカノン様には百年たってもかなうわけなからうが。」

…まあ…探してやるからついてこい。
えっと…『ヘルウルフ』。」

用紙に書いてあった名前を呼び、カノンは歩き始める。
後ろからトコトコとついてくるヘルウルフ。

(まったく…こんなことしてる暇ねえのに…)

ちっ…と心のなかで舌打ちをするカノン。

(…まあ…いい。こいつの仲間から礼をたんまりもらえばいい。
その礼を元手になにかする事も出来るし…)

「あれ？ヘルウルフじゃない？」

前方から兜をかぶり、紫色のマントですっぱり身体を覆った男が現れた。

…手にはマルツのレジ袋を持っているところを見ると、買い物帰りなのだろう。

「どこいったたの？ウサコツツたちが心配してたわよ。

それに…この人は？」

「カノン…チュキ！」

「そう、カノンさんっていうんですか。」

「ああ…迷子だったみたいなんだな。」

引き取ってくれたらありがたい。」

「ありがとうございますカノンさん。」

あっ…申し遅れました。

ワタシ、ヴァンプと申します。

よかったら礼をしますんで、ウチにきませんか？
もう夕方だから夕ご飯ご馳走しますよ。」

夕ご飯と聞いて、カノンの目の色が変わった。

「ほんとか！すまんなあ。」

「いえいえ、ウチ、人数多いので一人くらい増えてもなんともありませんから。」

首を上下させて笑うヴァンプ。

「…そんなに大人数なのか？」

「ええ。だってワタシ、フロシャイムの川崎支部で將軍やっていますんで。」

「ふるしゃいむ？なんだソレ？」

首を傾げるカノン。

ヴァンプは笑って平然と答えた。

「世界征服をたくらむ悪の組織ですよ。」

…と…。

FIGHT 2 魔界の狂えるキバ（後書き）

『魔界の狂えるキバ』っていうのはヘルウルフの通り名です。

FIGHT 3 潜入！！フロシャイムのアジト！

FIGHT 3 潜入！！フロシャイムのアジト！

「う…うまい…」

白米を口に入れたカノンは思わずつぶやいた。

隣の宮：巨蟹宮の主、デスマスクも結構な腕前だが、それとはまた違う美味さだった。

なんというか…こういうのを家庭の味…というのだろうか…

…物心がつく前に親を亡くし、聖域の非常食に近い料理のようなモノを食べ…

海界で過ごすようになってからは、サバイバルに近い魚料理を食べていたカノンの知らない暖かい味だった。

「だよね〜ヴァンプ様の料理はおいしいよね。」

隣に座って味噌汁をすすっている、ぬいぐるみのウサギ…型の怪人が答えた。

…カノンは今、悪の組織・フロシャイム川崎支部にいる…のだが…

(こいつら、本気で世界征服する気あるのか?)

この支部とはいかが…ごく普通の二戸建て住宅。築23年、木造2階建て、庭付き。

玄関に回覧板が置いてあったところを見ると、町内会にも所属しているみたいだし…

夕飯をとるのはちゃぶ台の上だし…

(まあ…おいしいけど…) 白米・味噌汁・鶏のから揚げが食事だし…

「はいはい、おまたせ。追加のから揚げよ。」

…ここを統括する將軍…ヴァンプが鶏のから揚げがどっさり盛られた皿を台所から運んできた。

(…この礼の仕方といい…主婦か!?)

「あれ?カノンさん、食べないんですか?」

口をもごもごさせていうのは、全身黒タイツの男…この戦闘員だ。

「い…いや。今からもらう。」

と言ってカノンは慣れない箸でから揚げをつまみながら…ちらりと戦闘員を見た。

…彼には口がない…

なのに茶碗を持ち…口はもぐもぐと動いている…

どうやって食べているんだ!?

失礼かと思っただが、じいゝと見る。

戦闘員は気が付かないらしく…箸で器用に白米をつかむと…

「そっといえばカノンさん…どこ出身なんですか?」

ヴァンプが話しかけてきたので戦闘員から視線を放した。

「ギリシャだな。」

「そ…そんな遠くからですか!?!?」

「まあ…兄貴といろいろとあつてな…。」

聖闘士ということは伏せたが、ここにいたるまでの大方のことを話す。

「それ…きつとお兄さんはカノンさんのことを心配して言っているんだと思うの、私。」

私にも弟が一人いるんだけど…ほんとにもうニートだったからフロシャイム静岡出張所に就職させたんだけど…

まだまだ半人前だから、帝王学をたまに教えてあげてるのよ。

『本人の将来は本人で』って私、分かつてはいるんだけど心配で心配で…。」

「はあ…そうか…。」

「ねえカノンさん。…よろしかったらお兄さんの事が落ち着くまで、ここにいたら？」

「えっ！？いいのか？」

驚いてヴァンプをマジマジとみるカノン。

「平気平気。一人居候が増えても問題ないし。」

「しかし…世界征服が…」

「それは大丈夫！当分できないから。」

キツパリと言い放つヴァンプ。

…そこは自信満々に言うところじゃないだろ…！

…っとツッコミそうになったが…

「すまん。世話になるな。」

まあ…住処と食べる心配がなくなっただし…いいか。

と思い直し、少し頭を下げるカノンだった。

FIGHT 4 ミイラの呪い

FIGHT 4 ミイラの呪い

「…つたく…これで本当に世界征服する気あるのか？」

モツプがけをしながらカノンはつぶやいた。

將軍の小宇宙は白銀聖闘士並み…つまりカノンには到底かなわないレベルだし…

部下たちは…まず戦闘員は雑兵レベルだし…

オオカミ型怪人のタイザはカノンがみるかぎり『寝る』『食う』しかしていないし…

初めてであった怪人のヘルウルフとその仲間…ウサコッツ・デビルネコ・Pちゃんにいたっては、ぬいぐるみ型怪人だし…

「おい、ヴァンプさん！次はなにすりゃいいんだ？」

「あら、モツプ終わったの？ありがとうカノンさん。」

台所から顔を出した割烹着姿のヴァンプ…

明らかに悪の組織の將軍のイメージからかけ離れている。

「そうね…それじゃあ…」

「何やってるんだよカーメン！！」

「つか逆恨みすんなよ、溶かすぞ！！」

「うつせえよ。呪うぞ！！」

玄関がなにやら騒がしい…

「あらもお…喧嘩はやめなさい、カーメンマン君、メダリオ君。」

ヴァンプはコンロの火を止めると、玄関に走った。
カノンも後を追う。

そこにいたのは…干からびたミイラ怪人とピンク色で筋肉ムキムキで両肩に砲台を担いでいる怪人だった。

「ん？そいつは？」

ピンクの怪人がカノンに気が付いた。

「ああ…しばらくウチに居候することになったカノンさん。

カノンさん、こっちのミイラみたいな怪人がカーメンマン君。

それでこっちの怪人がメダリオ君。

二人とも川崎支部の怪人よ。

………それで、どうしたの二人とも？」

「俺は何もしてねえよ。」

「お前が前に飛び出したから、車が側溝にはいったんじゃねえか。」

見ると中古車と思われるビッツが側溝に片輪落ちている。

「だいたい、お前が安全運転に心がけてないからいけねえんだろ？
あんなサングラスかけて、かつこつけて運転しているのがいけねえ
んだ。」

「お前こそ、しっかりと周囲を注意しねえからいけねえんだ。
いい加減、呪うぞ！！」

「事故は100%運転者が悪いんだよ！」

「被害者にも責任あんだろ！？」

「はいはい、二人とも落ち着いて。」

ヴァンプがいつまでも言い争いを続けそうな二人の間に入る。

「とりあえず、このままじゃ近所に迷惑だから、車をひきあげようよ。」

……近所迷惑を悪の組織が考えていていいのかよ……

「ヴァンプ様：そうしたいのはやまやまなんですけど……俺、昨日レッドに腕折られてて……」

確かにメダリオの片腕にはギブスがまかれていた。

「そうだったわね……困ったわ……私、明日は町内の清掃だから、手を痛めたくないのよ……」

そういう問題か!?

心の中でツッコむカノン……

……カーメンマンはミイラだからヨボヨボで力なんて皆無そうだし……

……ヘルウルフたちは無理そうだし……

……戦闘員とタイザって怪人は留守だし……

「……仕方ない……」

カノンは指一本で車を持ち上げると、側溝から出した。

「ここでいいか、カーメンマン？」

「あ……ああ……」

なるべく丁寧におろすカノン。

「すごいわカノンさんー!!」

「レベル高え〜。」

感心するヴァンプとメダリオ。

「……このくらい出来ないで世界征服なんてムリだろ……」

思わずそうつぶやくカノンだった。

FIGHT 4 ミイラの呪い（後書き）

ミイラはもちろん、カーメンマンのことです。

ちなみに彼の必殺技は『太古の呪い』…。

メダリオとカーメンマンは悪友同志って感じですね。

……あまり悪友感がだせませんでしたか……

FIGHT 5 ヴァンプ、殺人兵器を手に入れる！

FIGHT 5 ヴァンプ、殺人兵器を手に入れる！

「カノンさんって…プラモデル得意ですか？」

「プラモオ〜？」

寝転がってテレビを見ていたカノンは、青白い顔のヴァンプを見上げた。

「悪い…あまり得意ではない。

…というか…遊んでいる暇があるなら、さっさと世界征服しろよ！」

「遊んでなんかいませんよ！！

本部から送られてきた『RX77+』を組み立ててたんです！！

「…なんだそりゃ？」

みるとヴァンプの足元には、彼とほとんど同じ背丈の箱が置いてあった。

中には巨大なプラモのパーツ…一部、組み立てようとした痕跡があるが…

「俺に聞きに来たという事は…苦手なんだな？」

「そうなんですよ…自慢ではないんですけど、掃除や料理は得意なんですけど、

こつこつのは苦手なんですよ、私。」

はあ…とため息をつくヴァンプ…

「…これは、フロシャイムが開発したロボット型兵器の試作品で、レッドさん抹殺用なんです。

平均的怪人より強いとされていて、

初期動作の調査などモニターとして川崎支部へ部品の状態で送られてきたんですよ。

…そうですか…カノンさんもできませんか…」

「戦闘員も今日は出かけているからな…」

そう…本日、支部にいるのはヴァンプと居候のカノンくらいだった。

…まあ…天井に住んでいる謎の生物がいるが、そこは気にしないでおく。

「…しかたないです。

またレッドさんをお願いしてきます、私。」

「そうか…ちよつと待て!!」

『また』ってことは前にもあったのか!？」

「ええ。…これ、『+』なんですよ。つまり試作品二代目ってことなんです。

『今度こそは!!!』って思ったんですけど…

前作より機能性をUPした結果、より複雑になってしまったらしくて…

私にはもう歯が立たないんです。」

「だからって…レッドってやつはその…『敵』だろ?」

カノンはまだ会った事がないが、相当強い正義の味方…

それが天体戦士・サンレッド。

…白銀聖闘士並の小宇宙をもつ川崎支部の怪人達を手駒にとる正義の味方…

「でも…『困った人』を助けるのが『正義の味方』じゃないですか？」
「『困った人』じゃなくて、お前は『困った悪の組織』だろ！？
とにかく！！敵に助けを求めるようなことはするなっ…」

カノンは起き上がって設計図を見た。

…正直ちんぷんかんぷんだ…

カノンは今年で28なのだが、育った土地があまりにも偏狭だったため…

また、彼自身があまり細かい作業が得意ではないため、プラモデルは苦手だ…

「…仕方ない…ちょっと待ってる。」

カノンは十円玉をいくつかポケットに入れると、公衆電話へと走った。

…ある男に救援をもとめるために…

FIGHT 6 ヴァンプ、殺人兵器を手に入れる！ <後編>

FIGHT 6 ヴァンプ、殺人兵器を手に入れる！<後編>

「へえ〜等身大のプラモか。

こんなものも作れないのかよ、カノン。」

「仕方ないだろ？やったことがなかったんだからな。」

「にしても…なんで電話…よりもよつて公衆電話から俺の携帯にかけたんだ？

フツーに小宇宙をつかった念話をつかえば、金かからないのに…」

プラモ…というか、サンレッド抹殺用ロボ『RX77+』を組み立てながらカノンに話しかける男がいた。

…カノン同様、明らかに外国人と一目でわかる風貌をしている。目を引く青髪の長い髪の持ち主…

彼の名前はミロ。ギリシャ人でカノンの友人で蠍座の聖闘士をしていた。

「…下手に小宇宙を高めたら、サガにバレるだろ…」

「あー確かにな。」

…つてか、ここに書いてある『サンレッド』つてなんだ？

「あ…それは…」

「正義の味方ですよ、ミロさん。」

そう言いながら、麦茶と菓子を運んでくるヴァンプ…

「正義の味方かあ…つまりこれは、その正義の味方を倒すロボなんだな？」

「……まあな。」

「へえ〜。なんか面白いな。」

と言いながら組み立てるミロ。…結構楽しんで作っている…

「いいのか？ツツコまなくて…」

聖闘士も…まあ、一種の正義の味方みたいな感じだ。

カノンは正規の聖闘士ではないが、ミロは聖闘士…しかもその中でも頂点にたつ十二人の一人だ。

そんな易々と悪の組織に協力していいのだろうか？…自分で頼んでおいてなんだが…

「だってさあ、万が一、俺たちを襲ってきたら一瞬で粉々にする自信あるし。」

それにカノンが認めた悪の組織だろ？

昔のカノンだったら分らないが、今のカノンが認めたなら、いい奴なんだよな？」

「ありがとうございます、ミロさん！いい奴だなんて…」

うるうるしはじめたヴァンプ…。

(…認めたというか、居候させてもらっているので逆らいつらいというのが、現実なのだが…)

カノンはなんとも言えない気持ちになった。

…ミロは、一度『仲間』と認識した奴を売るようなマネは決してしない男だ。

だから、今回、彼に頼んだということもあるが…

いくらカノンを居候させているからと言って、そう簡単に人(…と

いうより怪人)を信じていいのだろうか？

「ところで…このこと、誰にも言っていないよな？」

万が一、サガにばれたら大変だ。念を押すカノン。

「もちろん！！仕事のあるカミユの代わりに、アイツの弟子の氷河に手紙を届けるっていう名目があるからな。」

鞆からハ　・　ッター程の厚さのある封筒を取り出した。
宛先の部分には『氷河へ』と書いてある。

「…それ、本当に手紙か？」

「みただぞ。書くのに一日かかったんだってさ。」

それから…サガが心配してたぞ？」

「…そうか…まだ、帰らないからな。」

アイツの泣きが入るまでは…」

「ふん…ほら、終わったぞ。」

ちゃんと組み立て終わったようだ。

気が付くと、もう夕日が部屋に差し込み、あたりを蜜色に染める時間帯になっていた。

「ありがとうございます！！これ、ほんのお礼です。」

ヴァンプは川崎名物『たろうの夢最中』を渡す。

満面の笑顔でそれを受け取るミロ…

「サンキューな、ヴァンプ！…また何かあったら呼べよな。」

それからさあ、区切りついたら帰ってこいよカノン。」

「ああ。悪かったな。」

ミロが去っていく。

…持つべきものは、友人だ…
カノンはそう思った。

……さて、後日談だが……

ヴァンプが翌日のレッドとの決闘で、

『RX77+』を起動させたのはいいのだが、起動させた瞬間に、なぜか怒り爆発させていたレッドによってバランスにされてしまった。

なんでも…

「次、似たようなものが送られて来たら、真っ先に俺の所にもってこい!!!」

つと約束させられていたのを、ヴァンプはすっかり忘れていたようだ。

忘れていたヴァンプもヴァンプだが、

「俺の所にもってこい!!!」

つて言ったレッド（正義の味方）もレッドだよな…と思ったカノンだった。

FIGHT 7

闇を照らす黄金の光

FIGHT 7 闇を照らす黄金の光

「えっ！？カノンさんって、ギリシヤ人だったんですか？」

川崎支部の昼休み…カノンが他の怪人に混ざってカップ麺をすすっている、

カメ型怪人・ガメスが驚いた声を上げた。

「ああ…」

「ギリシヤって…あんまりいい思い出がないんですよ…」

「行ったことがあるのか!？」

「ええ…たしか十四年前ですが…海でぼんやりと泳いでいたら、いい海流に乗ってしまい…」

そのまま泳いで、ギリシヤまで…」

ガメスの顔に、少し青い線がはいっている。

「そんなにいやな思いでだったのか？」

「…はい…実は……」

――回想シーン――

ガメスは達成感を感じていた。

まさか、こんな遠くまで泳げるなんて、考えたことがなかったからだ。

心を満たす達成感…そのまま岩肌に身体を預ける。

…泳いでいた時はエキサイトしていて、気が付かなかったが、今になってドツツと疲れが押し寄せてきたのだ。

「…おい、なんだあれ？」

子供の甲高い声が聞こえる。

うつすらと目を開けると、そこにいたのは茶髪の少年と青髪の少年

…二人の共通点は、黄金に輝く鎧を着ていること…

ギリシャではやっているのだろうか…とガメスが考えていると…

「カメだよミロ！大きいな。」

「へえ〜うまそうだなあ…アイオリア…」

ミロと呼ばれた青髪の少年が涎を垂らしている。

「ちょ…食つのかミロ!？」

アイオリアと呼ばれた少年が唾然としている。

「『おいしい』って実家にいた時に隣のオッサンが言った。

それに…腹減ってるし…」

「だ…だが…カメを食べるって…」

グウウ〜

アイオリアの腹が鳴り響く…

「確かに、兄さんとの修行で、腹と背中がくっつきそうだし…
ために食べてみるか！」

パンツつと手をたたくアイオリア。

「えつと…まずは首を絞めた方がいいのか？」

と言いながら、ガメスの首に手を回すアイオリア。

「あ…あのお…俺を食べても不味いと…」

じたばたしながら必死で抗議するのだが、残念ながら、それは二人に伝わらなかつたらしく…

「首絞めるより、腹を切った方がいいんじゃない？」

「でも…ナイフないし…どうせなら、甲羅を俺の拳で割ったらどうだ？」

「おお！いいなそれ。」

「待ちなさい！！！」

ぴたつとアイオリアとミロの動きが止まった。

視線の先にいたのは、麻呂眉の少年と金髪で目をつむっている少年…
…こちらも、黄金に輝く鎧を着ていた。

「ム…ムウにシャカ!？」

「むやみやたらな殺生をしてもいいと思っているのかね？」

「いくら、あの筋肉馬鹿…いや失敬…アイオロスとの修行でくたびれているのだとしても、

カメを殺して食すなど…かわいそうではないのですか？」

「で…でも…」

「私たちに逆らうというのかね、ミロ？」

仮に、大地に額をこすり付けて私を拜むのであれば、考え直してもいいが…」

「誰がシャカなんて拜むかよ！同い年だろ？」

「いや…ミロ…なんかツッコミどころが違う気が…」

「ともかく、カメをいじめてはなりませんよ。」

「いじめてなんてない！食べようとしただけ…」

「それをイジメというのですよ、アイオリア。」

「…文句をそれ以上いっているのであれば…」

いたしかたない。」

シャカがなにやら印を結ぼうとすると…

「すまんシャカ！」「悪かったシャカ！ムウ！」

駆け出して逃げてしまったアイオリアとミロ…。

この時、本当にこの、ムウという少年とシャカという少年が、天使に見えた。

まるで、闇に照らされた一筋の黄金の光のように…

「さて…カメよ…」

音もなく近づいてくるシャカとムウ。

「…いじめっこから助けた礼だ。」

いまから私達を『竜宮城』へ連れて行け。」

「はい？」

おもわず声を出すガメス…

「いじめっ子から助けられたカメは、竜宮城へ連れて行ってくれるのですよね？」

『浦島太郎』でも『銀』の『竜宮 城編』でも、カメは恩人を連れて行ってくださったではないですか？」

「いや……」

「さつさと連れていきたまえ。」

「……知りません……」

「クスツ……嘘はいけませんよ？」

「仕方ない……竜宮城に連れて行く気になるまで、五感の一感ずつ、はく奪していくか……」

「それとも、私達を連れて行く気になるまで、私の『スターダスト レヴォリユーション』」

を食らい続けますか？」

二人とも笑みを浮かべながら迫ってくる……

だが、明らかに彼らからは漆黒のオーラがにじみ出ている……

ガメスはいじられキャラなので、ひょんなことから命の危険を感じることは、わりとあったが……

ここまで恐怖を感じたのは、始めてだったりしたのだった。

――回想シーン・終了――

「……このあと、彼らの『保護者』となのる少年……たしか、アイオロスとサガという二人がやってきて、

彼らを引き取ってくれたから帰ってこれたようなモノの……」

ぶるぶる……と当時の恐怖を思い出し、震えるガメス。

「そ…そうか…きっと、そいつらは例外中の例外だと思っぞ。」
「そうですね…あっ！…もう休みも終わりなんで行きます。」

時計を見たガメスが去っていく…

(…なにやってたんだ…アイツら…)

ガメスの話に出てきた、カノンのよく知った少年たち…

…食べるだの、竜宮城に連れて行けだのの前に…

…まず、カメがしゃべるところにツッコめよ！…と思った、カノン
だった…。

FIGHT 8 忍び寄る魔の手

FIGHT 8 忍び寄る魔の手

「……何を託らんでいる……」

カノンは立ち止ると、振り返らずに言った。

「……早く答えないか？……俺の背中を感じている……。
背を焼くような、すさまじい殺気をな。」

「フフフ……気が付きましたか……カノンさん……」

あなたは……本当は正義の味方なんじゃないですか？」

「……俺は正義の味方なんてたいそうなものではない。
どちらかというと悪よ。」

俺は兄とは違い、悪の心しか持ち合わせていないのだからな。
……それよりも、なぜ俺が正義の味方だと思った？」

カノンはまだ、後ろを振り向かずに言う。

徐々に小宇宙を高めていく……

「……知りたいですか？……それは……」

一目見たときから、ぶっ殺したかったからです!!」

「なんだその理由は!？」

振り返ると、そこにいたのは、額に『F』というシールがついた、
ヒーローのような戦闘服を着ている、

全体的に黒いイメージの青年……まあ……マスクで顔が見えないの

で、なんともいえないが、
声の具合からして、自分より年下だろう……。

「……お前は……フロシャイムの一員なのか？」

「はい。フロシャイム怪人のナイトールです。」

「なんだその薬みたいな名前は！？」

「……まあいい……その……ほんとに理由はそれだけなのか？」

「う〜ん……そうですね。」

なんか、レッド先輩を見ているみたいな気分になるんです。

カノンさんってなんかこう……ただ見ているだけで『ぶっ殺してえ
！！』って

思うんです。

あっ……他の怪人さんはどうかわかりませんが。」

「……そうか……」

ナイトールの話も分かる気がする。

いまでこそ、『一般人』だが、少し前まで、兄……サガの代理の聖闘
士として、世界の平和を護る……いわば、正義の味方のようなことを
やっていたのだ。

「……ん？……ちょっとまで。」

お前……さっき、レッド『先輩』っていったか？」

「はい。」

「……レッドって……よくヴァンプが対決挑んでる相手だろ？」

「……つまり、正義の味方だよな？」

「はい。天体戦士サンレッドは僕のヒーロー時代の先輩なんです。」

ケロツとしたかんじで言うナイトール。

「……なんだ？お前……『正義の味方』から『怪人』に転職した

のか？」

「そうですね。元々は『ナイトマン』っていう、山口県出身のヒーローで、

一族みんなヒーローの家系なんです。

実は、ヒーロー界の期待の新人だったんですよ。」

「一族みんなヒーロー!?…そ…それなら、なんで怪人に?敵だろ?」

「えっと…それは……」

少し恥ずかしそうな感じのナイトール…。

だが、意を決めたのか、うつむき気味だった顔を上げて、しっかりとカノンを見た。

「なんとというか…幼いころから、『自分はヒーローじゃなくて、怪人になりたい』って思ってたんです。

みんなでヒーローごっこことやっても、なんか…『こんな自分じゃない!』って……

物心ついた時から感じてたんです!

『身体と心が違う』って!」

「……どっかで聞いたことのあるような、告白シーンだな……。」

なんとも言えないカノン……

「で…その…一族は知ってるのか?お前が転職したってこと?」

「はい。最初は反対していたんですけど、ヴァンプ様が電話で説得してくれました。」

『息子さんの人生は息子さんのモノです!』って。」

「なにやってんだよヴァンプ!」

フツー、怪人がヒーローに電話かけるか!?…ってか、それで説得

されていいのか？

「父さんが言っていました。『悩みに気が付いてやらなくてごめんな』って……」

「いや、フツー気が付かないと思うぞ？

ヒーローの一族に怪人になりたい奴がいるって発想がまず思いつか
んと思うし……」

……というか、まずなんでヒーローをフロシャイムに入れたんだ！？
そのカノンの疑問に気が付いたのか、ナイトールは答えた。

「ヴァンプ様曰く『来る者拒まず』らしいですよ。」

「拒めよ……！」

「まあ……そこが、ヴァンプ様の長所ということであ
そろそろぶつ殺していいですか？」

「はああ!?!？」

的外れの声を出してしまったカノン……
そういえば、そんな話だったなあっと頭の片隅で思い出す。

「……小宇宙は……白銀聖闘士の鷲座並みか……
いいだろう、受けて立つ。」

少し構えるカノン……そして……

「あつ!?!すみません!?! 対決はまた今度でいいですか？」

時計をみてあわてるナイトール。

「どっした?」「

「実は、きょうは兄のナイトブラザーが僕のアパートに泊まりに来るんです。」

「はい？」

「なんでも、山口県に足を踏み入れたら、ヒーローとして怪人になった僕と戦うらしいんですけど、

山口県外だと、フツーに家族として付き合ってくれるみたいなんです。

えっと…迎えに行っていていいですか？」

「……………行けよ。」

「ありがとうございます。」

次は必ず、ぶっ殺します!!！」

ナイトールは笑顔で駆けていった。

はあ……………とため息をつくカノン。

こいつらが世界征服を完了する日が来るのだろうか……………

ひゅーっつと風が吹く、夕方の出来事だった。

魔の手とは、もちろん、カノンをぶっ殺そうとしているナイトールのことです。

一応、フロシャイム怪人達の中でも強い連中は、白銀または青銅聖闘士並みの力を持っているという、設定にしております。ちなみに、レッドは黄金並みの力ということでは…

FIGHT 9 灼熱の炎熱地獄!?

「ふふふ…我がフロシャイムの怪人達よ…」

怪しげな空気が漂う作戦会議室（居間）……
將軍・ヴァンプの前に勢ぞろいするは、川崎支部の怪人達…

「ついに、この日がやってきた…思い出せ、我らの悲願を、今日こそ叶えるのだ!!」

槍を宙に向かって突き出すヴァンプ。

…ようやく、世界征服っぽくなってきた…と思うカノンだったが……

FIGHT 9 灼熱の炎熱地獄!?

「なぜスーパー銭湯に来ているんだ!？」

そこはスーパー銭湯の番台……

「え…だって、前に支部のみんなと骨休めで来ようと思った日に、レッドさんからの呼び出しがかかったちゃって、来れなかったんです。」

「だから前から予定してたんですよ。」

「アノなあ……」

「あっ！心配しないでください！！カノンさんの分は私が払いますから。」

「そういう問題じゃない！！！！」

……少しでも、こいつを見直した自分が馬鹿だった…と後悔する力
ノン……

その時だった！…知っている小宇宙を感じ、カノンは思わず青ざめてしまった。

「馬鹿な！なぜ奴らが！？」

「？どうしたんですか？」

「悪い！俺は先に帰ってていいか！？」

必死な形相のカノン。いまいち状況が分かっていないヴァンプ。

「ま…まさか…温泉嫌いですか！？」

「いや…そうではなくて…：…アレだ！俺はギリシヤ人だから…」

「大丈夫ですよ。怪人も入れますし、目立ちませんよ。」

それにこの後、みんなで夕食しようと…」

「僕はこどもじゃないやい！！！！」

みるとウサコツツ達、ぬいぐるみ型怪人・アニマルソルジャーの面々が番台で切れていた。

「どうしたの？ウサコツツ？」

「あっ！聞いてくださいよ、ヴァンプ様！

『ココは12歳以下はいつちゃいけない』って言われて、入れさせてもらえないんですよ！？」

プンスカプンスカしているウサコツツ。

「それは仕方ないなあ〜俺と外で待っているか!？」

「そうですね。カノンさん、アニソル達と待っていてくれますか？」

「そんなあ〜」

「僕たち、入れないんですか？」

抗議の声を上げるアニソルの面々…だったけど…

「ほら、ここにいると邪魔だぞ!！」

ひょいっとカノンに抱えられて、そのまま外へ出されてしまった。

「…間一髪だな…」

知っている小宇宙と鉢合わせにならなくてすんだようだ。

「だが…なぜ奴らがここに？」

疑問に思うカノン…なぜなら…その小宇宙とは…

「ん？」

「どうかいたしましたか？」

「……いや…カノンの小宇宙を感じたような気がしたのだが……」

その人物はあたりを見わたした。

「いませんよ。あの双子なんて…

疲れがたまっているから、そう感じるのです。

せつかくここままでいらしたのですから、羽を伸ばしてください。」

「…だが…不安だな。俺達が帰った時に、執務室が崩壊しているのではないかと…」

「安心してください！あの『万年サボリ』と『ドS馬鹿』がさばらないように、

私がしっかり対策をしてきたので……

だから、おかつるぎください……ラダマンティス様……」

そう……ここ……スーパー銭湯に来た、カノンの知っている小宇宙とは、

冥界三巨頭の一人にして、カノンと命の取り合いをした男…翼竜のラダマンティスと、その部下一同だったのだ！

カノンはやり過ぎることができるのか!?

FIGHT 10 進化する魔物

FIGHT 10 進化する魔物

「ねえ、カノン。なにビクビクしてるの？」
「うつ……いや……なんでもないぞ！」

ウエストポーチをつけたネコ型のぬいぐるみ怪人……
アニマルソルジャーの一人・デビルネコが心配そうにカノンを見上げる。

「そう？なんでもいいけど、ストレスをためるのはいけないよ。
僕みたいに、円形脱毛症になっちゃうから。」
「……僕みたいに？……お前、円形脱毛症になったことがあるのか？」
「うん……そうなの。……自然治癒はしたんだけどね……実は、そう見え
ないかもしれないけど……家庭の事情で……」

そのさきの言葉は風が強く吹いていたので、カノンの耳まで届かなかった。

「……ってことなの。」
「……そうか……」

とりあえず、ひきつった顔で答えるカノン。

「あれ？そういえばウサちゃんとかPちゃんは？」

きよろきよろと辺りを見わたすデビルネコ。

「ああ…あいつらは、そこで寝てるぞ。お前も昼寝でもしたらどうだ？」

「うん…そうするよ。」

寝息を立て始めるデビルネコ…

さて…とカノンは小宇宙を探り始めた。

…先程感じたラダマンティスとその部下たちの小宇宙は銭湯の中…ひとまず、ここでおとなしくしていれば、バレずにやり過ごせるだろう…

…と考えていた時だった。

「あれ、カノンさんですか？」

そこにはカノンに近づいてくる怪しげなマントの男…

「だれだ？」

「あ…顔が見えませんか。」

はらりと頭部をあらわす男…触覚が生えたそいつは…

「ラダマンティスの部下の地妖星パピヨンのミュー!？」

「覚えていてくださり、光栄です。」

「そりゃ…お前はインパクトあるからな…。」

牡羊座のムウからミューのことを聞いていたとはいえ、実際、聖戦後にアテナの護衛で冥界へ行ったときにミューを見て、マジで化物かと思った。

「…なんでカノンさんがここに？」

私はラダマンティス様の護衛で来たんですけど…」

「ああ…ちよっといろいろと事情があつてな…頼むから誰にも言わないでほしい。」

「…事情？…まあ…黙っておきますけど…」

「ありがとな。で…なんでお前は銭湯に入らないんだ？」

ミューは悲しそうな顔をした。

「私は目立ちすぎますから…」

「だが、その触覚と羽は冥衣サープリスの一部なのだろ？ だったら脱げば問題ないんじゃないか？」

聖闘士が聖衣という鎧を着るように、ミューたち冥王ハーデスに仕える冥闘士達も冥衣という鎧を纏うのだ。かなり凝ったデザインとはいえ、ミューの蝶のような羽や触覚も冥衣の一部であることには変わりはない。

「ダメですよ！私の特徴がなくなってしまうですよ！！

それに、この地妖星の冥衣は簡単に取り外しできないんです！！」

「…そうなのか？」

「はい。私の冥衣は成長するんです。

第一形態のスライム上の卵 幼虫 マユ 最終形態の成虫…つまり蝶へと進化するんですよ。

だから、いま、冥衣を脱ぐと、せっかく最終形態になれているのに、一瞬で第一形態に戻ってしまうんです！

だから、自宅で風呂に入る時も、冥衣装のままシャワーを浴びているんです。

…ですが、ここは公共の場…タオルも許されていないのだから、

冥衣なんてもつてのほかでしょう？」

はあ…とため息をつくミユウ…だが…

「問題ないんじゃないか？」

「!？」

「お前はそのまま入っても人間に見えないから平気だろ。」

『私は怪人だ』って言えば、ここの職員も納得するだろうし…」

「怪人！？私はれっきとした人間です！！」

「いや…見た感じ人間には見えないから安心しろ。」

九条（作者）も Wiki で、

『年齢：19歳。身長：178cm。体重：65kg。誕生日：1月27日。血液型：B型。出身地：オーストリア。』

というデータを見るまで、人間とは気が付かなかったそうだとぞ。

ほんとうに触覚や羽が生えているのかと思ったそうだとぞ。」

「……ですが…怪人が銭湯に来ていいのでしょうか？」

「問題ない！！」

きっぱりと言い放つカノン。

「どこからどう見ても蛾の怪人…モスキーやどっからどう見てもモ

グラの怪人…モギラとモゲラも堂々としていったから、問題ない。」

「

「蛾？モグラ？…いまいちよくわからないんですけど…」

「入ればわかる。とにかくお前はそのまま入っても全く問題がないということだ。」

「本当にそうですか？…ですが…本当に私はニンゲ…」

「はっ！！」

バツとカノンの横で寝ていたデビルネコが飛び起きた。

「どうした!？」

「……うう……まただ……」

最近よく自分の匂いで目覚めることが多いんだ……」

不幸オーラを放ちながら答えるデビルネコ。

言われてみれば、デビルネコから加齢臭が漂ってきた気が……

「この間のメンテナンスの時に匂いを落としたつもりだったのに……ん?その怪人だれ、カノン?」

まっすぐミューの方を向いて尋ねるデビルネコ。

「ほら、怪人に見られたじゃないか。……?ミュー?」

ミューの動きが止まっていた。

「ね……猫のぬいぐるみがしゃべってる……」

「僕はぬいぐるみじゃないの。ぬいぐるみ型怪人のデビルネコって
いうの。」

「……や……やっぱり……言語を操ってる……」

半ば放心状態のミュー。

「そんなに驚くなら、まず自分の顔を見るよ……」

カノンは呆れ声で言ったが、ミューは聞こえていないのか、返事はなかった。

ちなみに、彼の放心状態がとけて、結局、冥衣を着たまま銭湯に入

っていったのは、それから15分後のことだった。

FIGHT 10 進化する魔物（後書き）

「進化する魔物」とは、ミューの通り名です。

ミューはどこからどう見ても怪人です。最終形態で人間型になったとしても、

リアルな蝶の羽と触覚があるので、どう見ても人には見えません。

デビルネコは、見た目可愛いのに、中年男性みたいな悩みを抱えているキャラです。

ちなみに、彼のウエストポーチには糖尿の薬：インシュリンが入っているそうです。

もう少し、銭湯ネタが続く予定です。

FIGHT 11 翼竜部隊現る！！（前書き）

この回は、ラダマンティスの部下、てんこくせい天哭星ハーピーのバレンタイン
視点で書きます。

それでは、どうぞ。

FIGHT 11 翼竜部隊現る!!

FIGHT 11 翼竜部隊現る!!

「…いかがでしょうか、ラダマンティス様。」

白い髪をもった目つきの鋭い青年が言った。

彼の名前は、天哭星^{てんくくせい}ハーピーのバレンタイン。

目の前にいる金髪の男…どう考えても外見年齢20後半…本当は23歳^{てんもっせい}の天猛星ワイバーンのラダマンティスの腹心の部下であり、今回の日帰り温泉旅行を計画した張本人である。

冥闘士の中でも最強の強さを誇るラダマンティス…だが、彼は典型的な中間管理職的ポジションなのだ。

毎日毎日…仕事を何かにつけてサボる同僚のアイアコスとミーノスの二人の分の仕事をこなし、

ついでに上司(?)で毎日遊んで暮らしている双子神の仕事までこなし…

…『今の冥界は彼がいないと成り立たない』と言われるほど、仕事をこなしている。

そのせいで、彼の食事は朝・昼・夕…カロリーメイトとビタミン剤なのだ。

…23歳健全男子が、仕事が恋人なんて…なんか部下としては泣けてくる。

そのうえ、最近、死相が本気で無視できなくなってきたのだ。

そこで、バレンタインは、今回の日帰り旅行を企画したのだ。

日頃から、しっかりと働いている功績を上司に認めてもらい…そして、
少しでもラダマンティス様の死相が消えるようにと…

「ああ。いいぞ。…日本の温泉はいいものだな。

…それにしても…やはり執務室が…」

「問題ありません。」

間髪入れずに答えるバレンタイン。

「ファラオに賄賂を渡して、

万が一、アイアコス様とミーノス様が執務をほったらかした場合は、
遠慮なく魔琴を奏でるよう言いつけてあるので…」

ファラオというのは冥闘士の一人で、重苦しい音色で人間の神経を
狂わせる魔琴の使い手だ。

ラダマンティスは同僚が置かれている立場を少し哀れに思ったのか、
少し眉をしかめた。

「仕方ありません。そもそも…あの二人がしっかりと仕事を普段か
らラダマンティス様に押し付けている罰が当たったのですから…」

「いや…そうではなくて…俺は少し疲れているようだ。」

そういうと、ラダマンティスは目を押さえた。

少しじゃなくて、死相が目に見えて分かるほど疲れているのでは？
…と思ったバレンタインだったが…

「……………なんですか…アレは…」

思わず、バレンタインはつぶやいてしまった。

「!?!?やっぱりバレンタインも見えるよな!!よかった!」

同じくラダマンティスの部下の天捷星バジリスクてんしょうせいのシルフィードが、ほっと息をついた。

二人の目線の先にいたのは……

「いやあ……マジ暑いっす……そろそろ俺、出させてもらいますわ。」

そついいながら湯船から上がるのは……人間サイズのカラフルな蛾……。

「アレは……ミューの仲間か?」

「いや……一応ミューは人間ですけど……」

「あれは……本物の蛾ですよね?」

ひそひそと話す三人……

「ガルル……いい湯加減だぜ……」

横から聞こえる獣の唸り声……

「虎?」

見るとそこにいたのは……人間のように湯船につかっている虎……

「おい、バレンタイン!!!ここって本当に人間の温泉なのか!?!」

「さっきから人間外の奴らをよく見かけるんだけど……」

文句を言いに来るのは天牢星てんろうせいミノタウロスのゴードンと、天魔星てんませいアルラウネのクイーン。
……彼らにも見えているということは、あの生物たちは幻術ではないということだ。
いつたい…これは……

「……ラダマンティス様!!」
「!?!? ミュウ!?!」

ざぶりざぶりとお湯をかき分けるように歩いてくるのは、冥衣着用中のミュウだった。

「お前!?! なんで……」

「え……えつと……このままでもいいかと思ひまして……どうせ、私は人間には見えませんし……」

それよりも、私だけ、もう一日・休暇をもらえないでしょうか?」

「? なんでだ?」

「実は……」

「あつ! あなたがミュウさんの言っていたラダマンティスさんですか?」

やってきたのは、温泉なのに、兜をかぶっている男……

「ああ……お前は……」

「私、悪の組織・フロシャイム川崎支部の將軍・ヴァンプと申します。」

実は……明日、宿敵の正義の味方……レッドさんとの対決があるんですけど……

今回の予定していた怪人のリギー君が、『もうレッドとは戦いたくない』って言うてきて……

困っていたら、ミューさんが、

『正義の味方なんて、私の手にかかればイチコロですよ』
って言うてくれたんです。

明日の対決には、ぜひ、ミューさんをお借りしたいんですけど…
あっ！明日だけでいいんです。無理にとは言いませんが…よろしい
でしょうか？」

……沈黙……

「あ…つまり、ミューにあと一日、休暇を与えてほしいというのだ
な？」

「そうです。」

「なら、この、バレンタインも使ってくれないか？」

「へっ！？…ら…ラダマンティス様？」

なんだか分からないバレンタイン。そんなバレンタインを見て、少
し笑うラダマンティス。

「こいつは、部下の誰よりも、いつもよく働いているからな。
それに、こいつはミューより強い。」

きつと、その…正義の味方とやらを倒す力になるはずだ。」

「ラダマンティス様……」

じゅんつときているバレンタイン。

「べつに私は構いませんよ。」

あっ！でも、レッドさんに連絡を取らないと…」

――数分後――

「あつ！もしもし…かよこさん？私、ヴァンプ。

…えっ？ヤダ困るう〜。…そう…だから、そういう時は〜」

温泉の休憩室で携帯をやっているヴァンプ…。

「あれ…本当に正義の味方とやらに連絡とってるのか？」

少し不安になる一同…

なんというか…聞こえてくる内容が明らかに主婦同士の会話だからだ。

「…あつ…そうそう、レッドさんが変わってもらえませんか？」

ようやく本題に入るようだ。

「…あつ！レッドさん？…実は明日の対決なんですけど、一人怪人…というか…えっと…相手を追加してよろしいでしょうか？」

…いいですか？ありがとうございます！！…それから、言い忘れてました…

『明日は冥界の入り口に立つことになると思え、サンレッドよ！！』
「

ピッ…と一方的に電話を切るヴァンプ。

「大丈夫です！レッドさん、オッケーしてくれました。」

嬉しそうに話すヴァンプ。

「そうか、短い間だが、部下をよろしく頼む。」

「「ちらちらと、貸していただき、ありがとうございます……！」

……なんか……よくわからない男だ……と思ったバレンタインだった。

FIGHT 11 翼竜部隊現る！！（後書き）

翼竜部隊とは、ラダマンティス率いるバレンタイン・シルフィード・ミューなどが所属する精鋭部隊のことです。

次回は、ついに原作主人公…サンレッドの登場…予定です。
バレンタインとミューは勝てるのか!?

FIGHT 12 正義の味方VS冥闘士

…この物語は神奈川県川崎市高津区溝口で繰り広げられる善と悪の壮絶なる戦いの物語である…。

FIGHT 12 正義の味方VS冥闘士！！

「人って誰でも『成長』することが大事だと思うんです。

成長することで、新たな力を身に着け、前よりも一段階も二段階も強さを増す…」

「やかましいわー！！」

…ここは溝口周辺のとある公園…

ヴァンプの話を通り、そこに響き渡るは一人の男の声…

『いかにも戦隊もの』って感じの赤い仮面マスクで顔を隠し、

『音楽の街 川崎』と書かれたTシャツにジーンズといったラフな格好…

彼こそ、川崎市の正義の味方・天体戦士サンレッドだ。

「れ…レッドさんは『成長』が大事だと思わないんですか？」

「あんな……だったら成長してから連れてこいよ！！！！」

レッドに対峙しているヴァンプ・戦闘員1号2号・白髪の男の横にあるのは…

巨大なマユだった。

「さ…昨晚までは、ちゃんとミュー君は最終形態だったんです！でも、仕事仲間とやった王様ゲームで…その…罰ゲームで脱ぐはめになったみたいで…」

第一形態の卵に戻ってしまったみたいなんです。

あつ！でも、ミュー君は努力したんですよ！！

今日対決があるからって必死で進化して…」

「…で、肝心な対決の時に第三形態かよ？」

「ついさっきまでは幼虫だったんです！

ミュー君は『こうなったら、糸でグルグルにして成虫になるまで待つてもらうしかない！！』」

って言つて必死で進化を我慢してたんです！一度マユになったら中々成虫になれないから…」

でも、レッドさんが遅いから我慢の限界でマユになってしまったんです…！！

「はいはい、俺のせいだよ…つたく…」

やけくそ気味に答えるレッド…。

「……で、そつちの白髪怪人は大丈夫なのか？」

レッドの視線の先にいる白髪怪人…もとい、冥闘士のバレンタイン…彼は彼で、ものすごく顔色が悪かった…

「大…丈夫だ…それに怪人ではない…ラダ…マンティス様の部下…
天哭星…ハーピー…のバレンタインだ…」

「いや、ぜんぜん大丈夫そうに見えないんだけど…なんかふらついているし…」

「バ…バレンタイン君は昨日の飲み会で飲みすぎちゃったらしいんです…！！

同僚のシルフィードって人が無理矢理飲ませたらしくて…」

「どうでもいいよ！！つてか、今何月だと思ってるんだ！？」

とつくにバレンタイン過ぎてるだろーが！！そういう怪人はちゃんと時期に消化しとけて何べん言ったら分かんだよ！！」

「バレンタイン君は今日だけのアルバイトなんです！！」

今日予定してたりギー君がどうしてもレッドさんと戦いたくないと

……」

「……あのなあ……なめてんだろ？」

「大丈夫…夫です…いけます…スイート…おろぼぼおおお。」

必殺技を繰り出そうとし、彼の背後に鳥人間ハービーが浮かび上がった途端、彼はリバーズしてしまった。

「きつたねえ！！」

「バレンタイン君！！ちょっと休みなつて！ほら、水でも飲んで！！」

ヴァンプは持っていた盾に入っていたペットボトルを取り出す。

「…すまん」といいながら飲むバレンタイン…。

「情けないなバレンタイン。」

公園の入り口に現れたのは…

「お…前は…地暗星ちあんせいディープの二オベ！？」

爪のデカイ小鬼のような形状をした鎧を着た男…二オベは笑う。

「ラダマンティス様からの命令だ。」

『おそらくバレンタインもミューもろくに戦えんから、お前が行つて来い』だよ

「うう…ラダマンティス様…なんとお優しい…うう…！おろばぼぼ
ぼおお」

「ああ！バレンティン君しっかり…！えっと…じゃあニオベさん、
やっってくれる？」

「もちろんですよヴァンプさんよお…！」

ニオベがレッドに向き合う…前に、ヴァンプの近くに寄る。

「下がっててくださいよ…ヴァンプさん。俺の技は…ひそひそ…」

ヴァンプはうなずくと公園の端まで避難(?)する。そして槍を高く上げると叫んだ。

「くつくく…サンレッドよ…！今日こそお前が、喘ぎ苦しむ時だ…！

その仮面マスクが役に立たないことを冥界で悔やむがいい……やれ、ニオ
ベ……！」

「いくぜ兄ちゃんよお…ティープフレグ…ぐはああ…！…！」

ああ…なんか甘い香りが……と感じたか感じないかの所で、ニオベ
はレッドの拳一撃で地面とキスすることになった。

「な……」

「なんだ？しめえか？」

恐怖を浮かべるニオベとは反対に、けらけら笑うレッド…。

――数分後――

「……たく……何度言ったらわかんだよ？」

次、襲つたら…トリカブト（毒草）を口いっぱい詰めてやるから、覚悟しとけよ？」

正座したままのヴァンプ・戦闘員・ニオベに一通りの説教をすると、煙草を吸いながらレッドは公園を出て行った。

「……怖い奴だな……あれが正義の味方かよ……」

ぶるぶる震えるニオベ。

「トリカブトを口いっぱいだなんて…怖い怖い…。」

同様に震えているヴァンプだったが……

「じゃあ、次はいつレッドさん襲う？」

と平然に戦闘員に向かって言ったのだ。

「えええ！？怖くないのか!？」

「だって…それが私たちの仕事だし…それに、レッドさんは口だけだから。」

命を奪うようなことはしない人なのよ。

今日はありがとねニオベ君。これ、回復したバレンタイン君と成虫になったミュー君と食べてね。

こっちはラダマンティスさんに。」

盾から包みを四つ取り出しニオベに渡すと、ヴァンプ達は去って行った。

「……なんか…どっちが良い奴なのか分からないな…。」

ベンチで横たわっているバレンタインがつぶやく。

「ああ…世の中は広いな…」

ニオベもそう言つと、しばらく公園の出口を眺めていた…。

ちなみに、ミューが成虫になれた（戻れた？）のは、その日の夜のことだった。

サンレッドは、ヴァンプ達悪の組織が良心的で世間体もいいのに対し、その真逆の存在です。昼間はパチンコで正義の味方が職業なので、収入ゼロ。

恋人の、かよ子さんの家に居候…もといヒモですね。
戦い方も不良ですし……

地暗星のニオベがやろうとした技は『ティープフレグランス』
ニオベの小宇宙「コスモ」が作り出した甘い香りを嗅いだ人の中枢神経を冒し五感を麻痺させ、死に至らしめる…まあ、毒ガス攻撃です。

レッドの仮面は、あらゆる毒ガスも効かないようになっていますが、ニオベの毒は、皮膚からも浸透するため、レッドの仮面は効果なしです。

実際、聖闘士星矢原作では、この技で最強の十二人の一人、牡牛座のアルデバランが負けています。

でも…私が思うに、レッドはこの技をくらっても、
「なにコレ？なんかいい香りすんだけど？」
って言われて、ニオベ終了な気が……。

FIGHT 13 恐怖！魔笛を奏でる者

FIGHT 13 恐怖！魔笛を奏でる者

「……………本当にいかないの!?!」
「行きたくないんです!?!」

フロシャイム川崎支部に朝っぱらから響きわたる問答…

「でも、レッドさんとの対決…」
「どうしても行たくないんです!?!」
「君ねえ、学校に行きたがらない小学生じゃないんだから…」
「どうしたんだよ、朝っぱらから…」

あくびをしながらカノンは、個室の前に立つヴァンプに尋ねた。

「あつ！カノンさんも言ってください!?!」
かれ、どうしてもレッドさんとの対決に行きたくないって…」
「対決って…昨日したばかりだろ?」

カノンの記憶が正しければ、昨日の昼ごろにミューとバレンタインがレッドと対決したはずだ。

……………結果は……………まあ、彼らが万全でなかったこともあるが…レッドの圧勝だったそうだ。

加勢に来た万全な状態のはずの二オベも全く役に立たず……………結局、^{二オベ}彼は不意打ちでしか勝てないということが判明した日でもあった。

「いくらなんでも、連日はきついですよ、私も。」

「じゃあ、なんで…」

「……実は……この中に引きこもっている怪人…リギー君っていうんですけど…」

彼が本来なら昨日の対決にでる予定だったんです。

でも……ただこねちゃって……バレンタインさん達に頼むことになつてしまつたんです。

でも……このままじゃ不味いつて思うんです、私。

だって……レッドさんとの対決スケジュールが崩れちゃいますし…

次こそはリギー君に行ってもらわないと困るんです！！

だから…とりあえず、部屋から出てもらおうつて…」

ヴァンプが青ざめた顔で言った。

なんというか……海底時代を思い出すカノンだった。

今は昔…カノンがポセイドンを騙して地上を手に入れようと企んでいた頃…

カノンが筆頭として所属していた海將軍シエネラルという大海を支える7本の

柱を守護する7人の海闘士の一人…クラーケンのアイザックが、

『どうしても海闘士マリーナとして戦いたくない！！』

つと、当初は駄々をこねて、北氷洋の柱に閉じこもつたまま出てこなかつたのだ…。

海闘士として目覚める前まで、ポセイドンの宿敵…アテナの聖闘士になるべく厳しい修行をしていたためもあるだろうが、

だが、何よりも…ポセイドンの配下として……アテナのために拳を振るう（……はずの）愛すべき師匠（水瓶座の聖闘士）と拳を交え

る運命になるかも知れないという未来に絶望していた。

そんな現実が受け入れられずに、引きこもっていたのだ。

「……あれはあれで大変だったな…」

「?どうしたんですか、カノンさん?」

「……いや……それなら、てっとり早くこつすればいいではないか？」

アイザックを柱から出した時のように……

ドゥーン……！

見事に扉を破壊したカノン。

「ひいひい……！」

なかにいたミイラ……といっても、カーメンマンのようにエジプトチックではなく、どちらかというと日本っぽい感じのミイラ怪人小さくなつてた。

「か……カノンさん……！どうするんですか……！」

「問題ない。ちゃんと直す。」

だてに海底神殿に行くまで雑兵をやってきたわけじゃないからな。」

「海底神殿……ですか？」

「細かいことは気にするな。」

……お前がリギーか？」

「ひい……そ……そうです。」

「なんで、そんなに戦いたくないんだよ？」

「だって……だってアノ人、ひどいんですよ……！」

僕が笛を吹こうとしてるのに、蹴ったり追っかけてきたり一度もまともに吹かしてもらった事がないんです……！」

……それは当然なんじゃないか？と思うカノンだったが……

「笛つといたか？」

「はい、この横笛です。」

「……まさか……頭脳に直接響いて相手の精神をスタボロにした拳句、

最終的には身体をバラバラにするような技を使うのか!？」

カノンの脳裏に一人の男が浮かんだ。

……まさか……この怪人……アレの弟子かなんか!？」

「そ……そんな恐ろしい技使いませんよ!!!」

僕の技……『魔笛の音色』は聞いた人の身体の自由を奪うだけです!
!!!」

「なんだ……その程度か……」

「そ……その程度……」

なんかカノンの淡白な態度のせいで、撃沈するリギー……

「どうせ自分は弱いですよ……」とブツブツ言っている。

カノンは頭をクシャクシャとかいた。

「……つたく……そんな落ち込むなって……ようはパワーアップすればいい話だろ？」

笛つかう怪人……ではないが、笛の音色で戦う奴なら一人知っている。

そいつに師事すれば少しは強くなれるのではないか?」

(命の保証はしないが……)と心の中で付け加えるカノン……

「ほ……本当ですか!?!どこにいるんですか!?!」

身を乗り出してくるリギー……若干カノンは引いたが、すっかりとソイツのいる場所を教えた。

――その日の午後――

「あ……あの……海魔女セイレーンのソレントさんですか？」

日本の某音楽大学に顔を出したりギー。

そこにいたのは、女性のような顔立ちの男だった。手にフルートを
持っている。

「なぜ、海魔女のことを知っている？」

少し……いや、かなり疑わしい視線を向けられる。

「えっと……カノ……じゃなくて、バイアンと名乗る人から聞いたんで
す。

『笛殺法を鍛えるなら彼を支持するといい』って。」

『くれぐれもソレントの前で俺の名前を言うな！

いっならくバイアンという奴から教えてもらった>ということにし
る。

バイアンあいつなら馬鹿だから、ソレントが確かめようとしても……うやむ
やにできそうだからな。』

つと、カノンが厳しい顔で言っていたのを思い出す。

「へえ……バイアンがねえ……あなたはなんて名前なんですか？」

「リギーです。」

「そう……リギーっていうのか……
じゃあ……さっそく修行を始めますか。」

ポンッと手を叩くソレント。リギーは笛を持つ手に力を込める。

「……では、簡単なことから始めましょうか。」

そうですね……『やっぱり』習うより慣れる』っていいですから……私の技をとりあえず受けてみてください。」

フルートを口元に持っていくソレント。

リギーの脳裏にカノンが言っていたソレントの技がうかぶ……

「や……こ……心の準備が……」

「死の旋律を聞きなさい……『デッド・エンドシンフォニー』」
「うぎやああああ……！」

……死の旋律と共に、リギーの切ない悲鳴が辺りに木霊する……

結局、次のレッドとの対決には、重症で入院中のため出られなかったリギーなのでした。

FIGHT 13 恐怖！魔笛を奏でる者（後書き）

『笛を奏でる者』とは、怪人のリギーと海將軍の一人、セイレーン海魔女のソレントのことです。

リギーはミイラの人型怪人。戦闘能力は高くないものの、笛を吹く事で相手の動きを封じ込める能力を持ちます（ただし、相手が動いていると効果を發揮できない）。

本編ではレッドが一方的に悪いように書かれていますが、実際には『リギーが本屋で立ち読みしていて対決に遅刻したせいでレッドがキレていたうえ、走ったせいで息が乱れ笛が吹けなかった』、『笛の音色をカセットテープに録音したが、テープの調子が悪く効果がなかった』というように、リギーにも非がかなりあるんですよね……

セイレーン海魔女のソレントは、歌声で旅人を惑わして死に至らしめたというセイレーン同様、自らも横笛の音色で相手の小宇宙を奪う技を使います。

その音色は相手の脳に直接響き、鼓膜を破っても防ぐことはできなくて、また笛の音は物理的破壊力も備え、黄金聖闘士の血で強化された聖衣をも砕く程の破壊力があります。

リギーの音色が『動きを止めるだけ』に対して『+聖衣さえポロポロにする』ソレントの音色は色々とチートな気がします。

ソレントをカノンが騙していたから、カノンのことをソレントはあ

まり……というか結構嫌いです。一応、表面上の和解はした……という設定にしてありますが、心の底ではまだまだ恨んでいて……という人です。

ちなみに、原作で生き残った数少ないキャラの一人です。

FIGHT 14 夕暮れ時の着信音

FIGHT 14 夕暮れ時の着信音

「みんなもうすぐ揚がるよ、サーターアンダーギー」

ヴァンプが楽しそうに言うと、戦闘員や支部待機中の怪人達がぞろぞろ（……といっても数体）と台所へ入ってくる。

「あつ！ほんとだサーターアンダーギー」

「おいしいですね、サーターアンダーギー」

「……サーターアンダーギーとはなんだ？」

疑問符を浮かべるカノン。

「えっ！？カノンさん知らないんですか？」

「当たり前だ。……どこの国の食べ物だ？」

ヴァンプが上げているのは、カノンのぞいてみる限りだと、丸っこいドーナツツのようなモノだった。

「沖縄ですよ。」

「オキナワか……って、日本の食い物なのか!？」

カノンが驚きの声を上げるとソレは同時だった。

ジリリリリリン

やかましい音で鳴り響く電話の音…

「やだあゝもう、だれかしら…」

はい、もしもし、フロシャイム川崎支部ですが…

あ…ロウファー？悪いけど今手が離せないの、私。

サーターアンダーギー揚げてるから、五分後にまたかけてね。」

がちやり

と電話を切ると、ヴァンプは、いそいでサーターアンダーギーの元へと戻る。

「ロウファーってだれだ？」

「カノンさんは知らなかったわね。私の弟で静岡出張所で修行中のよ。」

でも…本当にだめな弟で…行く末が心配なのよ、私…

さあ、出来たわよ！サーターアンダーギー！！」

ヴァンプが皿に盛り付ける。

「ねえ、僕これがいい！！」

ウサコッツが大きい奴を取ろうとする…が…

「これは俺のゝ！！」

メダリオが横からかつさらってしまった。

「あつ！ひどいよメダリオ！殺すよ！？」

「殺せるもんなら殺してみやがね。」

早いもん勝ちなんだよ、ウサ。」
「おめえーは一食カップ麺食べてればいいんだよ、だからウサに譲ってやれよ。」

横から口をはさむカーメンマン。

「うっせえなあカーメン！これは俺のだったの！」

「うっせえよ！早くウサにあげろよな。文句あんなら呪うぞ！」

「……お前らがうるさいっての……」

ぼそり…とそういうと、サーダーアンダーギを口に入れるカノン。
口の中で生地ふわっとした感じと、ほのかな甘さが広がっていく…

「うまいな…これ…。」

「そうでしょ？おいしいわよね、サーダーアンダーギ。

あれ？デビルネコは食べないの？」

「あっ…ヴァンプ様……」

うん……そうだね、糖尿も最近節制してるからだいぶ良くなってきたし…

いただきます！！」

デビルネコもサーダーアンダーギに手を伸ばす。

にぎやかで温かい感じがする昼さがり……が、夕方鳴り響く電話によって崩れた。

ジリリリリリ

けたましく鳴り響く電話の音…

ヴァンプが電話に出た。

「はい、もしもし……あつ！ロウファー？
ごめんね、さっきは出られなくて……うん。知ってるわよ。
だからもう少ししたら行くつもりだったの。サーダーアンダーギを
持って。」

……えっ！？乗り遅れたですって！？どうするつもりなの？

……うん……うん……ということは、その人の家から電話かけさせ
てもらっているのね？

ちよつと代わってくれないかしら？……

……あつ！もしもし。私、ロウファーの兄で悪の組織フロシャイム
川崎支部で將軍を務めさせてもらっています、ヴァンプと申します。
ほんとうにロウファーがご迷惑をおかけして……

……えっ！そこまで面倒を見てくださるんですか！？ありがとうございます！
……ご迷惑をおかけして……

何から何まですみません……あつ……そうだ。

お礼を送りたいので住所を教えてくださいませんか？……いえ
いえ、ほんの気持ちだけです！

頼りない弟が迷惑をかけちゃって……あつ！ありがとうございます！
……ご迷惑をおかけして……

電話番号はいいです。通話履歴に残ってますし……えつと……
……ご迷惑をおかけして……書くものを探します……

『グランド財団・ギリシャ支部・双児宮・サガ様』でいいんですね
？……はいはい。では、よろしくお願いします。本当にすみま
せんでした。」

がちやり

「……どうしたの、カノンさん？顔色悪いけど……
ま……まさか、サーダーアンダーギでお腹壊したとか！？」

ヴァンプが蒼白な顔のカノンを見て言った。

「い……いや……なんというか……さっきの電話の相手って……」

「弟のロウファーです。あの子、今ギリシヤに旅行中だったんですけど、

事故で帰りの飛行機に乗れなかったので、サガさんという人の所に泊まらせてもらっているみたいなんです。

まったく……人様に迷惑かけて……」

「……………」

カノンは頭を押さえた。

「本当に大丈夫ですか？」

「ああ……問題ない……ただ、世界って狭いなっと思っただけだ。」

遠い目をしたカノン……まさか、兄サガの所にも怪人……しかもヴァンプの弟がいるなんて……

もしかして、自分の使っていた部屋を客間代わりに使われてるのかもな……

部屋を蜜色に染める夕暮れ時の出来事だった。

FIGHT 14 夕暮れ時の着信音（後書き）

「ヴァンプのさつと一品」

カノン「おい！なんだこのコーナ！？」

ヴァ「原作で私が担当している料理コーナーですよ。

今回出てきた『サーダーアンダーギ』は知らない人が多いみたいなので…

特別にやらせてもらうことになったんです。」

カノン「……勝手にしろ……」

ヴァ「では、今回のメニューはサーダーアンダーギです。

材料は 卵 2個 砂糖 120〜140g 薄力粉 20g
ベーキングパウダー 小さじ1.5 サラダ油 大さじ1
サラダ油（揚げ油） 適量 以上です。

作り方は簡単！下準備 として 薄力粉とベーキングパウダーを合わせて、ふるっておきます。

次に卵を割りほぐし、砂糖を加えて混ぜ合わせます。

出来上がったものに薄力粉を加え、粉っぽさがなくなる程度に混ぜ合わせ サラダ油を加えて、混ぜ合わせます。

次に生地を丸めるんですけど、生地がくっ付かないように ちゃんと水で掌を濡らして、大さじ1ほど生地を取り 直径2〜3cmくらいに丸めてください。

出来上がったら、160度くらいの油で揚げるんですけど、この時に手に付けた水が揚げ油に入って油ハネしないよう気をつけてください。

最後に生地が浮いてきて割れ目ができ、全体にキツネ色になったら、引き上げ、油を切って…完成!!

一応、揚げ具合が足りないか心配な時は、竹串をさしてナマ生地が付いてこないか確かめたほうがいいかもしれませんね。

どうですかカノンさん？」

カノン「（もぐもぐ…）たった五分で出来るなんて凄いな……」

レッド「外がカリッとしてるのに、中はフワッとしているし……結構いけるドーナツだな。」

ヴァ「砂糖を黒砂糖にすると、もっと沖縄っぽくなっておいしいですよ」

カノン「……あのなあ……これは川崎市が舞台なんだろう？なんで沖縄料理……」

ヴァ「細かいことは気にしないでください。

そういえば、今回は『もふっと』さんのリクエストにお応えして、聖域舞台らしいんで、カノンさんや私達はお休みだそうですよ。」

カノン「なっ!?最近あの生物冥闘士に出番とられたり、影が薄くなってたりしたから、この辺りで

『俺が主役だ!!』って印象付けようとしたのに!!!」

レッド「あきらめな。これが運命なんだよ。

俺だって主人公なのに一回も単行本コミックスの表紙になつたことないしな。」

ポンポンっと落ち込むカノンの肩をたたくレッドだった。

FIGHT 15 聖域に乗り込む悪魔の使い <前編>

FIGHT 15 聖域に乗り込む悪魔の使い <前編>

「……………ほんとにバラそうかな……………」

ミロはそう言うため息をついた。

現在ミロは聖闘士の総本部…聖域の周りのパトロールをやっていた。本来なら雑兵がやる仕事なのだが、今の聖域には使用可能な雑兵はほとんど残っていなかった。

原因はサガとカノンの兄弟げんかの延長のせいだ。

…教皇補佐であり双子座の聖闘士のサガ…の弟カノンの家出が発端だ。

……………最初の内のサガはいつもと変わらなかった。

が…三日ほどしてからおかしくなってきた。なんとなく、普段と違う雰囲気をかもしだすようになったのだ。

そして一週間もすると……………独り言が多くなっていった…たとえば…

「カノン…なぜこの兄に連絡をよこさない!!…まさか…のたれ死んだのか!？」

……………ふふ…あのスニオン岬でも生き延びられた奴がそう簡単に死ぬわけなかつた……………

いや、そうは言うが、アレはアテナの小宇宙のおかげであり…あの愚弟の力ではない!

そもそも、お前に連絡をよこすようなマトモな弟なら、十三年間の

内に一回は連絡をとるはずだろ!?

アレは……きつと海界の整備で忙しかったのだ!!
それならば……」

といった独り言が、執務しながら永遠と続いている…はつきり言つて、怖いからやめてほしい。

髪の色が青から灰色にと目まぐるしく変わっているところから判断すると、

どうやら目まぐるしく彼の中の人格が変わっているのが分かるのだが……だが、理論は分かっているとはいえ、怖い…。

そして、さらに一週間もすると、それはなくなったのだが、『神のようだ』と謳われたサガの面影はすっかりなくなっていた。

代わりに、ものすごく乱暴で適当な暴君のようなサガ……つまり、偽教皇時代のサガのようになっていた。

つまり……そのせいで雑兵の死傷者多数。怖がって健全な雑兵も里帰りをするモノが多数。

ということ、雑兵不足のため、黄金聖闘士がパトロールに出ないといけなくなったのだった。

「あゝあ、でも、裏切るわけにはいかないしな……」

この状態を改善したいので、唯一カノンの行先を知っているミロはサガにバラしたかったが、

彼はミロの友人だ。友人を売ることは自身のポリシーに反するから、できない。

となると…カノンが帰ってくるのを促さないと……

「長老!!しっかり!!!!」

人の声が聞こえる…はあ…とため息をつくミロ…

本来は結界だのなんだの影響で一般人が入ってくることはないのだが、たまに迷い込む輩がいるのだ。(例・城戸光政)

そういつた連中を追い出す…というか…安全にアテネ市内へ返すのも、パトロールの一環だ。

「おい、何をして……」

ミロはそこで言葉を止めた。

そこにいたのは……

「しっかりしてもう……!!!!」

「長老!!!!」

「わ…ワシは…もう…無理じゃ……」

「………怪人か？」

そこにいたのはカノンの所で見たことのあるような……怪人だった。カノンの滞在先にいたヴァンプという男に似た怪人…なんか髪が真ん中から二つに分かれて立っている奴がミロの方を向いた。

「あつ!現地の人!？」

「まあ…そんな感じだ。どうしたんだって………おい!その老人やばいんじゃない……」

ヴァンプに似た怪人ももう一人の怪人に見下ろされているのは……
血まみれの老人だった。

「ふん！自業自得だ。」

「ゴル君！それは言い過ぎだよ！…じ…実は、長老はその石につまづいて血まみれに…」

「…仕方ないな…これで一命は取り留めたはずだ。あとは病院へ連れて行くぞ。」

血止めの真央点を撃ったミロは長老をおぶった。

「でも…どうしよう…こんなことになるなら、旅行保険に入っておけばよかった…」

「はいつてないのか!？」

「は…はい…くっくっく…」

なぜか笑い出すソイツ…

「おい！なんで笑っている？」

「ひい…すみません…くっくく…僕、緊張す…すると、笑いが止まらなくて…くっくく…」

……笑いが止まる雰囲気はない…

だが、困った…まさか、旅行保険に入っていないなんて……病院のほかに休めるところと言ったら…

ミロの頭に浮かんだところは…一か所しかなかった。

「（一般人は入れてはいけなが…休ませないといけないし、もし、この怪人たちが反旗を翻したとしても、瞬殺できそうだし…）」

よし！…ついてこい。俺の所で休めよな。」

――数時間後――

「おい！！こんなところでへばったのか!？」

長老を背負ったミロが呆れた声を出す。

「ぜー…ぜー…もっ…ムリ……」

ヴァンプにそっくり……ってか、ヴァンプの弟…ロウファーは、その場に座り込んだ。

ミロは軽く舌打ちをする。

どうせ、力尽きてぶっ倒れるなら、この下の宮で倒れてほしかった。なぜなら…ここは…

「ミロ…なにをしている？」

カノンの兄…サガの住まう双児宮だったからだ。

「え…えっと…この人たちは、フロシャイムって組織の静岡出張所ってこの所長のロウファーと、その部下のゴルと相談役の長老。なんか疲れてるみたいだったから、連れてきた。俺、こいつの兄貴と知り合いだしな。」

「そつか……弟か……」

やばい……目の色が真っ赤だ！ハバネロみたいな目だ！！

「それなら、本日は、ここに泊まるがいい」

「へっ！？いいのか!？」

「問題ない。部屋なら、なぜか帰ってこない愚弟の部屋が空いているしな……」

目の色が真っ赤で、髪が灰色のサガ……つまり、黒サガは不敵な笑みを浮かべた。

「本当に平気か？」

「問題ないと言っているではないか。」

フロシャイムは聖域と……いや、教皇時代の私と友好関係にあったのだからな。

さあ、こっちに来い。」

サガについて中に入っていくロウファー・ゴル……

「マジでかよ……」

フロシャイムは悪の組織のはずだ。……まあ、ミロも人のことを言えないが、仮にも『世界の平和と愛を護る』とされる聖域が、悪の組織と友好関係だったら、不味いんじゃないか？
……と思ったが、何か事情があったのだらうと、思い込むことにする。

ミロは長老を背負いなおすと、彼らの後に続いて、双児宮へ消えて行った。

静岡出張所の面々が、聖域に来るとい話です。

木元君と戦闘員は出てきません。理由は次回書くよていです。

ロウファーは、フロシャイム静岡出張所の所長。ヴァンプ將軍の実の弟です。兄に似て料理が上手いのがメリットです。

基本的に気弱でダメな性格。フロシャイムに入るきっかけも、いい年をして定職に就いていないことを見かねた兄の紹介。

緊張すると笑いがこみ上げる性質のため、レッドと対峙したりヴァンプに説教されているような真面目な場面でヘラヘラしてしまうなど問題が多い。

次にゴルは静岡出張所の唯一の怪人。

ロウファー達に反抗的な態度を取っていて、心が大変狭い。

最後に長老は、静岡出張所顧問。長い白髭がチャームポイントの老人。

元々フロシャイムの構成員で、定年退職した後、同じバイト先であったロウファーの個人的な雇用という形でフロシャイムに再就職する。本来は、その経験や知識を買われて顧問に就いたはずであるが、小心者であるため、ゴルを気にして全く助言を行わない(ロウファー曰く「以前ゴルに「アンタはもうフロシャイムじゃないんだからでしゃばんな!」と言われたから」)。

以上です。次回も聖域編が続きます！

FIGHT 16 聖域に乗り込む悪魔の使い<中編>

FIGHT 16 聖域に乗り込む悪魔の使い <中編>

「……………」

(……………)

「……………」

(……………何をしている黒)

「ほう…久しぶりに『カノン』以外の単語を口にしたな。」

(うう…カノン…じゃなくて、なぜ私の宮に怪人を入れたのだ！
?)

白サガは黒サガの胸ぐらをつかむ。

……………っとはいつても、白サガの手は黒サガをすり抜けたが……

現在・サガの肉体は黒サガが支配していたため、白サガには実体がない。

…ようはアレだ。遊 王の主人公さんを思い返してくれたら分かりやすいだろう。

(しかも、ミロの奴は『フロシャイムの怪人』だといっていたではないか!!)

悪の組織だろ？あの四年前の事件を忘れたか？)

…四年ほど前、アメリカのユタ州で起きた惨劇を思い出す白サガ…
悪の組織とはいえ、あまり目立った行動をしていないフロシャイム

をサガは放置していたのだが、
あの事件が起こってからは、彼らの動向に目を光らせていたのだ。

「ああ…正義の味方と怪人の決戦だろ？死者は数百名で生き残ったのは、怪人一匹という事件のことか？」

…ふっ…安心しろ。我らの敵ではない。」

(しかし…)

「聖域を襲いに来たとしても、相手がアテナ^{UMMA}ではあるまいし、我々が負けるとも思うのか？」

「だいたい、奴らは私の傘下のモノだ。」

(貴様々アテナ様を侮辱したな…!!!!)

「そこか!? ツツコミどころは…!!!!」

(この不屈き者が!!ギヤラクシア…)

「幻魔拳^{げんまけん}!!!!」

(うっ)

…ばたん…と倒れる白サガ。

…通常の攻撃…主に、殴る・蹴るといった攻撃は、幽霊のように肉体を持たない状態の白サガには効果ないが、小宇宙を込めた技…先程、白サガがやるうとした、ギヤラクシアン エクスプロージョンとか幻魔拳といった技は特殊なので当たるのだった。

「ふん。正義は勝つのだ!!さつさと冥界帰りすればいいもの…」

(そのセリフそっくりそのままかえすぞ…!!!!)

「…さすがに復活が早いな…」

(…<無視>……そういえば、さっきなんか言ってたな？

フロシャイムと聖域が友好関係にあるだと？…ふざけたことを…)

「そうか…お前は知らんのか……」

(貴様！！今、鼻で笑ったな！？何をしたのだ一体！？)

「ふん……ちよつとばかり裏取引をな。」

あの組織は人当たりもいい。……そのコネを利用して金のありそう
で騙しやすそうな

アラブの要人だの大都会に本社を構えるCEOだのに近づきけんろうま幻朧魔
皇拳で

操り人形にしたまですよ。

…フロシャイムに取り入るのは造作もないことだったぞ。

定期的に『正義の味方協会』から送られてくる、『ヒーローの長所・
短所』を送っただけで

おしみなく協力を……」

(死ね！！この外道が！！！)

ギャラクシアンエクスプロージョン！！！！！！)

がちゃり

「あ…あの……平気でしたか？」

ロウファーが恐る恐るドアを開けたのだった。

「ああ。まったく問題ない。心配しなくて大丈夫だ。

ちよつと真つ黒なゴキブリが出たから始末しただけだ。」

ニッコリと神のような微笑を浮かべる、自身の肉体の支配権を取り
戻した白サガ…

「え……あ……そうですか？」

あ……あの、夕食できたので来てくれますか？」

先程までと正反対なサガに戸惑うロウファア。

少し眉をしかめるサガ。

「夕食？」

「えっ！？サガさん言ってましたよね？」

『いくら客人とはいえ、ここはこのサガの宮。』

働きもせずゴロゴロしてたら、どうなるか分かっているな？』……つて……」

「（このおゝ黒めゝ！！！！）……そうか………すまないな、迷惑をかけて……」

これからは、客人らしく、ゆっくりしてくれ。

………まあ、夕食は、せつかく作ってくださいだったので、いただいておこつ。」

サガはロウファアに続いて部屋を出た。

………これを機に、フロシャイムの実態を明かしてやる！！と躍起になっていた。

さて、食卓に並んでいたのは、白米・味噌汁・焼き魚・かぼちゃの煮つけだった。

見た目は良さそうだが………だが、毒が入っているかもしれない……。サガはフツ……と微かに笑った。

「（………このサガに毒は効かんぞ）………では頂くぞ。」

以前、アテナの警護で行った日本で購入した箸を器用に使い、白米

を口に運ぶ。

…サガは毒には免疫があった。
なんでも、13年間も毒バラの匂いがプンプンする宮にもっとも近い
教皇の間で、過ごしていたのだ。

こんなバカそうな奴らが持っている毒なんて効くわけがない。

…もし、効いたとしたら…その時は、一つ上の宮の主…蟹あたり
がサガの小宇宙の異変を感じ、
こいつらを冥界へ送ってくれるはずだ。
だから、何のためらいもなくサガは白米を口に入れた。

パクリ…もぐもぐ…

「こ…これは！…！」

結構美味だ！…！

毒の気配も、まったく感じられない！！

「おかわりありますよ！気にしないでくださいね。」

ロウファアはシャモジを持っていた。

「あつ…もしかして…口に合いませんでしたか！？」

「いや、なかなかいけるぞ。私が愚弟に見習ってほしいくらいだ。」

「そうですか！！よかったです」

ボタン…！！

食卓に着いていたゴル（怪人）が派手な音を立てて立ち上がった。
半分ほど残したまま、ゴルは、自身にあてがわれた部屋へと入って

いった。

「……彼は調子が悪いのですか？」

「……まったく……困ったものだよ……ぶつぶつ……」

もともと顔色の悪いロウファアの顔が更に悪くなった。

「サガさんのせいじゃないんですよ!!」

なんか知らないけど怒っているだけだから!!

ほんとうに困るんだけど。

一応、僕がゴルの上司なんだから………ちゃんとしてほしいよ全く………」

ぶつぶつ言うロウファア。

なんかサガはじくじくとなってしまっていた。

料理がすっかりできて、就職をしている上に、直属の部下までを持つていて、

その上……部下の事を思いやれるなんて……

(思いやっているようには見えないが……)

「黙れ黒!!」

「あ……な……何かいつていたかのお？」

すっかり完全回復をした長老が、サガの独り言に気づいて、声をかけた。

「いえ、なんでもありませんよ？疲れているのでは？」

サガは、後ろに花が咲きそうな満面の笑みを浮かべて言った。

「それにしても……ロウファーさんのような弟が欲しかったものですね。」

あなたのお兄さんが、羨ましいですよ。」

「えっ………あ………ありがとうございます………」

めったに褒められることがないロウファーは真っ赤になった。

そのまま、サガは夕食を食べ、夕食をつくるついでにロウファーが焚いた風呂を満喫し、

満足な気持ちで眠りについた。

………客人が『悪の組織・フロシャイム』の怪人だということをつかり忘れて………

FIGHT 17 聖域に乗り込む悪魔の使い<後編>(前書き)

えっと、夏休みに入ったのはいいんですけど、22日から25日まで合宿があるので、しばらく更新が止まります。

そのあとも、いそがしいので更新が遅くなるとおもいますが、出来るだけ早く更新するように努力するので、よろしくお願いします!!

FIGHT 17 聖域に乗り込む悪魔の使い<後編>

FIGHT 17 聖域に乗り込む悪魔の使い<後編>

「あゝ！……どうしよう！……！」

午前5:00頃……

ロウファーが、あたふたあたふたしていた。

「お……おちつけ！なんとかなる……！」

「そんなこと言っただけで、もう飛行機のチケットを買いなおすお金がないよ……！」

……このロウファーのセリフから分かっていたただけだろうか？

……そう……

ロウファー一行は飛行機に乗り遅れたのだ……！

正確に言えば、飛行機に乗ることを忘れていたのだ。

「まったく……なんで忘れるんだよ……！」

「お前のせいだろ！デスマスク……！」

黒髪の目付きの鋭い男が、デスマスクと呼ばれた青っぽい短髪と同じく目付きの悪い男を殴る。

「痛つてえ……なにしゃがるシユラ……！」

「フン……当然の制裁をくわえたまでだ。お前が、こいつらに昼間つから酒を飲ませたのが原因だろ……！」

「いいだろ？俺は今日は非番だし〜！」

「お前は非番でも、何もこいつらを巻き込むのは……」

「い…いいんですよ、シユラさん！！デスマスクさんも悪気ではなかつたと…」

「いや、こいつが100%悪い。俺がお前の代わりに細切れにするから…」

「ま…待てよシユラ！！悪かつたつて！！つか、なんでお前がここにいるんだ!?!」

「忘れたのか!?!お前がテレパス念話で

『おい！今飲んでるから、お前も来い！！』
つて夕方頃に呼んだんだろつが!!」

「あ〜忘れてた。スマン。」

「すまんだと〜!?!昼間つから記憶飛ぶほど飲んでたのか!?!
やつぱり殺す!!」

「おい、少し静かにしろ!!」

サガ…白サガは午前の執務のせいでとつくに引きこもっているため、
黒サガが叫んだ。

黒髪のシユラと呼ばれた男が気まずそうに拳を下ろした。

「……こんな方法に頼りたくないが、人間外生物の支配するグラー
ド財団からチャーター機を要請すれば問題ないだろう。」

それよりも、こいつの知り合いにでも誰にでも連絡を取ったほうが
いいのではないか？

心配しているはずだからな。」

「おつ……黒サガが珍しくいいこと言ってるじゃないか!!」

「めずらしく…だと…デスマスク?」

「いや、なんでもねえよ。」

ほら、さっさと国際電話かけやがれ。」

ロウファーにポンッと電話の子機を投げるデスマスク。

ちなみに、書き忘れていたが、長老とゴルはまだ酔いつぶれている。

「えつと……確か、山田君は令、大学のゼミで旅行中……」

この旅行券を当てた木元君も、友達と旅行中だし……
つとなつたら、兄さんが……」

ピツッポツパ

「……あつ！兄さん？ロウファーだけど……
あ……わかった。」

ピツ（ 電話を切る音）

「どうしたんだ？」

「今、サーダーアングイーを揚げてるから、あとでかけ直して……」

「わけわかんねえこと言ってるじゃねえ……」

デスマスクがバンツと、机を叩く。

「え……ええつと……沖縄の菓子で……」

「そんなことを聞いてるんじゃないやねえつての……」

……まあいい……ふあ……あ。俺は少し寝るぜ。」

「お前は寝るな……！デス……」

「そつだ……！お前が元凶なんだからな……」

「えええ……」

デスマスクが抗議の声をあげた。

―数時間後―

ロウファーは、もう一度電話をかけていた。

「……………あつ！！兄さん？ロウファーだけど。

……………いや、きにしてないから。サーダーアングイーおいしいし。…
それより、今ギリシャにいるんだけど……………

……………うん。でも、乗り遅れちゃって……………

……………実は知り合ったサガさんって人がね、泊めてくれてるんだよ。

……………うん。代わるね。

あつ！！サガさん！兄が代わってって……………」

黒サガが舌打ちをした。

「……………うつつのは、白がむいているんだが……………」

代わったぞ。私がサガだ。

……………ほう、この弟とやらとは異なり將軍なのか……………」

……………安心しろ。私の僕というより知り合いが、チャーター機を借り
ることが出来た。

…………………………そうか……………まったく……………どこ

の弟もろくなのがいないのだな……………」

電話番号は……………そうか……………いらぬか……………」

『グロード財団・ギリシャ支部・双児宮・サガ』で、通じるぞ。
では、切るぞ……………」

ピッ） 電話を切る音（

「…………… お前の兄って…………… 主婦だな。 將軍には見えん。」

「そ…そうですか！？ 僕よりずっと將軍っぽいって言われていて…
……………」

「そんなことよりも、さっさと朝飯用意しやがれ。」

「デスマスク！！ お前が作ればいいだろ！！！！」

「あつ…いいですよ。 まだ、時間ありますし、お礼に僕が作ります
！！！！」

「おい…その怪人たちは聖域の客だぞ！！」

「シユラ。 気を使わせるな。」

ここは私の宮……………そこに無駄賃に住むなどという行為が許されると
思ってるのか？

つということ、朝食を頼む。」

「サガ……………あなたは……………」

「話が分かるぜ黒サガ！！！！」

「お前は黙ってるデス！！！！」

「うっ！！ 分かったから斬ろうとすんな！！！！」

なにやら早朝からにぎやかな聖域だった。

——数日後——

双児宮に川崎から小包が届いた。

……………そこには『フロシャイム印・完全無農薬国産果物ジュース』
をワンセットと

『弟がお世話になりました。本当にありがとうございます！！
くフロシャイム川崎支部・将軍・ヴァンプく』
と書かれた手紙が入っていたのは、また別の話……

更新延期のお知らせ

ごめんなさい！！！

前回の前書きを参考にしてくださいと嬉しいのですが、

合宿に行っていたので、更新がとどこおってしまった。

なので、いままで、頑張ってくれた私への褒美ということ。

『合宿も終わったし、せめて今日中には投稿！！』

をスローガンに、生き込んでいたのですが、

自分で言うのはアレですけど、倒れそうな疲労と眠気のため、無理
そうなので、あさって投稿予定です。

読者の人には申し訳ありませんが、延期させてもらいます。

FIGHT 18 最凶のヒーロー来襲!! (前書き)

遅くなつてすみません!!!

本編をどうぞ。

FIGHT 18 最凶のヒーロー来襲!!

FIGHT 18 最凶のヒーロー 来襲!!

「…なにしてんだ？」

パチンコの帰り道…知った小宇宙を感じたカノンは、ゴミ箱を開け、中にいた人物に話しかけた。

「あ…カノンさん…近くに誰もいませんか？」

「ん？…いないが…」

「よかった!!」

いそいそとヴァンプ…戦闘員一号…二号…最後に蛾型怪人のモスキ―が這い出てきた。

「なんでこんなところにいたんだ？」

あと、少し臭いから離れる。」

「あ…すみません…じつは…」

――回想シーン――

…高津区にあるとある公園…

『平瀬川』と印刷されたシャツに短パンといったラフなヒーロー…

サンレッドがいた。

その前に立ちをはだかるはヴァンプ將軍と彼率いる戦闘員二名そして
モスキー
怪人だ。

ドゥン！！と槍で地面をたたくヴァンプ。

「くつくつく……今日こそ生ゴミのようにしてやるわ、サンレッド
よ……！！

やれ、モスキー……！！」

「キチユー」

鳴き声を上げるとレッドにツッコむモスキー。

ドカッ

レッドがモスキーに拳を一発入れた。

モスキーは地面とキスした……勝負がついた。所要時間・一分ジャ
スト。

「はい、終わりだ。じゃあな。」

さっさと背を向けるレッド。

「ちょ……ちょっと待ってくださいよレッドさん……！！

いつもならこの後は説教をしているのに、どうしたんですか？

せっかく通販で買った正座対策のサポーターをつけてきたのに……！！

「！！

「……お前らなあ……負ける気まんまんだったのかよ……

「まったく…今日は午後から急に客が来ることになったよ。」

先輩の北海道の兄弟戦士・アバシリンの二人がよ。」

「えっっっ!!!!!!!!!!」

真っ青になるヴァンプ。

「あれ？ヴァンプ様何か知ってるんツスか？」

復活したモスキーがティツシュを鼻に詰めながら尋ねる。

「うん…レッドさんが引くくらい夕子の悪いヒーロー……」

モスキー君は知ってる？北海道 最凶の悪の組織…デスヒグマ団……
あそこを酔った勢いで、へらへら笑いながら壊滅させたんだって。」

「えっ!!!マジばねえツスね……レッドさんよりヤバいって。」

「でも、午後からならまだ時間がありますよね？」

戦闘員一号が時計を見ると、まだ11時にもなっていない。

レッドはため息をついた。

「いや…あの人達、怪人狩るのが趣味だからよお……」

少し早くに来て怪人探しをしかねないからな……」

だから、お前らは、とつとアジトに帰って今日は一步も外に出る
んじゃねえぞ。」

「分かりました!!!みんな!!!急いで帰るわよ!!!
命はまだ捨てたくないですし、私。」

その時だった。

「おい!!!!!!見ろよ、レッドが怪人に襲われてるぜ!!!!!!」

サアーーーーっと血の気が引いていくー同……

恐る恐る公園の入り口を見るヴァンプ一行が目にしたのは、

……胸に北海道のマークが入っている、アニメ原作共々顔が映った
ことがないほどの巨漢の二人組……

北海道の兄弟戦士……アバシリンの二人……アバゴールドとアバシル
バーだった。

「あ~~~~らららら。It's a show time!!!!」

「八つ裂きにしてやる~~~~!!」

「み……みんな!!!!にげてえ~~~~!!!!!!!!!!!!」

――回想シーン終了――

「……ということがあって……いそいで、このゴミ箱の中に隠れた
んです、私達……」

「生きた心地がしなかったですよ……」

「俺、ぜってえー北海道行かねえッス。心にマジ決めた。」

「アノ人達、僕たち探しながら

『あゝ正義の血が騒ぐ〜(笑)』

『ボコボコにしてやるから出てこいや〜!!』

『八つ裂きにしてやる!!!!!!』

つて言ってたからね……」

「………災難だったな………」

確かに、昼近くからいつもは、感じない小宇宙を感じていた。

この町で黄金聖闘士なみの小宇宙を秘めているのはカノンと、まだ会ったことはないが、そのレッドという男くらいなのに、同等の小宇宙が二つも増えたので、驚いていたのだ。

……だからといってパチンコに夢中で確かめに行く気にはならなかったが……

(……正義の味方ってろくな奴がないな……)

アバシリンという奴は聞く限り、戦闘マニアにしかみえないし……レッドという奴はヒモらしいし……

正義の味方……聖闘士にもろくな奴がない……

自身の兄・サガを筆頭に……唯我独尊のシャカ……腹黒のムウ……などなど……

まともなのは牡牛座のアルデバランと山羊座のシユラくらいだ。

その二人でさえ、シユラはアテナと射手座のアイオロスのことになると、すぐ自殺しようとするし、

アルデバランも最下級の青銅聖闘士に負けて、『ウワーツハハハ』だったし……

正義の味方っていったい……

夕日に向かってそう思った、せいぎのみかた聖闘士予備のカノンだった。

FIGHT 18 最凶のヒーロー来襲!! (後書き)

兄弟戦士アバシリン(兄・アバゴールド / 弟・アバシルバー)

北海道のヒーロー。アバゴールド、アバシルバーの兄弟戦士。名前は網走から。胸に北海道をもしたエンブレムがあるのが特徴。

レッドの先輩……2人共に見上げるほどの巨漢で、巨漢過ぎてアニメ原作共々顔が映ったことがない。

レッドが認めるくらい凶悪。酔った勢いで北海道の怪人たちを皆殺しにしてしまい、獲物を求めて上京してくる程……

レッドとかよ子に対しては優しいが、そのような性格のためヴァンプ達フロシャイムの怪人は勿論、レッドとかよ子にも恐怖感を持たれている。甥っ子の存在が確認されている為、少なくとも三人兄弟であるのは間違いない。

FIGHT 19 それゆけ!! アニマルソルジャー <生態調査>

FIGHT 19 それゆけ!! アニマルソルジャー <生態調査>
査>

「ねえ、カノンって何者なのかなあ？」

フロシャイム川崎支部に所属する、ぬいぐるみ型怪人の集団『アニマルソルジャー』のリーダー…ウサギ型怪人のウサコッツが唐突に言った。

「どんなって……そういえばそうだね、ウサちゃん。」

デビルネコが腕を組む。

支部に居候しているカノンの実体は謎に包まれていた。

例えば…カーメンマンの側溝にはまった車を、指一本で持ち上げていたりとか……

……他には……『冥闘士』という謎の奴らと知り合いだったとか……

「…もしかしたら、静岡支部のロウファーさんなら何か知ってるかもよ？」

この間ロウファーさんがギリシャ土産を持ってきてくれたとき、ここそと隠れてたし……」

「う〜ん……そうだけど……あの人、ヴァンプ様の弟っただけで、面識ないし……」

「…確かに……よし！尾行しようよ！！そしたら何かわかるかも！

「!!」

「うん!!それはいいかもね!!」

「カノン外出!カノン外出!」

突然アニマルソルジャーの一員:緑色のヒヨコ型怪人:Pちゃん改が頭部の赤いランプ点滅させた。玄関の方を見ると、確かにカノンが外に出ようとしているところだった。

「うわぁ!!急いで追いかけてなくちゃ!!Pちゃん、ありがとう!

」!

「No problem」

「急ごうよ、ウサちゃん!Pちゃん!」

三匹は外に出た。……こつそりカノンの後をついていく……

「あれ?そういえばヘルウルフ君は?」

カノンと最初に出会った張本人:アニマルソルジャーの一員で青いオオカミ型怪人のヘルウルフの姿がどこにもなかった。

「きつと、いつものことだよウサちゃん。」

デビルネコがため息交じりに言った。……一匹オオカミのようなヘルウルフ……一員なのに一緒に行動することがほとんどないのだ……ウサコッツは少し落ち込んだ。

「そっか……あっ！カノンが角を曲がったよ。」

カノンが一つ先の角を曲がってウサコッツ達の視界から消える……。一同が、あわてて走り出した時……

「あっ！！將軍の所のウサコッツじゃねえか！！！！」

サアーーっとうサコッツ・デビルネコの背筋に寒いものが走った。後ろから響いてくる悪魔のような声……振り返るとそこにいたのは、よく知っている三人の小学生男子……

「じ……じん君！？今日は平日だよ？学校は？」

「今日は創立記念日だよ、ばーか！！」

じん君は、そう言うとうサコッツの耳をギュウーっとなんぞ張った。

「痛い痛い！！耳が取れちゃうよぉ～！！」

「じゃあとつてやるよ。とつてもあんまり変わんねえだろ？」

「やめて！僕のウエストポーチ返して！！」

向こうでは、じん君の取り巻き一号がデビルネコのウエストポーチを取り上げている。

「ばーか。返すって言って返す奴がどこにいるよ？」

「その中には大切なインシュリンが……」

「知るかよ。嘘つくなんて。」

「本当だから返してよ！僕、糖尿なんだってば！..」

デビルネコが必死で訴えている向こうで、Pちゃん改はというと.....

「.....」

取り巻き二号の前でウニのように変形したまま動かなくなっていた。取り巻き二号も為す術がない。

.....なぜ、怪人なのに反撃しないのか.....それは彼らが弱いからではない。

.....そもそも、ぬいぐるみ型怪人とは、フロシャイムが子供を人質にするために作った怪人であり、そのため子供に危害を加えられないように設定されているのだ。

だから子供の為すがまま.....いいようにイジメられてしまうのだ。

(.....今回は本当に危ないかも.....)

ウサコツツの耳のあたりの布がビリビリっと嫌な音を立て始める.....。

「お.....お願い.....早く薬か.....糖分をとらないと.....」

「演技してるんじゃないやねえって!!..」

デビルネコには本当に命の危険が迫ってきていた……が、敵はそんなことに気を使ってはくれない……

唯一無傷のPちゃん改は、自分の保身の事しか考えていない……

二匹の絶望がMAXになったとき……！！！！

「おい！！やめろよな！！！！」

一人の少年の声が響く……が、ウサコツツ達の位置からは見えない……

124

「ああん？なんだよお前！？」

「あっ！！じん君！！こいつら……前にテレビに出てた 세인트つてのだよ！！！！」

「……言われてみたら……あんな化け物がなんでこんなところに……ちっ……行くぞ。」

じん君はウサコツツの耳を開放し、取り巻き一号はデビルネコのウエストポーチを放り投げ、二号は何もしないまま去って行った。

「うう……糖分を……」

「ね……ネコ君!!しっかり!!」

「甘いものが欲しいの?……これでいい?」

そつとデビルネコに飴が差し出された。夢中でそれを口に含むデビルネコ……これで一山を越せるようだ。

「助けてくれてありがとう!」

上を向くと二人の少年がいた。……正確にいえば、いかにも熱血つて感じの少年と、少女のような少年だ。

「おう、気にするなって!!……ん?おい、片方の耳が半分とれてるけど……大丈夫か?」

「ん……あつ!!本当だ!!!
直すのが大変だな……この間メンテナンスしてもらったばかりなのに……」

はあ……とため息をつくウサコツツ……

「よし!じゃあ俺が美穂ちゃんにでも頼んで直してやるつか?」

「いいの星矢?これから沙織さんの命で……」

「いいんだよ瞬!星の子学園はすぐそこだろ?へーキへーキ!」

そう言うと星矢と言われた少年はひょいっとウサコッツを抱え上げた。
仕方ない…といった感じでデビルネコを抱き上げる瞬と言われた少年。

「えっ…あの…」

「大丈夫だって！美穂ちゃんは可愛いものに目がないからな。」

「か…可愛くなんてないやい！！殺すよ！！」

「殺せるかよ！？…まあ、行くぞ瞬！」

「分かってるって星矢……はあ……後で沙織さんに何て言おう…」

二人の少年…ペガサス座聖闘士の星矢とアンドロメダ座の聖闘士の瞬は怪人二匹を抱えて、孤児院…星の子学園へと向かった。

……………ウ二のようになったままのPちゃん改を残して……………

「ヴァンプのさつと一品」

ヴァンプ「みんな、前回からずいぶん間が空いてるけどこのコーナー覚えてる？」

「今日も簡単な料理を紹介するコーナーだよ。」

カノン「待て待て…前回のサーダーなんかやらは、読者に説明するためにやったんじゃないのかよ？」

ヴァンプ「うん、最初はそのつもりだったよ、私。」

でも…やっぱり原作でもやってるから、こっちでもって思っ…」

カノン「…もういい。勝手にしろ。俺は何も言わん。」

ヴァンプ「そう。じゃあ始めるわよ。」

今日は横浜名物をつかった『ヨコハマサンド』。」

カノン「待て!! ツッコまないといたばかりだがツッコむぞ。」

この話の舞台は川崎だろ? 横浜とは違うだろ!!」

ヴァンプ「そうですけど、細かいことは気にしないで。」

原作に文句は言うてくださいよ。」

「じゃあ材料を言うわよ。」

食パン…1枚 シューマイ(既成品)…適量 からし…適量 しょ

うゆ…適量

これだけ

作り方も簡単！

シューマイを温めます。時間は約40秒なんですけど、温める時間はレンジによって違うから注意してください。

あっ！待ってる間に食パンを半分に切っておいてね。

それで、温まったシューマイにからしを塗ってパンにはさんでからもう一度レンジで5〜10秒くらい温めて、温まったらお好みでしようゆをかけて、完成！！

ね？簡単でしょ！」

カノン「……否定できないな……もぐもぐ……」

おっ……意外と合うな……夜食にはいいかもしれん。」

ミロ「こりゃ美味しいな！肉まんみたいだ！！」

カノン「……なら、コンビ二いけばいいだろ……」

つてか、なんでここに……」

ミロ「細かいことは気にするなつて。腹減ったから来たただだよ。」

ヴァンプ「これからもよろしくね！！」

FIGHT 20 監禁された二匹!? (前書き)

ついでに二十話…!これからまよろしくお願いします…!

FIGHT 20 監禁された二匹!?

FIGHT 20 監禁された2匹!?

「はい、終わったわよ。」

「あ…ありがとう…」

ここは、孤児院…星の子学園……

耳を直してくれた美穂という少女に礼を言うウサコッツ…。
美穂はにっこりと笑うと……

「かわいいー!!!」

「可愛くなんてないやい!!殺すよ!?!」

ウサコッツは手足をじたばたさせて抗議をするのだが、ギョツーツと抱きしめられたままだった。

「おい、美穂ちゃん、そいつ嫌がってるみたいだぜ?」

ここにウサコッツを連れてきた少年…星矢が言う。

「でも星矢ちゃん。この子ものすごくかわいいのよ?どこで拾ってきたの?」

「溝の口の近く……いいから放してやれよ。友達の所にも行きたいだろうしさ。」

「……それもそうね……ほらウサちゃん、向こうで友達が待ってる

わ。」

名残惜しそうに頭をなでると、美穂はウサコッツを放した。ウサコッツはそのまま向こうで心配そうにこっちを見ているデビルネコの方へ走って行った。

「……でも、どうして星矢ちゃんと瞬くんが溝口に？」

「ああ。沙織さんの命令だよ。」

「えっ！？っていうことは、今度は溝口が戦場に！？」

「……いや……そうじゃなくて……実は、行方不明の双子座の聖闘士の代理のカノンって奴の小宇宙が、溝口周辺から微かに漂ってるらしいんだ。だから、俺たち二人でまずは見てこいって。」

「うん。僕も少しカノンっぽい小宇宙を感じたよ……まあ、どこにいるのかまでは分からなかったけどね。」

「でも……そのコスモっていうのを感じるだけなら、ユニコーンの邪武って人とかヒドラの市って人でも良かったんじゃないかしら？」

少し眉をしかめる美穂。

「邪武や市みたいな普通の青銅聖闘士だと、カノンを見つけることは出来ても、カノンを捕獲するのは不可能だからさ。それこそミトコンドリアと恐竜くらいの力の差があるんだから。」

「星矢！言い過ぎだよ。せめてミトコンドリアじゃなくてミジンコくらいにはした方がいいんじゃないかな？」

「……ともかく恐ろしい人なのね……」

岩を簡単に粉々にする人が雑魚以下に思えてくるのだから……それで、見つかったの？」

「いいや。見つけようとする前に、アイツら（ウサとネコ）を見つけたんだ。」

「……でもよお……はつきり言って探す気がしねえな……」

「あら？どつして？」

美穂は驚いてしまった。

星矢には珍しい……少し憐れむ表情をしていたのだ。

「いや……実はカノンの兄のサガって奴がいるんだけど……そいつのカノンへの制裁が……」

「……うん……想像するだけで……探す気が失せるよ。カノンが哀れに思えて……」

「？どつして？」

「……無断で……とはいっても大半の原因はサガにあるんだと思うんだけど……家出した罪として、

双子座最強の技・銀河をも砕く『ギャラクシアン エクスプロージヨン』を最低5発やられた上に、

夜になると岩牢の天井まで潮が満ち、瀕死の目にあう『スニオン岬の岩牢』に二週間閉じ込められるのは確実だからな。」

「しかも、食料も一切与えられない状態だね。着の身着のまま二週間。面会謝絶で。」

それに、牢の奥の穴は、完全に塞いであるから、もう抜け道はないしね。」

「下手すればその上に、アナザーディメンションで、異次元に飛ばされるかもな。」

「……それって……大丈夫なのかしら……」

「だから適当に探して『いませんでした』にするんだ。」

どうせいてもいなくても、双子座の聖闘士はいるし。」

「……まあね。……ってあれ？ウサちゃんたちは？」

振り返ると、いつの間にかそこにいた二匹がいなくなっていた……

「はあ……はあ……もう平気かなあ？」

「うう……乳酸で足がパンパンだよ……」

星の子学園から、かなり離れたところにウサコッツとデビルネコは逃走していた。

……理由は少し前にさかのぼる……

耳を直してもらったウサコッツはデビルネコのところへ掛けて行った

「だ……大丈夫だったウサちゃん！？怪我はない？」

「ううん、ないよ。……っていうか怪我を直して貰ってたんだけど……いい人たちだよね！じん君から守ってくれたし……」

「本当にそうなのかなあ？」

神妙な顔立ちのデビルネコ。

「もしかしたら、僕たちを捕まえて……人質としてフロシャイムと交渉するためだったりして……」

「まさか監禁！？ありえないよ。だってまだ子供だよ？」

「で……でも、星矢と瞬って言ったら、あの『銀河戦争で戦った』ギャラクシアンウォーズセイントっていう人だよ！？」

「えっ……」

恐る恐る二人の方を見るウサコッツ……確かにテレビでみた銀河戦争出場者の少年にそっくり……というか同一人物だった。

さあ……と蒼くなるウサコッツ。あの大会はよく覚えている……岩を砕く人間ってすごいなあ、氷を出す人間ってすごいなあ、本当は

正義の味方なんじゃないかなあ〜っと思いつながら、支部のテレビで見ていたのだった……。
そのセントが目の前に……しかも何やら話し込んでいる……。
二匹は耳をすました。

「……………した罪として、

双子座最強の技・銀河をも砕く『ギャラクシアン エクスプロージ
ョン』を最低5発やられた上に、

夜になると岩牢の天井まで潮が満ち、瀕死の目にあう『スニオン岬
の岩牢』に二週間閉じ込められるのは確実だからな。」

「しかも、食料も一切与えられない状態でね。着の身着のまま二週
間。面会謝絶で。

それに、牢の奥の穴は、完全に塞いであるから、もう抜け道はない
しね。」

「下手すればその上に、アナザーディメンションで、異次元に飛ば
されるかもな。」

ぞおっとした二匹……。

「え…もしかして……これから僕ら……」

「に…逃げようよウサちゃん!!このままじゃ死んじゃうよ!!!」
「うん!早く逃げようよ、ネコ君!!!」

つと言っことで、ずっと休まず走り続けていたのだ。

「おい。」

「ひい!…!」

上から巨大な影が見下ろす。恐る恐る見上げてみると……

「あつ……カノン？」

「なにしてんだ？まったく……Pちゃんの奴は向こうでウニみたいな状態になったまま動かないし……」

お前たちはへロへロだし……」

「か……カノンは何してたの？」

「俺か？ああ……FIGHT 3でカーメンマンって奴の車を引き揚げただろ？」

そしたらアントキラーって怪人が、

『兄貴が世話になったから、なんかおごってやるよ』ってな。駅前
のファミレスに行ってきた。

……お前たちは大丈夫か？なんかへロへロだが……」

「うん……たぶん平気！」

「乳酸で足がパンパンだけど平気だよ。」

「……平気じゃないじゃないか……ほら、帰るぞ。ヴァンプが今日は『すき焼き』をつくるといっていたからな。

早くしないと肉がなくなるぞ。」

「わーい！！すき焼きだ！！！」

「最近、糖尿も少し改善したから……うん！たぶん平気！！！」

ウサコツツとデビルネコは、カノンの正体なんてどうでもよくなっていた。

正体が何にせよ、カノンはカノンだからだ。

自分たちのことを心配してくれる……大切な友達だ。

夕日の蜜色で町が染まるころ……三人は並んで支部へと帰って行った。

FIGHT 21 ヴァンプの誤算!?

忘れていたかもしれないが、これは神奈川県川崎市溝口で繰り広げられる、善と悪の壮絶なる戦い…である。

FIGHT 21 ヴァンプの誤算!?

「まったく…イラつくな…」

パチンコで思った通りの結果が出なかったカノンは、イラつきながら歩いていった。

「あつ!!カノンさん!!!カノンさん!!!カノンさん!!!」

めっちゃくっちゃカノンの名前を連呼しながら走ってくる、こんなくそ暑いのに紫のマントで全身を覆った上に、兜までかぶっている変人…じゃなくて、ヴァンプがいた。

「どうしたんだ?」

「爆弾!!!」

ヴァンプは手に持っているダイナマイトっぱい奴をカノンに見せた。

「……で?なんだ?俺は今からコンビニに行こうと思っていたのだ

が……」

「コンビ二どころじゃないんですよ！！スイッチの切り方が分からなくて！！」

「スイッチ？」

「爆弾の起動スイッチです！！」

「……………」

確かに、爆弾の真ん中に数字……『4分29秒』と映し出せれていた。

「……………なんでこうなったんだ？」

「じ…実は…掃除をしていたら、掃除機が台所のテーブルに当たって…それで、その上に置いてあった爆弾が下に落ちてポツチッと…って感じなんです！！」

「なんでそんなところに置いてあったんだよ！？」

「つてか、そんなの戦闘員が誰かに聞けば、止めてくれるのではないか？」

「今、支部には誰もいないんです！！」

「だから起動時間15分中7分を使って、……………レッドさんの所に助けを求めに行っただんですけど……………」

「……………レッドさんがいなかったんです！！」

カノンは頭をガシガシかいた。

「あのなあ……………お前は悪の組織だろ？」

「なんで、そこまで正義の味方に助けを求めてるんだよ！？」

「……………じゃあこうすればよかったじゃないか。」

「レッドの部屋の前に置いて来れば。そうすれば、レッドの住処がなくなるし……………」

「できませんよ！！レッドさんだけが住んでいるならまだしも、あ

そこは、かよ子さんの家なんですよ!?

かよ子さんに迷惑がかかるじゃないですか!!

いえ、かよ子さんだけではないですよ!区の人たちにも多大なる迷惑が……」

「お前、もう一度聞くけど、悪の組織なんだよな?

……で、処理に困って、とりあえずマンションの外に出たってところか?」

「はい……あつ!!!あと30秒しかありません!!

どうしたらいいんでしょうか!?!」

「知るか!!!

自業自得というのではないか!?!」

「……そんな……ひどいですよカノンさん……

ああ!!!あと10秒!!!……もういいです。覚悟を決めました、私

……」

「犬死だな……」

「うう……みんな……あとは頼んだわよ……あと5……4……」

「ツチ……めんどくさいな!!!」

カノンはヴァンプが握りしめている爆弾を光速で取り上げると、空いている方の指で、宙に三角形をかくと……

「ゴールデントライアングル!!!」

その中に爆弾を放り込んだ。爆弾は虚空へと消えて行った。

「……処理終わったぞ。」

「ど……どうやったんですか?」

恐る恐る尋ねるヴァンプ……。

全ての動作を光速で行ったため、彼から見ると、急に爆弾が消えた

ようにしか見えなかった。

「なに…北大西洋に存在すると言われる「魔の三角地帯」をつくりだし、こことは別の空間に送ったまですよ。」

「つまり異次元ですか……凄いですよ、カノンさん！！ありがとうございます……」

あゝよかった！！誰にも迷惑かけないですんで……

今日の夕食は、カノンさんの好物で決まりですね！！」

「なんだよ…命を救ってやったのに…主婦みたいな礼の仕方は……まあいいか……」

フツと苦笑いを浮かべるカノンだった。

ちなみに……

フロシャイム製の爆弾は、飛ばされた瞬間に爆発したのなら、特に被害なしで済んだかもしれないのだが、

飛ばされて4秒後……飛ばされた先の巨蟹宮の主の真上で爆発したことを……カノンもヴァンプも知るわけない。

FIGHT 22 智将現る!!

FIGHT 22 智将現る!!

東京都のとある場所……フロシャイムのアジトはこんなところにもある。

川崎支部と似た中古の一軒家……そこが、フロシャイムが誇るIQ150の智将……ヘンゲル將軍が治めるフロシャイム東京支部があった。

「サミエルよ……」

「はっ！ヘンゲル將軍!!」

軍服姿のヘンゲルの前にひざまずく……人型怪人であり、この支部の参謀……サミエル。
ヘンゲルはサミエルを見下ろした。

「これから所要で川崎支部のヴァンプの所まで行ってくる。
留守を頼んだぞ。」

「はっ!!……しかしどういったご用件で……?」

「うむ……この間、箱根に東京支部の慰安旅行で行ったことを覚えておるか?」

その土産の品……『箱根の月様』というまんじゅうを渡しに行くのだ。

本来なら帰りの登戸で小田急から南武線に乗り換えるときに、駅で

「一回おりて渡しに行けばよいのだが、あの日は急いで帰らねばならん用事があったものでな。」
「用事……ですか？」

ゴクリ……と唾を飲むサミエル……サミエルは、いつも通り落ち着いた顔でうなずいた。

「アマゾンで注文したアダルトDVDが届く日だったのでな。」

「……はあ……」

「では、留守を頼むぞ。サミエルよ。」

右手に紙袋。左手に常時着用している巨大なハサミをしているヘンゲル将軍は、つつかつかと指令室を出て行った。

「ふむ……まさかまた留守とはな……」

登戸駅から歩いてきたのはいいが、生憎と誰もいる気配がない……。

「……ふむ……」

庭の方を見ると、どんよりとした曇り空なのに洗濯物が干してあった。

「……ということとは、すぐに帰ってくる……ということか。今にも雨が降りそうだからな。」

「だれだオッサン？」

ヘンゲルが振り返ると、そこにいたのは青い髪の男だった。

「ふむ、私を知らんのか？まあよい。

お前は川崎支部の怪人か？」

「いや…この居候の人間だが……」

「川崎支部の者よ。これはヴァンプへの土産の品だ。賞味期限がすぐなので早めに食すがよいと伝えておいてくれたまえ。」

「おい、無視か？」

「では、今後とも努力するがよい。」

男に紙袋を渡すと、ヘンゲルは去って行った。

「どなたからのお電話だったのでしょうか？」

ヘンゲルが支部に帰ってきてそうそう、机上の電話が鳴り響いたのだった。

「ヴァンプからの礼の電話だ。なんでも対決をしに行っていたのだ
そうだ。

…対決の後は疲労しきっているため、糖分は必須。タイミングが良かったみたいでほっとしたぞ。

それよりもサミエルよ。『カノン』という名に聞き覚えがないか？
「カノン……ですか？いえ…存じ上げませんが……」
「ふむ…実は私もどこかで聞いた気がするのだが思い出せないの
な……」

めずらしく悩みこむヘンゲル将軍。

「……そういえば将軍。今月の『月刊：悪の組織』とフロシャイム
の社内報が届いています。」

「うむ……おお！！そうだ！！思い出したぞ、サミエル。お前のお
かげだ。」

カノンというのは数年前、『月刊：悪の組織』で取り上げられてい
た組織の親玉だ。」

「！？そうなのですか！？」

『月刊：悪の組織』はいわば全国紙……それに乗るほどの人物だっ
たとは……

「うむ……アトランティスという滅亡したはずの都の支配者・ポセ
イドンの一番の部下であり

実質の親玉だそうだ。だが……少し気になるのは、雑誌に載ってい
た彼の写真なのだが、一つも

正面を向いている写真がなかったのだ。

……あの雑誌のギャラはかなり高いのでな。おそらく何者かが盗撮
をした写真が掲載されていたのでは、ないだろうかと考えておった
のだった。

そうか…あの青年が………」

そういいながら、社内報を読むヘンゲル将軍。

「サミエルよ……」

「（今度はなんだ？）……はい。」

「知っているか？この少女を？」

社内報に載っていたのは、大人びた顔立ちの少女。

「ま……まさか……なぜ……この少女は、グラード財団の総帥ではありませんか！？」

「そうだ。城戸沙織というアジア最大の企業……グラード財団の総帥を務める少女だ。」

「どうやら『アテナ』という女神の化身でセイントという最凶のヒーロー軍団の長だったことが判明したらしい。」

危険度スーパードライレベルクラスの人物に認定されたそうだ。」

「そ……そんなんですか！？」

「だが、そのようなことはどうでもよい。」

いつもの変わらない調子のヘンゲル將軍。

（ああ……驚愕の事実を前にしても冷静さを保っていられるとは……さすがヘンゲル將軍！！このサミエルは一生ついていきますー！！）

感動していたサミエルだったが……

「聞けばこの沙織という少女は十三歳だそうではないか。」

十三歳でこの中身の詰まった体型とは……

あと数年もしたらどのような成長を遂げるのか、期待が高まることになるだな。

出来れば、ナース服やセーラー服……バニー服に来てほしいところだ。」

「……………」

何も言えなくなるサミエル……。

智将…ヘンゲル將軍。

フロシャイムの東京支部幹部で、左腕に着脱可能な巨大なハサミを持つことから、「マスター・オブ・シザース」の異名を持つ。

IQ150を誇り、的確な観察眼と判断力を併せ持つフロシャイムが誇る將軍だが………

………その実態は、本人も認める『ドすけべ』であるということを、知る者は少なかつたりする………

FIGHT 23 太陽の戦士、絶体絶命！！

FIGHT 23 太陽の戦士、絶体絶命！！

「……おい……もう、やられてるんじゃないか。」

へらへら笑いながら、いつもの公園に現れたサンレッド。

そこには、レッドを対決の場に呼び出したヴァンプ達の屍があった。

……いや……一応、息はあるみたいで、痙攣のようにピクッピクッと動いてはいたが……

ヴァンプも戦闘員も、本日の怪人…ライオン怪人のヨロイジシも血まみれで倒れていた。

「……ったく……なんで戦う前からこの状態なんだよ……あ……も
しかして、この間から居候してってテメエが言っていたカノンと
かいう奴にボコされたのか？」

……しかし、ヴァンプ達の反応はない……
少し、レッドは警戒心を強めた。

い……つも、いくらボコされても懲りずに襲い掛かって、負ける
ヴァンプ達だが、弱いわけではない。

実際は結構強くて、『ヒーローを三人倒した』と自負している怪人
を、ほぼ一撃で倒せるほどの、実力者の集まりだ。

このヨロイジシも弱いわけではない。

ヨロイジシの纏っている鎧は、『呪いの鎧』と言われていて、持ち
主の体力を無限に吸い取る代わりに、最強の防御を誇るといふ代物

だ。それを平然と纏っていられるだけで、実力は相当のものだと推測するのは容易い。

一体…誰の仕業だ？

「あ…アンタ！…なんでヴァンプさん達を…！？」

公園の入り口から、悲鳴に近い叫び声上がる。

そこに立っていたのは、レッドの彼女で同棲している、そこそこ美人の女性…内田かよ子だった。

…実は、彼女とヴァンプは友人関係であつたりする。

「いくらなんでも、ここまでやることはないでしょ！？」

「ちげえって。俺が来たときにはもう、こんな感じだったんだつての…！」

「でも、ヴァンプさん達は、そこまで弱くないつてアンタが言つてたじゃない…！」

誰の仕業なの！？」

少し不安そうな顔をするかよ子…

「まさか…アバシリンの…！」

「先輩たちなら、こいつらはR18規制がかかるような状態になつてるはずだ。」

…一体…

「アンタ…！」

かよ子がレッドにしがみついた。突然のことで戸惑い、顔を…もともと赤い顔をさらに赤くするレッド。

「なっ……」

「私……アンタに万が一のことがあったら……」

ヴァンプさん達がやられるなら……もしこれが……別の悪の組織の仕業なら……次に狙われるのは……」

「俺もってか？」

だまってうなづくかよ子……。レッドは、小刻みに揺れるかよ子の背を、そっとさすった。

「俺が負けるわけないだろ？俺は強いからな。」

「……そうよね……でも……万が一何かがあったら……」

私は……私は……」

かよ子は肩を震わせながら、レッドの胸に顔をうずめた。レッドも彼女を落ち着かせるため、無言でポンポンと背を叩く。

「アンタを殺しちゃっから。」

レッドの腹に強烈な一撃を加えるかよ子。

不意打ちなのでレッドは少しふっとばされてしまった……が、なんとか態勢を立て直す。

「か……かよ子？」

「うう……レッドさん……か……かよ子さんは……敵です……」

足元に転がっているヴァンプの口から言葉が漏れた。

……確かに、目の前にいるのは、かよ子だが、彼女が浮かべるとも思えない、残忍な笑みを浮かべていた。

「お前……何者だ？」

「内田かよ子に決まっておろうが……サンレッドよ……」

さっそうと公園に入ってくる三人組がいた。

「あつ……確かテメエらは……前にヴァンプ達にボコボコにされて説教されていた悪の組織か!？」

そう……その三人組の怪人達は、悪の組織……デビルアイ軍団……素手でヒーローを三人も倒せる実力があるのだが、ヴァンプ達の足元にも及ばない弱小組織……

「……そうか……ヴァンプ達は、かよ子に負けたのか……」

おい、おめえら……かよ子に何をした!？」

「別に何もしておらん。すべては彼女の意志だ。」

「ウソつくんじゃない？」

「やめて!!!」

殴りかかろうとしたレッドの前にかよ子が割り込む。

必死に何かを訴えるような表情のかよ子……レッドの動きが止まっ

た。

「目を覚ませ！かよ子！！」

「しっかり目は覚めてるわよ！！私は……ただ……ただ……アンタを殺したいだけ！！！」

レッドは、かよ子の攻撃を避けることしかできなかった。

かよ子は一般人だ……なのに……その動きは……まるで何年も修行した戦士のよう……

「……つく……」

殴りかかるうとするのだが、その都度、残忍そうな顔から、おびえるかよ子の顔に変わるので、つい攻撃を躊躇してしまふ。

このままでは……

「……なにをやってる？」

公園の前に新しく現れた男がいた。青い髪を持った男……

「ム……何者だ？」

デビルアイ軍団の長……デビルアイがじろつと男を見る。

しかし、男はひるまない。じ〜〜〜っとかよ子を見る。何故か、かよ子は、少しドキッとしたようだ。

「……お前がサンレッドか？少し交代してくれ。」

「……お前は……」

「いいから代われ。」

一瞬でかよ子とレッドの間に入る男。

「……お前……覚悟はできているだろうな……？」

がたがたと気の毒なほど震えているかよ子。

「あ……あの……その……これは……バイトで……」

「バイト？そんな必要どこにある？」

お前たちの住処の周りには、嫌というほど食料があるではないか。衣類などは、あの世間知らずの坊ちゃんにねだればいいだろうが。」

「い……いえ……でも……あつしにも欲しいものが……」

「ほう……それは？」

なんとというか……知り合いなのか？と感じたレッド達……

「こ……この間発売された……ゲームを……」

「散れ。」

「うわわわわ！……！よしてくださいよ……！シードラゴンの旦那！……！……！」

両腕を空に向かって伸ばした状態で、クロスさせた男を見た瞬間、必死になって懇願し始めた、かよ子……もどき。

「問答無用だ。恥を知れ！！！」
「うう……こうなったら！！！！！」

かよ子の姿が揺らいだ。輪郭が曖昧になったかと思うと、やがてそこから姿を現したのは……
男とそっくりな……というより、何から何まで男と同じ姿の人物……

「…カノンよ…」
「ギャラクシアン・エクスプロージョン！！！！！！！」
「ええっ！！！！？うぎゃああああああ！！！！！！！」

カノンと呼ばれた男は、問答無用に隕石を自分そっくりな男に向かって飛ばし始める。

「ええい！！！」

ドカツ！！バキイ！！バシイ！！！！

「いくら正体がカーサだと分かっているとはいえ、すっきりするな！
まるで本物の愚兄^{サガ}を殴ってる気分だ！！！」

男を数発ほど、殴って公園の地面に大きなクレーターがいくつも出来た頃…ようやくカノンは晴れ晴れとした感じで、こう言ったのだ。
った。

「……か……カーサ殿………」
「……で……お前がカーサの雇い主か？」
「うう……きよ……今日の所は引き上げるぞ！！！」

逃走を図るデビルアイ軍団…だったが……

「一応、ヴァンプ達の敵は撃たせてもらうぞ。」

一瞬で三人の前に現れるカノン。

……………三秒後には、そこには三体の怪人の生ける屍が転がっていた
……………

「……………そうか……………お前がカノンっていう奴なのか……………」

レッドがそうつぶやいた。

「ああ……………お前がレッドか……………」

「アレは、知り合いなのか？」

地面で伸びている、かよ子に化けていた男……………なんか、また姿が変わっていて、いかにもヤラレ役って感じの顔に変わっていた……………を指差した。

「ああ……………俺の元部下のカーサと言う奴だ。」

人間のくせして、相手が大事に想う人間の姿形、声、精神など内面まで完璧に似せた幻影を作り出し、油断させつつ攻撃するという特殊能力を持つ奴だ。」

「その通りでやんすね。」

もう復活……………とはいっても、歩くのもやっとな状態……………したカーサが言った。

「おい……………カーサ……………お前は海闘士^{マリナー}の心を忘れたのか!？」

「え……えつと……」

「そこに座れ！！そもそもだなあ~~~~~！！！！！！」

正座するカーサに説教をするカノン。

「あ……なんか……いつもの私達みたいですね……」

こちらもボロボロだが、復活したヴァンプ達……

「お前らも、そこに座れ。だいたいなあ……避けるくらいする余裕ねえのかよ？」

「そもそもなあ~~~~~！！！！」

正座するヴァンプ達に説教をするレッド。

説教は、5時のチャイムが流れるまで、続いたという……。

FIGHT 24 異次元に幽閉！？

FIGHT 24 異次元に幽閉！？

「……つくそ……やられたな……」

ため息をつくカノン……そう……カノンが多摩川のサイクリングコースを歩いていた時の事……

背後から来た怪人……によって、異次元に幽閉されてしまったのだ。

……カノンも異次元技をつかえるので、それを使って抜け出せばいいじゃん？って思いかもしれないが、

異次元の質が違い凶ぎるため、アナザーディメンションも、ゴールデントライアングルも、この空間内では出来ないのだった。

……ようは、カノンはヴァンプ達の手によって、閉じ込められてしまっていた……

「……やっぱり、アレが原因か？」

先日のカーサとの会話を思い出す。

前回、カーサをみっちり説教した後、ヴァンプ達とカーサと一緒に溝口商店街にある、居酒屋に行ったのだった。

そこで、あのカーサは、酔った勢いで、カノンの正体をばらしてしまったのだ。

…もともとはポセイドンを騙してポセイドンの部下…の中でも最強の戦士…七將軍の筆頭だったということ……

…世界を手に入れようとしたが、失敗したということ……

…そして今は、この世の中で最強と謳われる正義の味方…黄金聖闘士の補欠だということ……

「なんだかんだいって、奴らは悪の組織だからな……本当は俺の敵なんだよな……」

…カノンの正体を知った時の反応も、好意的なものとは、言い難かった。

戦闘員は「ええ！？じゃあ敵じゃないですか！？」

つと言っていたし、ヴァンプも……

「ええ！？あの大雨ってカノンさんの上司の仕業だったんですか！？大変だったんですよ！！何日も洗濯物が部屋干しになったから、カビが生えない様にするのに、どれほど苦労したことが……」

…なんかツッコむところが違う気がするが、まあ、好意的ではなかったのは確かだ。

「……このまま、ここに閉じ込めて餓死させる作戦か……」

かれこれ、すでに閉じ込められて一時間は経過していただろう……奴らにしては、頭を使っていると評価するべきなのかもしれない……

その時だった。

ウィーンという音と共に、ヴァンプの顔が現れた。

「あつ…カノンさん、お腹が減ったと思うので、どうぞ」

出てきたのは白米・漬物・味噌汁といったいつもの食事……毒の気配はない。

「いいのか？」

「いいに決まっているではないですか！おかわりありますよ。」

「……いい。」

だまつて食事をとるカノン……連中のしたいことが分からない……

ちなみに……食事は結構おいしかった……

さらに2時間は経過しただろうか？

「……俺を不安にさせようという作戦か？」

ここは真つ暗闇……人やモノ（さっきの食事の食器）だけが浮き上がっている空間……

長時間、ここに閉じ込められたら、通常の人間なら発狂してしまうだろう……

「ふふふ……俺にはそんな小細工効かないぞ……」

この程度で発狂するなら、サガにスニオン岬に閉じ込められた時に

発狂してるわ!!」

約一週間……天井まで潮が満ち、瀕死の目にあう岩牢に閉じ込められた事を思い出し、遠い目をするカノン……

そのときだった。

ウィーンという間抜けた音と共に……ウサコッツが現れたのだっ
た。

「おい……なんで……」

「ヴァンプ様がヒマだろうからって、相手をしてやれって。
ねえ、これ読んで!!」

ウサコッツが抱えていた絵本……『長靴をはいた猫』を読むように
せがむ。

「……ったく……なにがどうなってるんだ?」

文句をいいながらウサコッツを膝にのせて、読み聞かせをしてやる
ことにした。

……まあ……認めたくないがヒマだし……

展開が早いが、さらに2時間ほどたったころ……

「ねえ!僕飽きた〜」

「それはこっちのセリフだ!!」

駄々をこね始めるウサコッツ。

「だいたい、。二時間も同じ絵本を読み聞かせし続けたこちらの身にもなれ!!」

俺の方が、とつくに飽きてるわ!!」

ウィ〜〜ン

「さあ、準備が出来たぞ。出るがよい」

また、ヴァンプの顔が現れる……その下には出口と思われる穴が……

「なんだ? 一体……」

カノンは警戒しながら穴から外に出た。

「誕生日おめでとうカノンさん!!!!」

パーーン!! とクラッカーが鳴る。

そこは綺麗に飾りつけされた川崎支部の居間……怪人たちがパチパチと手を叩いている。

「お……おい……これはなんだ?」

「カノンさんの誕生日のお祝いです!」

……たしかにヴァンプの目の前にあるケーキには

『ハッピーバースデー！カノンさん！！』

と書かれた丸いショートケーキが……

「あのな……カーサから聞いただろ？俺は……」

「セイントの補欠だったことですか？」

「ああ……だから俺はお前たちの敵だぞ？」

「敵だぞ〜じゃねえよ、敵じゃねえんだよ。」

カーメンマンの弟のアントキラーが、ニヤニヤ笑いながら言う。

「そうですね。カノンさんは敵じゃないですよ。もう仲間です。」

「な…仲間？」

「もう、数か月も一緒に暮らしてきたじゃないですか！仲間ですよ！」

「お前たち……」

なんかジ〜ンと来るカノン……

今まで誕生日を祝ってくれる奴なんていなかった。

聖域にいた頃は、隠された存在であるカノンは『サガの生誕祭』を横目で見ながら、ひとりで過ごしていたし、

海界時代は、アトランティスの復興やら海將軍の育成でそれぞれではなかった。

こうして祝ってもらえるのは初めてカモしれない……

「だが、だれから聞いたんだ？」

「ラダマンティスさんに電話で聞いたんです。誕生日は8月16日だって！！」

「……は？」

「すみません。本当は明日やるつもりだったんですけど、当日は用事が入ってて……」

「いや…そうじゃなくて……さっきから気になってたんだが……」

俺の誕生日は『5月30日』だ……」

しゅんとする場……

「え？」

「いや……ここまでしてくれて本当にありがたいのだが……」

「ヴァンプ様……」

「……すみません……ちょっと回想してみます……」

――ヴァンプの回想シーン――

「あっ？もしもし？ラダマンティスさんですか？」

『……ガー……ガー……お……ヴァンプさ……か？』

とつても電波が悪い……が、構わないで続ける。

「すみません。聖闘士のカノンさんの誕生日っていつですか？今月ですか？」

『……せ……ント？……今月……16日……』

「16ですか！？もうすぐですね！ーありがとうございます！ー」

――回想シーン終了――

「……それ……伝わってなかったんじゃないか？」

「えっ？」

「……『聖闘士で今月誕生日の奴の日にち』を聞かれたのかと思っ
たのではないか？」

実際、8月16日は、獅子座の聖闘士の誕生日だしな。」

しゅんとするその場……視線がヴァンプに集まる……

「それなら、少し遅れたパーティーですね！」

「いや、三か月遅れは少しとは言わんだろ……！」

「はいはい、まあ、のめるんだからいいじゃないですか。」

こうして、約三か月遅れのカノンの誕生日会が開かれたのだった……。

FIGHT 25 ボルネオの脅威!?

FIGHT 25 ボルネオの脅威!?

「……………帰ったぞ〜……………うつ!?!なんだこの臭い……………」

パチンコで(小宇宙をつかってズルしたおかげで)勝ちまっくつて上機嫌だったカノンは、鼻を覆った。

なんか川崎支部の中が……………臭い……………
甘い臭いが充満しすぎていてクラクラする……………

「あつ!?!カノンさん!?!よかった!?!」

戦闘員が……………おそらく一号が中から出てきた。

「なんだ?このむせ返るような……………」

「バナナです……………」

「……………バナナ?」

「ボルネオ産のバナナです……………あの……………カノンさんはご存知ですね?」

先日からアジトに来ている野生児のモルグを……………」

「ああ……………あのサルか……………」

思い出すだけでイラつくサル……………というかボルネオから来たオライタン型怪人・モルグ。

しよつちゆう『ウホウホウホウホ』うるさく走り回ってるか、モグモグとバナナを食べていたサルだ。

…一度、ヴァンプに文句を言ったことがある…

「お前の部下なんだから！？しっかりしつけろよ！！」

そしたら、ヴァンプは青ざめた顔でこういったのだ…

「……無理なんです……野生児のモルグ君を調教するには、

『猛獣使いのテイマー君』でないと……」

「じゃあ、その怪人を呼べばいいではないか！！」

「呼びました！ーちゃんと金属探知機に彼の象徴の『鞭』が引つかかって渡航禁止にならないように、鞭だけは荷物扱いで先に別ルートで送って……ほら！これです！！」

ヴァンプの手には、金属の鞭が握られていた。

「……で……肝心の猛獣使いは？」

「……昨日日本に着く予定だったんですけど、

ボルネオが嵐で飛行機が飛ばず……来週になりそうだと……」

何も言葉が返せなかった……

「……で、アレがどうしたんだよ？」

「……実は……二つ問題が起きて、ボルネオに帰ることになったんです……」

「問題？」

「はい……」

言いにくそうに下を向く戦闘員……

「まず、猛獣使いのテイマーさんなんですけど……」

飛行機に乗る寸前に体調を悪くして、渡航できなくなったんです。だから、モルグとレッドとの対決も延期になるな……って思ったたら……

今度はモルグが……」

「なんだ？あのサルも風邪をひくのか？」

「……ホームシックになっいたらしく……すっかり痩せてしまっ……」

「……道理でここ数日、静かだったんだな……」

「オラウータンはジャングルに住む生き物ですからね……
ヴァンプ様が言っていました……」

『コンクリート・ジャングルには勝てなかったんだね……』って。」

「……なにくだらないうってんだよ……」

で、それとこのバナナ臭さとどう関係が？」

「……見た方が早いですね……」

戦闘員が手招きをする。カノンは戦闘員について行き、居間に通じる襖を開けた。

「……」

「あっ！！モグモグ……カノンさん！！手伝ってください！！」

「うぐ……4000年生きてて……こんなにバナナを一度に食べるのは……もう無理……」

「僕、バナナ飽きた……」

ちやぶ台の上に……天井に着きそうなくらいのバナナの山……

……バナナの量を減らそうと悪戦苦闘する支部の面々……

「……なんだコレは……」

「……モルグがボルネオに帰ったから……彼のバナナが余ってしまった……」

「余ったというレベルではないだろ……」

こんな量……一度に食べたなら、絶対途中でリバーズすること間違いなしだ。

「……！そうだ！！カノンさん！！カノンの知り合いにバナナ好きの人居ませんか！？」

「……いや……いないな……こんなにバナナだけを一度に消費できる奴はいない。」

大食いの奴がたくさんいるところなら知っているが……」

「……実は……あと物置一つ分のバナナがあるんです……
どうしても腐らせたくないんです、私！！」

だから、カノンさんがこの間、私を助けてくれたゴールデンなんたらで、大食いの人の所に送ってくれませんか？」

「俺は運送業者か！？……そんなもの、近所で分ければいいだろ？」

「……もう可能な限り分けました！！かよ子さんにも、森末さんにも、そのほか区の人たちにも！！」

「………つたく」

カノンは頭をかいた。

「あれは、どこにつながるか分からない技なんだぞ？」

そりゃ……集中すれば多少コントロールできるが………」

「大丈夫です！カノンさんを信じます、私！！」

信じる信じないの問題ではないんだけどな……
と思いつながら、カノンは物置のドアを開けた。
とたんにむせ返るようなバナナの匂いがカノンを襲う。

(……集中しろ……集中しろ……)

さすがに、これから三食以上バナナ生活は嫌なカノン。
これ以上ないくらい集中力を高める。

送り先は……サガの住処…双児宮……

………としたいところだが、あとが怖いので、多少の事なら許して
くれそうな『聖域唯一の常識人・牡牛座のアルデバラ』の住まう
金牛宮………

「『ゴルドントライアングル』!!!」

すばやく三角形を宙に描くカノン。

その中へバナナが、あれよあれよと吸い込まれていく……

「うわ〜凄い凄い!!」

ウサコッツがはしゃぐ。

「……さて、たぶんこれで平気だ。」

「ありがとうございますカノンさん!!」

「よかったですね、少しでもバナナが減って。」

とはいっても、まだ居間には積み上げられたバナナが残っている。

「じゃあ、このバナナを減らすわよ!!」

支部の面々……とカノンは、一生分のバナナを食べることになったのだった……。

——その頃の聖域では——

「なんだこれは！……！！！」

地球の裏側まで響きそうな悲鳴が金牛宮から……ではなく……

「！？どうしたんだよ！？」

「わ……私の魔宮デモンローズ薔薇が！！！」

真っ青になってうろたえる魚座のアフロディーテ。

そう……確かにカノンが集中したおかげで、あの大量のバナナは聖域の十二宮に送られた……

が、どこをどう間違えたのか狂ったのかは分からないが、なぜか一番上の宮……双魚宮の……それも猛毒バラで知られる魔宮薔薇の園に落ちたのだった。

ボルネオ産の大量のバナナに押しつぶされた繊細なバラは、壊滅的なダメージを被った。

……だけならいい。

問題は、バナナがすべて、魔宮薔薇の毒に侵されてしまったのだ。つまり……このバナナは耐毒性のあるアフロディーテしか食べられなくなってしまうのだ。むろん！！一人で食べきれぬわけもない。

解毒薬でバナナを解毒すれば、他の人間も食べられるのだが、バナナは足が速い。ちまちま一本ずつ解毒していたら、腐ってしまう。

結局、このバナナの三分の一は、半泣きになりながらアフロディーテが食べ……。残った三分の二は、魔宮薔薇の肥料になったのだ……。

――川崎支部の掟――

仮面と防災頭巾のようなマントをしている人型怪人：ヴァイヤーが、ヴァンプの前に現れた。

「キィ〜〜！ヴァンプ様！！買ってきました！！」

「ああ、ありがとう。」

ヴァイヤーが下げていたスーパーの袋を受け取るヴァンプ。
ヴァイヤーは、そのまま台所で皿洗いを始める。

「ん？」

袋の中を確認していたヴァンプの手が止まる。

そして、きりつとした威厳のある顔立ちになって、鋭くこう言い放ったのだ！！

「ヴァイヤー君！！
ウチでアイスと言ったら、
ハーゲン ツツじゃなくて、レディーボー
ンでしょ……！！……！！」

FIGHT 26 冥府の使者

FIGHT 26 冥府の使者

……ミンミンミン……ミンミンミン……

「くくく冷てえ!!!」

エアコンがガンガン効いた部屋で、アイスを食べる川崎支部の面々

……

「やっぱり、暑い日にはアイスですよね!」

「あっ!こうしてアップルパイにかけて食べるとおいしいわよ。」

「あっ!ほんとだ!!おいしい〜」

……いつもの賑やかな支部……
しかし……

ピンポン

何者かの来訪を告げるチャイム……これが、日常を大きく変えた。

「あら、やだ。誰かしら。」

立ち上がるヴァンプ……玄関へ小走りで向かうその後ろ姿をながめるカノン……

「ん……？……この小宇宙は……」

「あっ！！あなたは！！立ち話もなんですし、あがってください！

」

「い……いえ……俺は……」

「いいんですよ。暑いですし、エアコンの空気が逃げちゃいますし。

」

「……では、お言葉に甘えて……」

ヴァンプに次いで部屋に入ってくる男……その男を見て、カノンはため息をついた。

「……なんでお前が、またここに来たんだ？」

そこにいたのは、冥闘士……天哭星^{てんこくせい}ハーピーのバレンタインだった。バレンタインはカノンを目にする、嫌そうな顔をした。

「なんだ……貴様、まだ連れ戻されていないのか。」

「……ふん。お前には関係ないな。」

ところで、冥闘士がなんで、ここに来たんだ？」

「決まっている……俺の主君……ラダマンティス様の命令だ。」

「お前の主はハーデスではないのか？」

「いや、一番はラダマンティス様だ。その次にハーデス様だな。」

ラダマンティス様は俺のすべてだ。」

」

殺気のもった鋭い目でカノンを見るバレンタイン。
何も言えないカノン……。

……そう……バレンタインはカノンに好印象をもっていない。

理由は聖闘士云々よりも、聖戦の際に、彼の敬愛するラダマンティスを殺したのが、カノンだからである……

しかも、その時の殺し方が、『心中』っぽいやり方だったため、復活後、ラダマンティスとカノンに関する、あらぬ噂が飛び交ったのだ。

……カノン自身は、『噂なんてそのうち自然消滅する』と思い、相手にもしなかつたのだが、

……敬愛するラダマンティスの名誉のため……その火消しに飛び回ったバレンタイン………何もしなかつたカノンに好印象を持つわけがない。

「どうかしたんですか？」

間の抜けた声で、話に入ってくるヴァンプ……

「あつ……いえ。忘れるところでした。」

実はヴァンプさんに、頼みたいことがあります。」

「頼みたいこと？なにそれ？」

「実は………」

しっかりと姿勢を整えるバレンタイン………まっすぐヴァンプを見る

……

「冥界で、家庭料理なるモノを作ってほしいのです……！」

「はあ………!?」

カノン…と支部の面々が絶句した。
ヴァンプも、予想外の言葉にホゲ〜っとしてしまっていた。

「え…えつと…詳しくわけを聞かせてほしいんですけど…」

正気に戻った一号が、バレンタインに問いかける。

「…実は数十分前の事…」

――回想シーン――

「『『家庭の味…ですか!?!?!』」

冥界三巨頭の声がめずらしくそろった。

彼らを見下ろす女主人・パンドラは重々しくうなずく。

「そうじゃ。…実はハーデス様が『家庭の味というものを味わってみたい』」

と申しているのじゃ…。」「
「家庭の味ですか…まず、どこでその言葉を知ったんでしょうね?」

ミーノスがもつともな発言をする。

「最近お読みになった本に書かれていたそうじゃ。
しかし、私は料理などやったことがない。

…だから、お前たち…はやく家庭の味とやら作ってまいれ!」

「そんなー！俺、料理なんて出来ないよ！
カップ麺とかインスタントなら出来るけど」

「安心しろ……最初からお前はあてにしていけないぞ、アイアコスよ。」

「……………」

「先に申しておきますが、私も無理ですよ？」

料理に関しては全て召使にやらせておりましたので。」

「なに！？……まあ……言われてみたらそうかもじゃな……」

「つてか、お前ボンボンだったんだな！」

「……アイアコス……お前、見て分からのか？」

こいつが一般企業の中堅管理職の息子に見えるか！？」

どう考えても田舎金持ち貴族の長男……もしくは末っ子だろうが！」

「うーん……実は俺、チベットの山奥で育ったから、サラリーマンってよく分らないんだよな。」

「サラリーマンというのは、ラダマンティスみたいに、朝から晩まで上司にこき使われて働いている人たちですよ。」

「あーそうなんだ。」

「お前らな……………」

「そうか……では、ラダマンティスはどうじゃ？」

「家庭の味……ですか……………」

自分の小さいころ……食べた料理を思い返してみる……………」

……………本来の食感がわからなくなるほど茹でてある野菜……………」

……………油で黒くなるまで揚げてある魚や肉……………」

そこそこの味で食べられたのは、たった一回だけ連れて行ってくれたレストランのローストビーフくらい……………」

「無理ですよ、ラダマンティスの実家はイギリスですから。」

「……………ミーノスには言われなくなかったが……………事実だな。」

パンドラ様、俺には無理です。

唯一、ハーデス様の口に合いそうなローストビーフは、家庭の味と
は言いません。」

「……たしかにな……」

「ふむ……困ったのお……」

悩みこむ一同……その時、ラダマンティスの脳裏に、ある人物の顔
が浮かんだ。

「一人……家庭の味を作り出せる人物を知っています……」

「まことか!？」

「し……しかし……人間というか……怪人……」

「なんでもよい!早く連れてまいれ!！」

「はっ!！では、さっそく、バレンタインに行かせます!！!！」

――回想シーン終了――

「……ということだ。」

しーんとなる空間……

「あのなあ……ハーデスの奴、何やってんだよ!？」

「俺に聞くな。」

「つまり、料理を作ればいいのね、私？」

「はい。普通の料理で構いません。」

「どうか、お願いします!！!！」

頭を下げるバレンタイン……

「分かったわ。」

「おい！ヴァンプ！！」

分かっているのか！？帰ってこられないかもしれないんだぞ！？」

「大丈夫ですよ、カノンさん！

では、支度させてください。」

…………… 本当に大丈夫なのか？

一抹の不安を覚えるカノンだった。

FIGHT 27 黄色い悪魔 襲来！！

FIGHT 27 黄色の悪魔 襲来！！

「なに笑ってんだ？」

カノンと一緒にドラマ『HER』の再放送を見ていた人型怪人……ギョウがいきなりクスクス笑いを始めた。

「いや〜、聞いた話なんだけどさあ〜、『きむら たくや』って名前の正義の味方がいるんだってよ！」

「はあ〜？ふざけてるのか？」

「いやいや、マジだった！」

ピンポン

「ん？誰だ？」

カノンが玄関に行くと……

「あつ、すまへん。ヴァンプはんは、いまへんか？」

見下ろすと、ビール腹の黄色のヒーローがいた。……なんか、頭の位置がカノンの腹くらいの高さ、低い背の男だった。

「……ヴァンプは今、出かけている。」

「え……そうなら仕方ありません……どんくらいで帰ってくるん

でっか？」

「……どんくらいだ？……えっと……」

「あっ！！イエローさんじゃないですか！！！！」

ちょうどヴァンプが帰ってきた。

「あっ！！ヴァンプはん！！久しぶりでな」

「イエローさんこそ！！今日はどうして川崎に？」

「いや、仕事の関係で、ちょっとくから来てたんや。んで、近く寄ったから顔見よう思ったんや。

そんでもってヴァンプはん、この兄ちゃん誰や？

怪人ではないみたいやけど……」

汗を拭きながらイエローと呼ばれたヒーローは尋ねた。

「ああ。紹介しますね。

彼はカノンさん。人間なんだけど、ちょっと居候してるのよ。

カノンさん、こちらはイエローさん。

本名は、『きむら たくや』さんっていうんですよ。」

「ほう……まあ、よろしくな………って………なに………
！？」

もう一回、マジマジと目の前の小さなヒーロを見る。

………どこからどうみても、ビール腹のオッサン………

「………本当にキムタクなのか？」

「ほんまやで。いや、この名前とマスクのおかげで、営業面で結構好感を得てるんですわ。」

「営業？もうヒーローではないのか？」

「引退したんや。んで、今は家業の建築業を継いでるんやで。」

「……………」

なんか、何も言えなくなってしまったカノンだった。

「それで、ヴァンプはんは、どこ行ってたんや？」

「ええ。ちよつと冥界まで行ってたのよ。」

「えっ！？冥界って……大丈夫やったんか？」

「平気平気。ちよつと料理作りに行っていただけだし、私。

それに、世界征服の手伝いをしてもらえるように、頼んできたから。」

「おっ……まだ企んでおりますなあ〜」

「おかげさまで」

ハハハつと玄関に笑い声が響く。

「あっ…そうだ。これ…イエローさんにあげます。たくさん貰ってきちゃったんで。」

盾の内部から一つの小さな包みを取り出した。

「これは……………」

「冥界名物の『ケルベロスまんじゅう』ですって。ファラオさんって人が、たくさんくれたのよ。」

「……………（あいつ…何作ってたんだよ……………）」

「あ…おおきに〜。すまへんな……………何も持ってきておらんや……………」

「気にしないでくださいよ〜」

「……………あっ！！せや！！」

礼つてことで、わいが稽古つけたろっか？

人間だからって、これからの世の中、護身術くらい出来んかったら飯くってへんで〜」

何故か、さぁーっつと顔色が変わるヴァンプ……

「い……いえ……そんな……悪いですし……」

「気にせんでええっちゆうねん、ヴァンプはん。

電車の時間まで、まだ時間あるんやし。」

「あ、俺いいっすか？」

中から話を聞いていたギョウが出てきた。

「ほう、お前はんが？」

「だって、あのレッドと戦隊組んでいたイエローさんに稽古つけてもらえるなんて、めったにないですよ！！

これで一気に俺、有名人って感じ!？」

「……まあ、ウォーミング アップってことで、お願いするか……」

数分後……いつもの公園……

「ほらほら、もうギブかいな？」

「ひ……ひい……」

ギョウをコンクリートブロックで連続強打してから、今は左手にスタンガンをして右手に栓抜きを持って、ギョウの背中をグリグリグリグリ押しまくっているイエローがいた……。

「……おい……性格かわってないか？」

まずは、見ているだけのカノンが、蒼い顔をしているヴァンプに尋ねた。

「……いえ……変わっていません……」

普段は人のいい方なんですけど、戦闘になると一変……悪徳レスラーみたいな戦い方をするヒーロー……ウエザーイエロー……通称『イエローデビル』……」

「……おい兄ちゃんはやらんのか？」

ギョウを殺しかけて……いや、ギョウに稽古をつけているイエローが、笑顔でカノンの方を見た。

「……ふ……いいだろう。」

ゴキ……ゴキ……と拳を鳴らすカノン。

「雷の戦士の實力みせてやるで……！」

カノンの頭の上に、スタンガンを振り上げるイエロー
カノンは、動こうとしない。平然と立っている。

「か……カノンさん……！！！」

ヴァンプが悲鳴に近い声を上げる……

「よけへんと、終わりやで……！！！」

すかつ

「あれ？」

スタンガンを振り下ろした手は、宙を切った。

……そこには、だれもいない……

「どうした？お前こそ、その程度か？」

イエローの背後にカノンが立っていた。

「なっ!？」

「次はこっちの番だな」

カノンは少し小宇宙を高めた。……イエローの顔色が変わった。

「ちょっと…本気でいかんと、まずいかもしれへんな……」

栓抜きを持ち直すイエロー。

「す…すごい……」

あっけにとられるヴァンプ……。

彼の視線の先では、すざましい戦いがおこっていた。

イエローの栓抜きとカノンの拳が、ものすごい勢いでぶつかり合っているのだろうが、動きが早すぎるせいで、何をしているかよく分からない……

「くっ!！」

拳の雨を防ぎきれなかったのか、イエローが公園の端まで吹っ飛ば

された。

「うう……やっぱ、身体がにぶってるわい……
兄ちゃん、強いなあ」

「お前もな。」

立ち上がるイエロー。

「いや〜兄ちゃんなら、レッドも倒せるかもしれんな。」

ん……あつ！もう電車の時間やわ……

ほな、おおきに〜ヴァンプはんにカノンはん！」

手を振りながらイエローは去っていった。

「か……カノンさん………凄いです！！あのイエローさんに一発入れる
なんて……！」

感激するヴァンプ……。

「今日は、カノンさんの好きなモノを作りますね！！」

「いや、何度も言うけど、お前の思考は主婦か!？」

カノンの呆れた声が公園に響く……。

天体戦士サンレッド………

これは、川崎市高津区溝口で繰り広げられる、善と悪の壮絶なる戦いの物語である。

Special FIGHT ヴァンプ、冥界へ行く！

薄暗い…紫がかった霧の立ち込める室内で、ヴァンプは壁にかけたフロシャイムのロゴを背に立っている……。彼は、ある一枚の写真を取り出した。

「この方が、われわれが今回会いに行く『ハーデス』という方だ。」
そこに映っているのは黒髪の美少年……

「……しかし…ヴァンプ様…なぜ俺たちも付いていかなくてはいけないのですか？」
「…それはだな……カーメンマンとメダリオよ……」

お前たちが、ふざけて支部の窓ガラスを割った罰だ！！！！」

Special Fight ヴァンプ、冥界へ行く！

・アーケロン川

「おい、あんたが報告にあった、ヴァンプっていう怪人ご一行様か？」

対岸が見えない大河…アケロン川の渡し守の天間星アケロンの

カロンはオールを片手に問う。

「ええ。ちよつとバレンタインさんに頼まれて。

あの〜通してくれますか？」

「いいぜ……だが……」

カロンは右手をヴァンプに突き出した。

「金があればな。」

「えっ！？ただじゃないの？」

「当たり前だよ、ウサギ!!」

「え〜〜ケチだな。」

「ケチじゃねえ。これが世の中の通りつてもんよ。さあ、有金全部早くだしな。」

「仕方ないわね……」

ヴァンプは財布から一万円を取り出した。

「これで足りないようなら、『世界征服資金』の中から出してもらえるように申請するけど……」

「十分だぜ。乗りな!!」

船に乗り込むヴァンプ。続いてカーメンマンが乗り込もうとしたが

……

「おおっと!!お前たちも払えよ。この將軍様と同じくらいな。」

「はあ〜?意味わかんねえよ、溶かすぞ!!」

「いいじゃねえか、一人や二人くらい、呪うぞ!!」

「ごちゃごちゃ言ってるで、早く払いやがれ!!」

「……ったく……仕方ねえな……ほらよ。」

あ〜あ、今月の食費はアント（弟）におごってもらおう。」
「おい！！ずりいぞ！！俺も混ぜやがれ！！！」

「ごちゃごちゃ言いながら、今月の生活費・一万円を支払うメダリオ・カーメンマンも船に乗り込んだ。
残るは……ウサコツツのみ。」

「さあ、ウサギも金をだしな。」

「うう……どうしよう……30円しかない……」

十円玉を三つ出すウサコツツ。カロンは大きな声をあげて笑い始めた。

「ハハハ！そんなちっぽけな金で渡ろうと？ふざけんじゃねえ！！！」

「う……ごめんなさい……！！！」

うるつと涙をにじませて謝るウサコツツ……

（か……かわいい……！！）

ドキンつときてしまったカロン……

「あ〜し……仕方ねえな！！特別だ！！乗れよ。」

「ありがとう……！！！」

「おい！ずりいぞ……！！！」

「俺たちの一万円返しやがれ……！！！」

戦闘態勢にはいる二体……

「はらはら、喧嘩しないで。……じゃあ、お願いします、カロンスん。」

「おう。出発するぜ。」

オールをこぎ始めるカロンス……ヴァンプの冥界の旅が幕を開けた。

・第一獄・裁きの館

「いいか。くれぐれも中では静かにしろよ。」

くしゃみ一つも立てるなよ……」

ここの案内役：雑兵のマルキーノが再三口を酸っぱくして言う。

「そんなに静かにしないといけないのか？」

「当たり前です！……三巨頭のミーノス様の代行官として、ほぼ不眠不休で『裁きの館』を訪れる亡者どもの相手をしていらっしゃるルネ様は、静粛を好むのです！」

だから、くれぐれも静かに通り過ぎてください。」

「分かったわ。……みんな！静かにね。」

「……はい、ヴァンプ様！！」「」

こうして亡者たちに混ざって、裁きの館に入った一行だが……

「あっ……！！……！！」

突然……しかもルネの目の前を通過するときに、ヴァンプが大声を上げたのだ。

「ちょ……ヴァンプさん！？静かに……」

「どうしよう!! お鍋の火を消したかしら、私!!」

「どうだったっけ……? ウサは知ってるか?」

「え〜!?! 知らないよ?」

「携帯電話で確かめてみますか?」

「あつ…そうね……やだ〜困る〜。圏外になってる。」

「大丈夫ですよ。きっと誰かがとめてくれて……って痛ってえ!!

足を踏むんじゃないよ、メダリオ!! 呪うぞ!!」

「わりいわりい。」

「静粛にといっておろうが!!!!」

ドンドンドンつと机を連打する音で、ようやく話すのをやめた一行

……

「マルキーノ……」

「はっ!! 申し訳ありません、ルネ様!! 再三言ったのですが……」

「…貴様……何度私に怒鳴らせれば気が済むんだ?」

……ルネの様子から察するに、すでに数回、『静粛にするよう』『ウ
アンプ達に言っていたらしい……]が、彼らの声の音量が大きすぎて、
聞こえなかったようだ……

「……この裁きの館を……」

「あつ!! 見てみて!! 一本だけだけど、アンテナが立ったわよ!

!!」

「じゃあ、今のうちに……」

「お前ら、静かにしろ!!!! ルネ様はお怒りだぞ!!!!!!」

「お前が静かにしろ、マルキーノ!」

「あばばば〜! お、お許しをルネ様〜」

「問答無用だ!!!!」

バルロンの鞭を振り下ろすルネ……だった……その攻撃が彼に届くことはなかった……

ドサッ

「る……ルネ様!？」

マルキーノが恐る恐る近づくと……一応……息はあったが、目は白目だし呼吸も浅かった……正直・よくいまままで法廷に立っていられたなあ……っと思っくらしい死相がはつきり出ていた。

「し……しっかりしてください!!すぐに救護室へ……」

「だ……だめだ……マルキーノ……」

私がお金を空けたら……い……以前、私が休暇をとったら……ミーノス様の手抜き裁判で……冥界が大変な事になった……のを忘れたのか?」

「で……ですが……このままだと死にますよ?」

「いや……私は……仕事を……亡者がミーノス……様の……マリオネットに……ガクッ」

「ルネ様?……ルネ様!?!おい!!だれか救護班を!!ルネ様が危篤だ!!!!」

いつになく騒がしい裁きの館……だった……

「ああ良かった。ちゃんと火が消えてたって!!」

うれしそうに『らくちんほん』の通話を切るヴァンプ……だった。

・ジュデッカ

「うつ！？こ……これは！！！！」

玉座に腰を掛けた黒髪の美少年……もとい、冥界を統べる神・ハーデスの目が、くわあっと大きく開かれた。

彼の前に立っているのは、ヴァンプとお伴のカーメンマン・メダリオ・ウサコツだった。

……裁きの館から、救護班……というより、その場に偶然居合わせたミューのテレポーターションで、一気に瀕死のルネと一緒に、救護室があるジユデツカまで来たのだった。

「美味！！なんとというべきだろうか……質素で安物の料理のはずなのだが、不味くない。

いままで味わったことのない味だ……どこか不思議な温かみを感じる。

見事であるぞ、ヴァンプとやら。」

「ありがとうございます。」

「ん？……このスープもいけるぞ。」

「ああ、わかめの味噌汁ですか？ありがとうございます。

これは、ちゃんと『かつおぶし』で出汁をとってますから。」

「うむ……美味であるぞ。

どうだ？このまま私の専属料理人にならないか？」

ヴァンプは困った顔をした。

「お気持ちは嬉しいです。……でも……世界征服をしないとイケないんです、私達……！」

「ヴァンプ！！ハーデス様に逆らうのか！？」

ラダマンティスがキレて立ち上がった。

「でも……將軍だし、私……」

「だが、これは滅多にない幸運……」

「よい、ラダマンティスよ。」

ハーデスが茶碗を持っていない方の手をあげて制する。

「も……もうしわけありません……」

ラダマンティスがさっと跪いた。

「ヴァンプよ……では、世界征服が終わったら、私の専属料理人になつてくれるか？」

「はい！よろこんでお引き受けしますよ、私。」

「そうか……なら、出来る限りだが、余もフロシャイムの世界征服の手助けをしよう。」

「本当ですか！？」

「ああ。……おい、例のモノを！！」

パンツと手を叩くハーデス。

すると、先程までBGMとして琴を奏でていたファラオが立ち上がった。

彼はたくさん箱を抱えていた。

「？これは？」

「ハーデス様が『土産として何か用意しろ』と言われたので作りました『ケルベロスまんじゅう』です。

少ないものですが……」

「いや……多すぎだろ……」

まんじゅう6つ入りの箱を10個ほど、彼は抱えていた……

「いや、私のケルベロスケルベロスは本当にかわいくって……
いつもは彼用に100個単位で作っているんですよ。

あつ……でも、安心してください。人間が食べても全く害はないんで。」

「俺たち……怪人なんだけど……」

「たぶん大丈夫でしょう。」

つい先日もケルベロスが熱を出して50個ほど余った際、アイアコ
ス様がおいしそうに食べてくれましたし。」

「……何をやっているのですか、貴方は……」

「いいじゃないか、ミーノス。腹が減ってたんだよ。」

「ありがとうございます……！これだけあれば、かよ子さん達の所
へお土産として持って行けるわ！」

「………つと言つことば、このまんじゅう、おいしいですよ……！」
「本当においしい……！餡子も手作りじゃない……！……」

レッドの家………もとい、かよ子の家で、まんじゅうをほおぼるプア
ンプとかよ子。

「………あいつら………何してんだよ………」

「………つーか、こんなの作ってる暇があるなら、冥界の仕事しつか
りやれよ………」

カノンとレッドは、ため息をついたのであった………。

S p e c i a l F I G H T ヴァンプ、冥界へ行く！（後書き）

30話達成記念！！リクエストの外伝です。遅くなつてすみません

……

これからも、精進していききたいと思います！！

FIGHT 28 参謀の来襲！！（前書き）

……参謀って言うても『ギーガス』っていう人ではありません…。

FIGHT 28 参謀の来襲！！

FIGHT 28 参謀の来襲！！

「……フロシャイムが誇る怪人達よ……」

普段とは打って変わり何やら怪しげな空気の立ち込める薄暗い居間……ヴァンプは壁にかけたフロシャイムのロゴを背に立っていた。そしてそれを囲むように怪人達（+カノン）が集まっている……。

「本日、急に招集をかけたのは、この手紙が届いたからだ。」

……といってヴァンプが取り出したのは一枚のはがき……

「……おい、それって『暑中見舞い』ではないか？」

「その通りだ、カノンさん……これは、『フロシャイムCEO』と『キングフロシャイム』からの暑中見舞いだ。」

……もう九月に入ってから結構経つ……まあ……せめて『残暑見舞い』にしるよな……っと思うカノン……
しかも字が汚い……小学生の字か！？っと言いたくなるような字だった。

「……しかし、それと今回の招集とどう関係が？」

戦闘員一号が遠慮がちに尋ねる。

「…実はこのはがきに書いてあるのだが……明日、フロシャイム参謀の『フィリップ』様が川崎支部に来ることになったのだ!!」
辺りがざわつく。

「おい……そいつってそんなにヤバいのか？」

そつと隣にいたアリジゴク型怪人でカーメンマンの弟のアントキラに尋ねるカノン……

「ヤバいのかくじゃねえよ、ヤバいんだよ。」

フィリップ参謀って言ったらな、その……まあ簡単に言えば、『クレン ンちゃん』に出てくる隣のおばさんみたいな性格の噂好きで『歩くワイドショー』って感じだな。」

「その通りだ、アントキラよ。」

『川崎支部って怪人たちがゆるくて散らかってるのよね』と言われぬように、しつかり隅から隅まで掃除をするのだ!!」

「……だから俺も招集掛けられたのか……」

「すみません、カノンさん……ですが、これには川崎支部の評判がかかっているんです!!」

「分かった分かった……で、何するんだよ。」

ゴホン……と息を整えるヴァンプ……

「では……」

「待ってください、ヴァンプ様!!」

「どうした？モスキーよ？」

「明日のレッドとの対決はどうすんですか？」

「あっ!!!!そうだった!!!!」

キャンセルの電話してくる、私!！」

すたすたと電話に向かうヴァンプ

「……あつ!もしもし……あつ!レッドさんですか!?!あのですね……明日の対決……延期してほしいんですけど……えっ?私達から頼んでおいて、断るなって……こっちにも事情があるんです!?!……はい……本当にすみません……はい……はい……」

ぴっ

「……ふう……なんとか了承してくれたよ……」

では、改めて本日の作戦を言う……まず戦闘員一号二号は、徹底的に支部の窓という窓を拭け。

台所の戸棚に、使い捨てのメラミンスポンジがあるからそれと、バケツに綺麗な水をくんで、窓とは知らずに激突してしまいそうになるくらいきれいにするのだ!！」

「「キィー」」

戦闘員は答えた。

「次にアントキラーとモスキーはフローリング担当だ。

から拭きだけではなく、フローリングの床は、ワックスまでしっかりとかけるのだぞ?」

「はい!」「了解ッス」

「次はモゲラとモギラ……お前たちには風呂を掃除してもらおう。

使い古したブラシで力まかせにこすったり、風呂掃除用の洗剤を大量に泡立てたりはするな。

『水垢とりダスター』というアクリル製の水廻り専用の雑巾があるから、それを使え。」

とにかく水垢という水垢を一網打尽にするのだ!」

「あ…あの……なんで風呂まで?」

モグラ型怪人のモギラが尋ねる。

「…フィリップ参謀は、お泊りになるのだ!」

「えっ!?!?」

全員の顔が一斉に引きつる。

「次にカノンさんは玄関の掃除を頼みます。

下駄箱の中までしっかり綺麗にしてください。

それから、ギョウは来客用の布団を干すのだ!一時間たったらしっかり裏返しにするのだぞ!」

「…分かった!」「了解しました!」

「では、かかれ!?!何が何でも!」

リリリリ〜ン!?!?!

「もう!?!なんなの!?!」

少しイライラ気味のヴァンプは、鳴り響く電話をとる。

「はい、フロシャイム川崎支部です……えっ!?!フィリップ参謀!?!?」

ど…どうも……明日は我が支部に来ていただけると……えっ?ええっ!?!?対決が見たい!?!」

……ヴァンプの顔が青ざめる……

「災難だな……」

カノンはそうつぶやくと、真っ白い雑巾を手を取った。

「ああん！？どっちなんだよ！？やるって言ったりやらないって言ったりよお！！……」

レッドがヴァンプの首根っこをつかんで怒鳴りまくる。

「……」

「あつ、カノンさん……でしたっけ？もつと食べたかどうか？」

「あつ……では、いただくとしよう。」

ヴァンプの付添いで来たカノンは、命の危険を感じているヴァンプを見ながら、かよ子と一緒にせんべいを食べていた。

「だって……いろいろと都合があるんです……」

「こつちだって、なんでお前に振り回されないといけねえんだよ！

？」

「私だって、上司に振り回されてこんなことになってるんです……」

「！」

「……逆切れかよ……」

「もういいでしょ？許してあげたら？」

かよ子が助け船を出す。カノンため息をつく。

「俺の口から言うのもなんだが……結構必死でヴァンプは謝ってる

ぞ?」

「……………」

レッドはしぶしぶ…乱暴にヴァンプから手を放した。

「あの…レッドさん?…あと二つ頼みがあるんですけど…
こっちの立場っていうものもありますし……………」

「あぁん!?なんだ?負けるって言うのか!??」

今にも殴りかかりそうな勢いのレッド。

「い…いえ、負けるつとは言っていないせん!!」

ただ……………私たちの手でピンチに追い込まれて欲しいというか…
その…もっと正統派特撮ヒーローって感じで…」

「ようは八百長しろっていうのか!?ふざけんな!!」

まさに飛びかかりそうなレッド。かよ子が止めようとするが、彼女の力では止められない。…仕方ないのでカノンが、殴ることができない様に、後ろからレッドの腕を押さえた。

「い…いえ……………ただ…『いい勝負だったな』って言われるような

……………」

「ふざけんな!!」

「ヴァ…ヴァンプさん!帰った方がいいわよ!!なんだかんだ言ってるけど、協力してくれるはずだから!!」

私からも説得しておくし……………」

「そうだぞ、ヴァンプ!!とりあえず逃げろ!!」

「……………すみません……………本当によろしくお願いします!!」

ヴァンプが頭を下げると、少しレッドの力が弱まった。どうやら、

なんとか怒りを中に押し込めたようだ……いつ決壊するか分からないが……

……カノンは押さえていた腕を放す。

「ちっ……今回だけだぞ。」

「ありがとうございます……！」

あ……それからもうひとつ……

今回の対決では、バトルスーツ着用で……」

レッドの中で何かがキレた。

「ふざけんな……！！！」

ヴァンプが一目散に走り出す！あとを追いかけるはレッド。

「逃げて……ヴァンプさん……！」

「……もう逃げてるぞ？……ん？」

チャララララララ、ランラッララララン

ヴァンプが忘れて行った携帯の着メロが流れた。

カノンは携帯をとると、マンションのエントランスに向かって歩きながら、通話ボタンを押す。

「誰だ？」

『あつ？カノンさん！？ヴァンプ様は？』

戦闘員一号……のようだ。

「ああ……レッドと命の危険がある鬼ごっこ中だ。

何かあったのか？俺は今すぐ大掃除に戻るが……」

『いえ……実は……先程参謀からまた電話があつて……急用が出来たので、来れないそうで……』

なんというか……ヴァンプとレッドには言えないな……カノンは「そうか」としか返せなかった……

〜次の日〜

いつもの公園……そこに集まるのはいつもの怪人達とカノンとレッド……

「もつ、うんざり……！行くって言ったり、行かないって言ったり……！」

ヴァンプがグイツと飲み物を飲む。

……結局予定の空いた彼らは、公園でバーベキューをすることになったのだ。

「あ……あの……レッドさん？ビール……ありますよ？」

モゲラがビールをレッドに進めるが……

「いらねえよ……この格好で飲む気になれるか……！」

彼はいつものTシャツにズボン……といった格好ではなく、しっかりとバトルスーツを着て来ていた。

「おい、ヴァンプ……！」

「いいじゃないですか!!!」

ほら!!!これ（携帯電話）で、かよ子さんも呼んでください!!!
今日とはことん飲むって決めたんです、私!!!」

そう言っただけがグイグイ飲むのは……

「それって……コーラだよな？」

カノンが一応ツッコむが、無視するヴァンプ……

天体戦士サンレッド……これは善と悪が繰り広げる壮絶な戦いの……
……物語である。

FIGHT 29 封印されし虎の過去

FIGHT 29 封印されし虎の過去

まだまだ蒸し暑い今日この頃………節電体制も一応は解かれ、ガンガンと川崎支部ではエアコンを使用していた。

「ガッル……涼しいな。」

虎型怪人アーマータイガーが気持ちよさそうに言う。

「俺の実家には、エアコンなんぞないからな。」

「えっと……たしかアーマータイガーさんの実家って……インドのベンガルでしたよね？」

戦闘員一号が聞いた。

「ああ。そうぞぞ。」

「なんで川崎に来たんですか？ずっと疑問に思ってたんですけど……」

「……そうだな………神に近い少年のおかげ………とでも言うておこう。」

「？なんですか？」

「………あれは、十年以上昔のことだな………あの頃の俺は、フロシヤム・インド支部にいた頃だ………」

く回想シーンく

アーマータイガーがフロシャイムに入ってから、すぐに妙な噂を聞いた。

『この先にある寺には、絶対に近づかない方がいい。近づいた者は、五体満足ではいられない』……という噂だ。

…まだまだ怖いもの知らずだったアーマータイガーは、笑いながら、寺に向かったのだ……肝試しのような感覚で……

「ガルルくなんだ。なににもねえじゃないか!!」

寺を開けても、そこには人がいなかった。

……大きな仏像が一つあるだけ……いや……よく見ると、仏像の前に……美しく輝く金髪に黄金の鎧を纏った、やせこけた少年が……

「へっ!!ガキが一人いるだけだな。」

……殺してしまおう……ニヤリと笑うと、アーマータイガーは拳を上げた……が、すぐにおろしてしまった。

「なぜ、下ろすのかね?」

「!?!お前っ!!なんで俺が手を挙げていたとわかつたんだ!?!」

その少年は目をつぶったままだった。

「私は『何故下ろしたのか』と聞いている。」

少年から、ものすごい威圧感を感じたアーマータイガー……

「……………貴様のようなガキを一人殺したところで、世界征服につながると思えん。」

「ほう……………君の目的は世界征服なのか……………ふっ……………愚かな事よ」
「なんだと!?!」

少年は、かすかに笑った…ように見えた。

「君みたいな雑魚に、世界征服ができると思えん。」
「何を?!?!」

「私は事実を伝えたまでだ。私にも勝てぬ雑魚が、世界征服など笑止千万よ。」

「俺がお前より……………」

「弱い。疑うのなら、試してみるかね?」

「……………いいだろう!!後悔するな!!」

アーマータイガーは少年に殴り掛かった。

……………が、勝負は一瞬だったといえるだろう。

「なっ!?!」

渾身の力を込めたはずだった……………なのに……………

「なにい!?!?な……………なんだ!?!……………何か空気の圧力みたいなものが、オレの拳を……………とめている!?!」

そう、アーマータイガーの拳は、少年にすら届いていなかった。

軽々とアーマータイガーの拳に対して手を飾しているだけだ。…それだけなのに、見えない何かに押されるように拳は防がれていた。

「もうすぐそのままでは、いずれお前の手の皮が裂け、骨が砕けるぞ。それから、肉が爆せて腕が消し飛ぶのだ。」
「ぐわあああ……！」

軽く飛ばされ、地面にめり込むアーマータイガー。

「分かったなら、さつさと帰るがよい。」
「？五体満足で帰してくれるのか？」
「君はMかね？五体不満足になりたいのかね？」
「なりたいわけないだろ……！」
「つというより、お前は何者だ！？人間ではないだろ……！」
「いや、人間だ。…『神にもつとも近い』と言われているがな。」
「神……だと？」

そんなのありえないだろ……つと思ったアーマータイガーだったが、先程の戦闘と呼べない戦闘を思い出すと、あながち嘘ではない気がした。……歳の割に態度がデカすぎだし。

「……で、名前はなんというんだ？一応、人間なんだろう？」
「私はシヤカという。ところで君はいつまでそこにいるのかね？もしかして私の説法を聞きに来たのか？」
「なんでそうなるんだ！？オマエな……保護者はいないのか？親の顔が見てやりたいわ！！ガルル……」
「私は親を知らん。」
「……そうか……それは辛いことを聞いて悪かったな……」
「ふむ。分かったのなら、大地に額をこすり付けて私を拝め……」
「うん。お前が不憫な奴だと一瞬でも感じた俺が間違っていたのか

もしれないな!!

お前は神のつもりなのか!？」

「さっき言ったであろうが。神にもっとも近い人間だと」

「その基準が分からん!!」

「さて……説法をしよう。まずは、そこにひざまずきたまえ。」

「聞けよ!!人の話をな!!」

お前さあ、普段そこらへんの人と話してないだろ!!」

「……なぜわかった？」

ピクリ…と動くシヤカ…という少年。

「なぜ、私が普段から人ではなく神仏と対話しているのを知っているのかね？」

「そつちか!？」

「他に何かあるのかね？」

「……はあ……お前は同じ年齢の人と話したことはないのか？」

「愚問だ。あるに決まっておろう。」

「そいつらは、お前みたいに偉そうじゃなかっただろ？」

「もっと年頃の子供みたいにふるまえよな？」

「私に、あのような『脳みそ筋肉馬鹿』どもや『羊の皮をかぶった

悪意の塊』と仲良くやれと？」

いくかね、ポトリと？」

ゾクゾクつと背中^{アーマータイガー}の毛が恐怖で逆立った気がした。

こいつ……自分をマジで殺すかも……

「さて……ずいぶんと脱線した話を戻すでしょう。本日の説法だが

……」

「どんだけ説法したいんだ!？」

つというより、俺が『なぜ俺を見逃そうとした?』という質問に答

えてないぞ!!」

「アテナの聖闘士は、無益な殺生を好まぬからだ」

「……本気で言っているのか？」

アーマータイガーにはセイントというのが、どういう職業なのかは分からないが…目の前の少年は確実に一人・二人は天に送っている気がする。

「無論、本気だ。」

「……セイントとはなんだ？」

「いちいち質問が多い獣だな。まあいい。特別に答えてやろう。

聖闘士とは世界の平和を守るギリシャ神話の女神・アテナを御守りし使える者の事だ。」

「お前、仏教徒ではないのか!？」

「仏教徒だがどうかしたのかね？」

「……」

もうツッコむ気にはなれなかった。

「……もういい……俺はかえ……」

「こんなところにいたのか、シャカ!？」

部屋に大きな声が響き渡る。振り返ると、なにやらシャカ同様、黄金の鎧で身を固めた影がいくつか立っていた。

「…なぜ君がここにいるのかね？」

「教皇様の命令だつてば。『迷子になったシャカを連れ戻して来い

!』つて」

「迷子?この私がいつ迷子になったのかね？」

「今だよ!!お前が任務に行ったつきり帰ってこないから、俺たち

が捜索に出されたんだ。」

「私は迷子になどなっておらん。」

ただ任務帰りに何故か見知らぬ森に入ってしまっただけだ。そこで住み良さそうな廃寺を見つけ、しばらく『神仏との対話』と『愚民どもに説法』をしていただけよ。」

「それを迷子というんだよ。帰れなかったから、その場所に居座り続けたんだろ？」

「危険な時こそ動かないと習わなかったのかね？」

「危険な時こそ攻撃！！つて習ったぜ。」

「俺もだ。だいたい、お前に危険な時なんて存在するのか！？」

「そのようなものあるわけなからう。」

「じゃあ……」

「だが、人生は何が起きるか分からんだ。いつこのシャカに危険が迫ってもおかしくなからう。」

よく分からない対話が続いている……アーマータイガーはシャカの関心が移っている今、移動したかったのだが、生憎と出口には仁王立ちをしている巨漢がいるので出られない……

「……だいたいさあ、ムウが家出したのも、ひよっとしてシャカと喧嘩したからなんじゃないのか？」

「何を言っておる？……そもそも彼には、秩序ある団体行動をとるなどという調和を求める精神が欠如しているのだ。だから勝手にふらりと出て行ったまま戻ってこないのだ。」

「そっくりそのままお前にかえすよ。」

「お前にも十分あてはまるだろ！！偉そうにしてるんじゃないねえ！！」

「偉そうに？何を言っている。私は神にもっとも……」

「知ってるよ！！聞き飽きたってば！！」

もういい！！力づくで連れて帰る！！『ライティング・プラズマ』
「！！！！！！」

「あつ！！ずるいぞ！！俺だって…『スカーレット・ニードル』！
！！！」
「はあ…仕方ない『オーロラ・エクスキューション』！！」
「愚民どもが…私を拝むがいい『天魔降伏』！！！！！！！！」
「うわあ！！！！『グレート・ホーン』！！！！」
「うぎゃああああああ！！！！」

いくつかの光の閃光が…真紅の衝撃が…絶対零度に近い凍気が…強
大なエネルギーが…猛牛を思わす拳圧が…決して広いとは言えない
寺の中で炸裂した。
謎の鎧を着ている異常な彼らはそこまで被害はなかったかもしれな
いが……………

それらすべての攻撃を浴びたアーマータイガーは、その衝撃で一気
に日本…………溝ノ口付近まで飛ばされたのだった…………

〈回想シーン終了〉

「…………それでヴァンプ様に助けてもらったのだ。」

遠い目をして言うアーマータイガー…………

「まあ、この支部は、俺にとって命を救われた場所。
全力で恩を返そうと、この支部の怪人になったわけだ。」

「そうですね…………」
「じゃあ俺はいく。いまからバイトだからな。」

戦闘員一号は、アーマータイガーの背中を見送りながら、こう思っ
た。

(そんな半端ない攻撃を耐えたアンタも異常だよ……)

FIGHT 30 悪魔猫の憂鬱

FIGHT 30 悪魔猫の憂鬱

「あれ？あれはどこにしまったんだっけ……」

「ごそごそとタンスの中を探すカノン……」

「ヤバいな……歳だな……いやいや！俺はまだ歳じゃない！！まだ三十路一步手前つというだけで、まだまだ若い！！」

「この物忘れはたまたまだ！！……とはいつても……最近、多いんだよな……物忘れ……」

「はあ……とため息をつくカノン……」

「僕も同じだよ、カノン！」

「丁度外出先から帰ってきたデビルネコが話しかけてきた。」

「そうなのか？」

「うん。すぐどの薬を飲んだか忘れちゃうの！
ほら、僕ってたくさん薬飲んでるでしょ？」

えっと……ほら、糖尿の薬・痛風の薬・胃腸の薬・高血圧の薬・関節痛の薬……」

「ああ、もういいから。」

次々に手に提げていたビニール袋から薬を取り出すデビルネコ。

「……ん？なに落ち込んでいるんだ？」

いつになく、不幸オーラ全開のデビルネコに気が付いたカノンは尋ねてみた。

まさか……病状が悪化して……最悪の事態になりそうだ……ということか？

「うん……なんで、僕だけ人気がないんだろうって……」

「人気？」

「うん。『ぬいぐるみ型怪人』ってみんな人気があるの……若い女の子に。」

「お前だって、フアンの子がいるのではないか？」

「いると言ったらいるよ……」

いつになく不幸そうな顔立ちのデビルネコ……

「今日もね、この薬達をもらいに病院に行ったの。ほら、高津警察署の前にあるでしょ？あの病院。そこでおばさん……というより、おばあさん達が可愛がってくれたの。」

「ならいいではないか。可愛がってくれる人がいて。俺なんて、そんなことなかったぞ。」

「えっ？」

「ああ……生まれてから13年間は女人と接点を得ることが出来ない生活だったからな。」

そのあと……海界復興に忙しかったから遊ぶ暇もなかったし……」

遠い目をするカノン……。

「あゝサガの奴が憎い……俺がコソコソ隠れて生きている中で黄金聖闘士として青春を謳歌しやがって……」

しかも俺が必死に海界復興して、あの馬鹿ガキどもを教育している間にも、教皇として裕福な生活をしてたしさあ……ブツブツ……」

「……カノンも大変そうだね……」

デビルネコに同情されるカノン。

「それに比べたら、お前は可愛がられて幸せだと思っぞ？」

「うん……でも、僕だけ可愛がってくれる人の年齢層が違うのが嫌だな……」

ウサ君は若い子に好かれているし、タレミ君もホストやるくらい好かれてるし……」

「タレミ君？」

「うん。歌舞伎町で「レイジ」という源氏名でホストをやっているの。店のナンバー1ホストなの。」

そこで、働かせてもらおうと思ったんだけど……落とされたんだ……やっぱり僕は可愛くないんだ……」

「なんでそうなる？」

他に理由があったのではないか？例えば……都合がつかなかったとか

……」

「……そうだよな……」

でも、なんで都合がつかなかったのかな？

『糖尿だから朝9時から働いて、夜にはしっかり上がらせて貰いたい』

って頼んだんだけど……」

「……ホストってどういう仕事か知ってるのかよ？」

はあ……こいつダメだ。と内心想うカノン……なんでだろうか……ものすごく疲れる。

こちらまで不幸になりそうな感じ……

「……よし、じゃあ……その『タレミ君』という奴の所へ行くぞ。」
「えっ?!」

カノンは立ち上がった。

「もう、お前の不幸面はうんざりなんだよ。」

『不幸』って感じでふるまう前に、行動に移しやがれ！

その『タレミミ』というモテ男にコソ聞きに行けばいいではないか。

「

デビルネコの顔に納得の文字が浮かんだ……が……

「でも……教えてくれるかな？」

「教えてくれるだろ。減るモノではないしな。それに……俺もついで行ってやるから。」

ヒマだし、遊びたいしな。」

ニヤリと笑うと、デビルネコも立ち上がった。

「ありがとう、カノン……！」

二人……というか、一人と一匹は歌舞伎町に向かった……

「ねえ、お兄さん！うちの店に来ない？」

「いやよ、アタシの所で遊びましょうよ」

「ダメダメエ……！ウチの店に来てよ！」

「はいはい。あとで行くから。」

「もう！今来て欲しいの！」

「意地悪う〜」

カノンは美女に取り囲まれていた。腕をつかまれたり、腰をつかま
れたり……カノンは振りほどこうと必死…のようだが、なぜか顔が
笑っている。

「悪い悪い、デビルネコ。」

で、その『タレミミ』という奴がいるクラブはどこなんだ？」

「……………もういい。」

夜のネオン輝く歌舞伎町……

いつになく、不幸なオーラを醸し出しているデビルネコだった……
…。

FIGHT 31 試練

「はあ〜！？テスト？」

カノンは自分よりはるかに小さな影を見下ろした。

「そうだ！！テストだ！！」

重要なテストだから今すぐ……」

「ちよつと待った！！」

黒い影が2人の間へと割り込んできた。

「そのテスト……俺からやらせてもらおう、カノンよ……！！」

FIGHT 31 試練

「……スライディングまでして、やりたいテストなのか？…ナイト
ール。」

カノンは割り込んでいた元・ヒーローの怪人、ナイトールに言った。

「ふふふ……分かってないな、カノンよ……俺がこの日のために、どれほどの修行を積んできたことか……」

ナイトールはそういうと、小さな影に向かって頭を下げた。

「さあ、お願いします!!ウサ兄さん!!」

「よろしい!!」

小さい影……こと、ウサコッツは重々しくうなずいた。

「……で、なにやってるんだ？」

「見て分らないのか？」

「いや……その……なんだ？それがテストなのか？」

そう……『テスト』というから、なんかもっと……ググツッと手に汗握るようなバトル系テストかと思ったのだが……

ただ、ウサコッツがナイトールのヒザの上に座っているだけ……

「うう……」

ウサコッツの表情が微妙になっていく……

「どうですか？ウサ兄さん？」

「うう……ウサコッツ・ランキングでは……161位!!……」

ウサコッツは叫ぶとナイトールの膝の上から飛び降りた。

「ひゃ……161位ですか!？」

「そつだよ!!前より下がってるじゃん!？」

「一体何をしてたの！？修行したんじゃないの！？」

プンスカ、プンスカと怒るウサコッツ。

「前より下がってるって…前もやってたのか？
というより…今のがテストだったのか？」

「そう！『ウサコッツ的・膝の上の座り心地ランキング』のテスト
！！」

前回のナイトールは153位だったんだけど…
ホントに何してたの！？」

「うう…とりあえず、自分の家で、ぬいぐるみを膝の上に座らせ
てシュミレーションを重ねたんですけど…」

「それしかやってないの！？」

「オマエな…修行したことが凄いと思うぞ？」

正直、俺なら何を修行していいのか見当もつかん。」

「じゃあ、次はカノンの番だよ！！」

さあ、早く座って座って！！」

「……はあ……」

乗り気ではないカノン……地べたに座り込み、胡坐をかくと、ウサ
コッツがチヨコンッと座ってきた。

「うーん……これは……」

「瞬黙り込むウサコッツ……」

「3位！！凄いよ、カノン！！」

「ええっ！！いきなりですか！！！！」

「……凄いのか??」

状況が理解できない（というより、理解したいと、あまり思わない）カノン。

「そうだよー！3位といたら、アントキラーと同レベルの『ソフアークラス』！！」

膝の上で映画を見ながらカーを食べたい！！って思えるレベル！ちなみに、2位は、かよ子さんとヴァンプ將軍で、

1位に輝くのはレッドだよ！」

「……レッドはお前の敵じゃないのか？

昨日だつて『レッド抹殺！』とか言っていたじゃないか？」

「まったく……敵ながら、あっぱれだよー！」

あの座り心地は『王の椅子』！！あゝ本当にいいよ………」

ほわわん……とした顔になるウサコツツだったが……

次の瞬間、キリツと厳しい顔つきになった。

「それに比べたら……なに？ナイトール？なめてるの？

君のは『公民館のパイプ椅子』を通り越して『公立中学校の落書きだらけでガツタンゴットンうるさい椅子』だよー！嫌悪感すら覚えるよー！！」

「そ……そんなに………」

ズーンつと落ち込むナイトール。

「また、次までに、もっと修行して、少しはマシになってよねー！！」

そういうと、ウサコツツは飛んで行ってしまった……

「……修行って……あれ以上何をしたらいんだよ………」

ポーンとするナイトールだったが……

「そつだ！！カノンさん！！」

「ん？」

「お願いします！！どうか3位の『ソファークラス』に座らせてください！！」

「はあ！？」

「お願いします！どんな感じが知りたいんです！！」

ナイトールが土下座して頼んでくる……

カノンは若干引いた。

「おい…それなら…あれだ！

お前の先輩のレッドに頼めばいいだろ？アレの方が順位上なんだし……」

「この間、拒否されたんですよ！！」

で、かよ子さんには悪いし、ヴァンプ様には恐れ多いし…アントキラー兄さんは先輩だから、座りにくいし……

ということ、カノンさんしかいないんです！！」

じりじり…と近づいてくるナイトール。……正直言っただけ気持ち悪い。

「お…おい！！近づくな！！」

「いいじゃないですか！！減るものじゃないし！！」

「ああもう！！気持ち悪い！！」

『ギャラクシアン・エクスプロージョン』！！！！」

ドッカーン！！

カノンが生み出した隕石が、顔面にクリーンヒットしたナイトールは遠くへ飛んでいく……

それを見届けたカノンは、はぁ……とため息をついて、新台が入荷したパチンコ屋に足を向けたのだった。

FIGHT 31 異界からの来襲者（前書き）

更新遅くなりました……。

本編でも行っていた「ぷりん帝国」とのコラボです！！

FIGHT 31 異界からの来襲者

青い星…地球……

ココの王者になろうと企んでいるのは、悪の組織・フロシャイムや冥王ハーデスだけとは限らない…

そう…この広い宇宙にいても不思議ではないのだ！！

FIGHT 異界からの来襲！？

「あゝ〜ヒマだ……」

カノンはふあゝ〜と大きなあくびをした。

…今日はフロシャイムの社内運動会……だ。

フロシャイムは悪の”組織”であって”会社”ではないのに、”社内”運動会というのは、間違っているかもしれないが、実質的に会社と変わらないので”社内運動会”の名称なのだそうだ。

で、ヴァンプを筆頭に何人かの怪人が”川崎支部代表”として今、

参加しに行っている。

カノンは留守番を頼まれていたのだ……元正義の味方の怪人・ナイトールと一緒に……。

「もう……なんでヴァンプ様は連れて行ってくださらなかったんです
ようか？」

僕、席取りとか荷物持ちをしないとイケないのかな……って思っ
ていたのに……」

「あ……きつとあれじゃないか？」

お前って元・ヒーローだろ？だから気を使ってくれたんじゃないか
？」

「あっ！！なるほど……さすがヴァンプ様ですね！！ますます尊
敬しました！！」

「尊敬するのか……アレを？」

ピンポーン

「はいはい！！今出ますよ！！」

風のように玄関へ向かうナイトール……仕事熱心なこと……とカノ
ンがせんべいをかじっていると、部屋にナイトールと……よく分か
らない三人組が入ってきた。

「誰だ？」

「えっと……以前、ヴァンプ様と知り合って今日ドイツから遊びに来
た「悪の組織」ぷりん」の人たちだそうです！！」

「…ドイツ？ドイツなのに”ぷりん”か？プリンといたら「イギリス」だろ？」

カノンは胡散臭そうに入ってきた三人組を眺めた。

1人は重そうな鎧で身を固めている奴。杖を持っているちっこい奴。それから…なんか角の生えている奴。戦闘力はヴァンプ達とほとんど…というところか……

「そうなんですか？

でも、以前、ヴァンプ様も言っていましたよ？「ドイツには”ぷりん”っていう組織がある」って…！」

「…まあいい。で、名前は？」

「えっと…こつちの鎧の人が”帝王”さんで、杖の人が”ジャバ”さん。そしてこつちが”ベムルズ”さんです…！」

「…ベムルスです…！」

「あっ…すみません…！」

「で、お前たちってどんな目的で来たんだ？」

「いやあ…私達全然はかどらなくて…よその人たちはどうなのか気になりますねエ…！」

ジャバが答えた。

「あのなあ…お前たち…！」

ガラガラガラ

「おい、ヴァンプー！かよ子が今日、昼飯作ってくれねえし、金がねえから昼飯食わせろ！！」

玄関のチャイムも鳴らさず、まるで自分の家のように入ってきた男……サンレッド。

一同は一瞬、固まった……が……。

「あつ！！つてめえ……かよ子のジャージ返しやがれ！！」

帝王を指差すレッド。その迫力に帝王はビクツと震えた。

「こら！！帝王様に指を向けるとは……！！」

ベムルスがカツとなり立ち上がる。

「へえ〜じゃあアンタが保護者ならアンタが弁償しろよ、かよ子のジャージ。」

へらへら笑うレッド。

「弁償！？悪の帝国……いや、悪の組織が弁償などするか！！」

「レッド先輩！その人たちは……」

「レッド！？もしかして”天体戦士サンレッド”か！？

なら好都合だ！今のうちにシネエエエ！！」

ベムルスはレッドに攻撃を開始した………が、

「うつせえ！とつとと弁償しやがれ！！」

ガッツウウン！！！！

ベムルスは2秒で地面と”こんにちは”をする羽目になった。

ベムルスは結局、なけなしの金をはたいて弁償することになったのだった……。

「へえ、あのヤローは留守か……」

ぷうはーっつと煙草を吸うレッド。

ちなみにベムルスが帰宅するまでジャバと帝王は川崎支部で待っていることになっていた。

「ふうくん……偵察ってわけか……」

で、分かっただろ？俺もひとり倒せねえのに世界征服なんて出来な
いって。」

「なにをお！？ぷりんの科学力をつかえば、こんな星……じゃなくて
……世界なんてあつという間ですよ！！！！」

憤慨するジャバ。

「あのなあ……レッドだけじゃないんだぞ……強いのは……」

遠い目をするカノン……

「お前たちが本気で世界征服をするなら忠告しておく。
ハッキリ言ってそれは不可能な望みだ。」

「なっ！？なんでですか！？少し聞きたいですね！！」

「……ギリシヤにはな……」

もうすぐ三十路なのに『愛だ』『正義だ』つと云う裸族がいてな……
…それだけなら『ただの変態』なのだが、そんな男に限って『銀河
を破壊する力』を持っているのだ……。

他にも『致死量をはるかに超える濃度をもった毒バラを栽培している男』や、『光速億単位の拳を持つ脳みそまで筋肉で埋まっている男』がいる。

酷いのは『神にもつとも近いといわれているのに、慈悲だけ持っていない男』や『あじやぱーっとか言っているが相手を一瞬で死後の世界へ招待できる男』なんてのもいる。

しかも全員がそろいもそろって黄金に輝く鎧を完全装備しているのだ！」

「……へ……へえ……」

あぜんとしているジャバ・ナイトール…
ちなみに帝王は寝ていて、レッドは

(面白そうだな…戦いてえ〜)

って思っていたりする。

「が、こんなのは序の口だ。」

「じょ…序の口い!？」

「ああ…本当に恐ろしいのは…あの女だ。」

「女…ですか？」

「ああ…いや…あれは女と言えないな…

心臓で矢を貫かれても生きていて…ってか生き返ってるし…
世界中の雨を一身に受けても平気だったうえに、途中から肺呼吸で
はなくエラ呼吸をしていたし…
血を吸い取る聖なる大甕に閉じ込められながら、自力で血を吸い戻
してるし…

最期にはアレを守護していた奴ら(星矢達)でも歯が立たなかった
ラスボスみたいな奴を杖の突きで殺していたし…

うん……やっぱりアレを女とは言えないな。それ以前に、アレを護
る必要もない気がしてきたぞ……」

遠い目をするカノン……あっけにとられるジャバたち……レッドで
さえ引いていた。

「だから、世界征服なんてやめた方がいいぞ。」

思わずここでジャバが「はい」「っ」と言いそうになったのは当然のことだったかもしれない……。

・帝王^{ていおう}

ぷりん帝国の帝王。本名は不明。物凄く重量のある鎧を常に着込んでいる。背中のマントには「P」の文字が描かれており、鎧の胸には「ていおう」と書かれている。基本的に無口な性格で、初期は喋っている描写があるが、後半になるにつれて殆ど喋らなくなり、その代わりに胸の文字がセリフ代わりになる、「〜と帝王は思った」とモノローグがある等、帝王の考えが読者に伝わるようになっていく。先代帝王の死により急に王位を受け継いだ。いかつい見た目に反して非常に子供っぽい性格であり、何かとうるさいジャバを面倒に思ったり、勝手にあちこちに行ったり、部下の怪人たちと遊んでいたりする。その子供っぽいにはジャバも頭を痛めてはいるが、根は優しい人間であり、時折ジャバを気遣う場面も見られる。そのためか国民には好かれている。甘いものとジャージが好き

・ジャバ

ぷりん帝国の長老的存在。常に杖を持っており、服の胸には「P」のマークが描かれている。帝王に代わり、帝国を取りまとめている。帝王のお目付け役でもあり、子供っぽい帝王の行動には頭を痛めている。思い込みの強い一面もあり、地球の事柄について度々誤解する。また、妻に先立たれている。

・ベムルス

ぷりん帝国軍団長。闘いにおいては強く、頼りになる男だが、私生活においてはホステスのたえ子に貢いでいるために、貧乏生活を送っている。スーパーマーケットなどの家庭的な事に関する知識が豊富。貧乏な料理が得意で、野草を食べる事もある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9450t/>

世界征服を企む漢達

2011年10月31日01時15分発行